山室軍平著

通俗基督傳

救世軍本營

始

4F103
974

山室軍平著

通俗基督傳 全

東京 救世軍本營

大正
2. 9. 10
内交

序

基督傳は幾ら研究しても盡きぬ問題である。文明諸國には何れも其國語にて之に關する幾多の著述があり、今後も歳月と共に、更に同じ程多數の著述が現はれるであらう。が扨それ等の書籍が悉く公けになつた處で、私共は尙ソロモン王を訪問したシバの女王と同じく、「其の半も未だ語られざりき」と、嘆息するの外はないことかと思ふ。

山室大佐補は此書に於て、一般讀者の前に、彼の人の子にして、神の子たり、また世の救主たる耶蘇基督の、純粹無垢にして且單

純なる物語を提供したるものである。

私共は此書が多くの人々を、此力ある救主に導かんことを期待しつゝ、之を送り出すものである。同時に耶蘇の教訓を受け、其贖の血に信頼する事は、凡ての義き生活を慕ふ者を潔め、高め、強め、進んで其同胞を祝福するに至らしむべきことを、保證し度こと望むものである。

少將　ヘンリー、シ、ホツダー

自序

既に「通俗」を標榜するからには、此書が世の學者物識の一顧をだも望むものでなく、專ら質朴熟誠なる茅屋の人民に、救主耶蘇基督を紹介する爲に、著はされたものであることを認められたい。

便宜上「基督傳」とは名けたものゝ、其實は唯基督傳中の重要なる事實に就き、其心靈的、實行的の教訓を尋ねた、言ば一種の感話說教集の如きものに過ぎない。これも亦豫め讀者の承認を請ひたき所である。

此書が幾分にても、萬民の救主にして、殊に「喪ひし者」「貧き者」

「至微者」の救主なる耶蘇を、我が平民社會に紹介することが出來たならば、著者の願は足るのである。

大將ウイリアム、ブース昇天後滿一年の當日

山室生

通俗基督傳

目次

第一章　ユダヤの國（約四〇二二）……一
第二章　天使の示現（太一〇二十一）……八
第三章　誕生（路二〇六、七）……一三
第四章　幼年時代（路二〇五十二）……二〇
第五章　田舍大工（可六〇三）……二五
第六章　野に呼べる人（路三〇四）……三一
第七章　野の試錬（來二〇十八）……三七
第八章　カナの結婚式（約二〇二）……四三
第九章　ニコデモ（約三〇三）……四九
第十章　サマリヤの女（約四〇三二）……五五

第十一章　歸省（路四〇二四）……六一
第十二章　人を漁る者（太四〇十九）……六七
第十三章　山上の說教（太六〇九）……七三
第十四章　十二使徒（太十〇十六）……七九
第十五章　弱者の友（太十八〇十四）……八五
第十六章　種蒔の喩（太十三〇三五）……九一
第十七章　奇蹟（太十四〇十四）……九七
第十八章　生命のパン（約六〇三五）……一〇三
第十九章　變貌山（路九〇三五）……一〇九
第二十章　活ける神の子（太十六〇十六）……一一五
第廿一章　不義者（約八〇七）……一二一
第廿二章　善きサマリヤ人（路十〇二七）……一二七
第廿三章　貞潔（太五〇二八）……一三三
第廿四章　兒童（可十〇十四）……一三九
第廿五章　凡ての人の僕（可十〇四四）……一四五
第廿六章　放蕩息子（路十五〇十）……一五一
第廿七章　上京（路十九〇四十）……一五七
第廿八章　國家と宗教（太二二〇二一）……一六三
第廿九章　晩餐（約十三〇十四）……一六九
第三十章　ゲッセマヲ（太二六〇三九）……一七六
第卅一章　十字架（太二七〇四十）……一八一
第卅二章　復活（約十一〇二五）……一八七
第卅三章　昇天（徒一〇八）……一九三

以上

通俗基督傳

山室軍平著

第一章　ユダヤの國

參考（馬太傳一章一節至十七節）

「救はユダヤ人より出づ」（約四〇二二）

百姓が稻を作るには先づ苗代にて苗を育て、それを他の田地に移し植ゑる如く、神樣は其昔ユダヤといふ小さな國を苗代とし、そこに世界人類の救主なる耶蘇基督を生れさせ、そこに有難い神樣の御敎の種を蒔き、そこから取つた福音の苗を、追々萬國萬民の間に移し植ゑさせ給ふことゝなつた。「救はユダヤ人より出づ」といふてあるのは、其事である

ユダヤといふ國は亞細亞の西の端にあり、我が日本の四國と同じ位の廣さである。其

位置は西北に歐羅巴を眺め、西南には亞弗利加を控へて居る。つまり歐羅巴と亞細亞と亞弗利加との三大陸の間にあつて、小さいながらも何彼につけ、其三大陸の性質を一纏めに備へて居るといふのが、ユダヤの國の特色である。其氣候から言ふても、風土から觀ても、動植物の狀態から考へても、ユダヤは立派に歐羅巴、亞細亞、亞弗利加の三大洲の小さい雛形見た樣な趣がある。而して神樣が此ういふ珍らしい恰好な國を見立て、宗教上の苗代となし、そこに育つた基督教の苗を、廣く世界萬國に移し植ゑさせ給ふことゝなつたのは、如何にも興味のある話である。

ユダヤ人の先祖はアブラハムといひ、今から彼此れ四千年も前に其地方に移住して來た人である。アブラハムは世間の人が專ら偶像邪神に事へて居る時代に、逸早く獨一の眞の神樣を信仰した人であるが、それでは何うしてアブラハムが斯く眞の神樣を信仰する樣になつたかといふ事に就ては、面白い言傳が遺つて居る。其頃アブラハムは木佛金佛など拜むのは馬鹿らしいことだと心付ながら、まだ其代りに拜むべき眞の神樣の事を知らなかつた。或夜外に出て燦爛たる天の星を眺め、思ふ樣「此不思議な星

は日頃求むる神樣ではあるまいか」と、これを拜んで居る最中、忽ち大きな月がぬつと顏を出した。「これは星よりも大きい上に明るいから、同じ神樣として拜むならば此方が優であらう」と、アブラハムは其夜一夜、一心に月を拜んで居ると。其うちに東の空が白み、今度は威勢の好い太陽が雲を破つて躍り出た。「待てよ、これは又月よりも一段と大きくて、明るく、お負けに暖かいから、これを神樣として崇めるに如くはあるまい」と、其日一日太陽を拜んで居ると、夕方になつて其太陽が亦西の山の端に姿を隱した。「これでは何うも心細い、どうせ拜む程なら、晝といはず、夜と言はず、いつでも斷間なく守つて下さる神樣を拜み度ものである」と。此ういふことからアブラハムは、終に星でも、月でも、日でも、または山でも、河でも、草でも、木でも、禽も、獸も、人間も、一切の物を造つて之を支配なし給ふ獨一の眞の神樣の御存在なさる道理を發明し、眞實をこめて一生涯之にお事へ申す樣になつたのださうである。

アブラハムの子はイサク、イサクの子はヤコブ、此ヤコブに十二人の男の子があつて、後に十二の種族の先祖となつた。其時分に大きな饑饉があり、一同は食を求めて埃及

の國に移り、引續き四百年ばかりも其國に住むうち、其國民から憎まれ、果は奴隷として虐待を蒙ることゝなつたが。其時神様はモーセ、ヨシュアなどいふ豪傑を起して、之を埃及の國から救ひ出し、當時のカナン、即ち後のユダヤの地方に導き、そこを永住の所と定めさせ給ふた。此モーセは又神様の敎を授かり、色々と貴き律法を定めたが、中にも十誡といふのは、今日迄も大切なる神様の御誡として重んぜられて居る。即ち左の如し。

一、汝我が前に我の外神ありとす可らず。（眞の神様の外の者を神様と崇めてはならぬ事。）

二、汝の爲に偶像を造る勿れ、此等にひれ伏し、又事ふる勿れ。（偶像邪神を拜んではならぬ事。）

三、汝の神エホバの名を妄りに言ふこと勿れ。（神様のことを不眞面目に口にしてはならぬ事。）

四、安息日を忘れずして之を聖日とせよ。（七日に一日を禮拜日として守る事。）

五、汝の父と母とを敬へ。

六、殺すなかれ。

七、姦淫を行ふなかれ。

八、盜むなかれ。

九、虛僞の證據を立る勿れ。（嘘をいふてはならぬ事。）

十、貪る勿れ。

此モーセの律法といふものは、ユダヤの人民の信仰心を養ふ上に、大きな影響を及ぼしたものである。

アブラハムから千年程後にダビデといふ人が現はれた。これは牧者から起つて其國の王となつた豪傑であるが、亦極めて信仰の篤い人で、其作つた詩歌は今も聖書の中に多くのこつて居る。其子ソロモン王の治世は其國の全盛時代にて「ソロモンの榮華」といふ語が、後の世迄も傳はつて居る位である。間もなく國は南朝北朝の二つに分れ、お負けに外國から度々攻め寄せられ、國民は一度ならず、捕虜となつて他國に連れ行

かれた様なことさへあり。領分は縮まる、人民は流離になる。終には全く獨立を失ふて羅馬といふ國の屬國となつてしまふた。これは救主耶蘇基督が御誕生になつた三十年餘り前のことである。其間人民の信仰心には斷ず浮き沈みがあつたが、それでも「人窮すれば則ち元に反る」習。國が亂れ、敵には無慘な扱を受け、又は捕虜となつて見も知らぬ異國の空に彷徨ふ如き場合になつては、大概いつでも先祖達の信仰した神様の事を思ひ出し、謙遜つて其御助を祈り求めたものである。殊に國家の運命がそろ〳〵危なくなりかゝつて後、引續き現はれたる預言者といふ人達の中には、神様が程なく一人の特別なるお方を世に遣つて憐れなる人民を救ひ給ふこと、又今にも其お方がお出になる筈だといふ樣なことを敎へたものが多くあり。心ある人々は一般に、神様の許から其特別なるお方がお出になるのを、今か今かと待ちこがれて居つた樣な有さまである。

ひとりの嬰兒我等の爲に生れたり。我等は一人の子を與へられたり。政事は其肩にあり。其名は奇妙、又議士、又大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん。其政事と平和とは增し加はりて窮りなし。且ダビデの位に座りて其國を治め、今より後永久に公平と正義とを以て之を立て、之を保ち給はん。萬軍のヱホバの熱心之を成し給ふべし。（賽九〇六、七）

これは昔の預言者が、やがて神様から遣らるべき特別なるお方、即ち救主の事を、前以て敎へて置た中の一例である。

斯かる時しも救主耶蘇基督は則ち世に現はれ給ふ事となつた。耶蘇基督は雷にユダヤの人民とのみいはず、遍ねく世界の人類が假令口にはそれと明かに言得ずとも、實は一日千秋の思を以て待こがれて居る所の救の惠を與へん爲に、此世に降り給ふた御方である。耶蘇は罪に滅ぶる世の人を救ひ、神の御國を此世界に打建ん爲に神樣から特別に遣はされたる其御獨子である。マルタといふ婦人が後に「我汝は世に臨るべき基督、神の子なりと信ず」といふたのは、如何にも道理のある言であると思ふ。

第二章　天使の示現

參考（馬太傳一章十八節至二十五節）

「其名を耶蘇と名くべし、蓋其民を罪より救はんとすればなり。」（太一〇二十一）

神様の御獨子耶蘇基督が人間の姿をとつて世に現はれ給ふたのは、今から千九百餘年前、我が朝の垂仁天皇の御代のことである。其頃神様の靈は清き處女マリアといふものゝ胎に宿り給ふたが、そんな事とは知らぬ聘定の夫ヨセフは其意を解し兼ね。多分マリアが不義密通でもしたのであらうと思ふ故、竊つと其聘定をやめて離縁し樣と考へて居る時。或夜天の使はヨセフの夢に現はれて、「ダビデ王の裔なるヨセフよ、汝妻マリアを娶ることを懼るゝ勿れ、其孕める所の者は聖靈に由るなり、彼子を生まん、其名を耶蘇と名くべし、蓋其民を罪より救はんとすれば也」と、示されたので。ヨセフは始めて事の次第を曉り、大事にマリアをいたはつて身二つにならせたが、其生み落したる男子が即ち耶蘇基督であつた。天の使はマリアの胎に宿つて居る兒供の

事に就き、「其名を耶蘇と名くべし、蓋其民を罪より救はんとすればなり」と申した。「耶蘇」といふのは希臘の語で、これを日本語に直せば、「救主」といふ樣な意味である。即ち神樣の御獨子耶蘇は、名詮自稱、世の人を罪の中から救ひ出さん爲に、態態人間の姿をとつて此世に現はれ給ふた御方である。

然らば罪とは何か、又耶蘇基督が人を罪から救ひ給ふとは何ういふことかと考へて見るに。聖書に「凡ての不義は罪なり。」「善を知つて之を行はざるは罪なり。」又「信仰に由て爲さゝるは罪なり」などゝあり。人が何んでも自分勝手の事を行ひ、神樣の思召を思はず、人の爲を考へず、本心のとがむる惡事をなし、又は善事と認むる所を行はないのが、凡て皆神樣の前に罪である。而して人は皆、いつでも此ういふ罪のみ犯して居る故に、胸の中には心配苦勞の斷間がなく、さま〳〵の苦勞難儀を我が身に招き、他人に良くない模範を見せた上に、飛んだ迷惑を周圍の人々に及して居る。罪人は亦末終に浮む瀬もなき滅亡に墮つべき筈のものである。人間世界の一切の禍は、皆人の犯せる罪から起るもの故、私共は何はさて措き、先づ自分を罪より救ひ、進んで

は亦他人を罪より救ひ出さん爲に力を盡すべき筈のものである。

然るに復考へて見れば、人は自分で自分を罪から救ひ出す力を有つて居ない。即ち昔王陽明が「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」といひ。又マルチン、ルーテルが、「我は羅馬法王よりも大僧正よりも我が心を懼れる。なぜかといふに我が心の中には、己といふ羅馬法王が跋扈して居るからである」といふたのは、皆此罪の力の勝ち難いことを言ふたものである。或る舊い書物に角力取の繪をかいて其上に、「負けることをば嫌やるげなが、なぜに慾にはよう勝ぬ」と記してあつた。兎角他の事には負け嫌ひの人間が、自分の我儘氣儘にばかりは、見苦しい敗北をとつて居るのが世の習である。然らば私共は如何にして其罪の力に打ち勝つ可きかといふに、それは救主耶蘇基督にお縋り申上げ、其御助を求むる外に方法はない。

神様の御子耶蘇基督は人を罪から救ふ救主である。といふ意味は、第一、耶蘇は、私共の過去に犯せる罪を赦すお方である。人は皆物心がついてから今日迄、其本心にとがむる多くの惡を行ひ、善と氣付た事を行はず、神様の御前に山なす罪を重ねて居る。

併しながら私共が若し悔改めて耶蘇を信仰するならば、神様は其十字架の功德に免じて、私共の罪愆を赦し給ふ。昔の人も、「心から心の鬼が身を責める」と言ふて居る如く、人は本心にとがむる事のある間は、決して安心も滿足もあつたものでない。それ故昔から自分の罪愆に氣の付た人々は、どうかして其罪滅しをしたいといふので、難行苦行をする者あり、慈善喜捨を行ふ者あり、堂宮を建立するものあり、犧牲を献げてそれに免じて罪の赦を願ふ人もあるなど、色々と苦心をしたものである。さり乍らこゝに唯一つ天の眞の神様が人間の罪愆を赦す爲にお立になつた方法があつて、それは救主耶蘇を信仰し、其十字架の血汐の功德に縋ることである。「そは人皆既に罪を犯したれば神より榮を受るに足ず。唯基督耶蘇の贖によりて神の惠を受け、功なくして義とせらるゝなり。」とあるのは此事である。私共は耶蘇基督に由て過去の凡ての罪を赦して戴かねばならぬ。

第二、救主耶蘇は又、現在、私共の罪に穢れたる心を潔め、新しい心を有つた人間とならせ給ふ。人が眞實を以て耶蘇基督に縋る時、基督は私共の靈魂を入かへ、以來

これ迄と異ふて惡い事を心から厭ひ、善い事を眞實に好く樣な人間にならせ給ふ。「人基督に在る時は新に造られたる者なり、舊きは去りて皆新しくなれり。」又「汝等靈に由て歩むべし、さらば肉の慾をなすことなからん。」などゝあるのは、基督に救はれて、現在此世ながらに一切の罪と緣を切つた世渡をなす可き事を敎へたものである。譬へば同じ一升德利でも酒を入れてある間は酒德利だが、酒をこぼして後を洗ひ、醬油をつめれば醬油德利となる如く。同じ五尺の體を有つた人間も、惡き心を有つて居る間は憐れな一箇の罪人であれど、一旦耶蘇基督に救はれて新しい心を有つた人間となれば、昨日迄の罪人は一變して今日は神樣の僕となつて居やうといふものである。此の如く基督の救は人を現在の罪より救ひ、これを生れ更りたる善人とならしむるものである。

第三、救主耶蘇は又私共が此世の旅路を終へたる後、滅亡に陷ることなくして天國に入り、限りなく神樣の御惠の中に生き存へらるゝ樣、未來の救を授け給ふ御方である。其事に就き基督は或時、「誠に實に汝等に告ん、我が言を聞き、我を遣はしゝ者を信ずる者は永生を有ち、且審判に至らず、死より生に遷れり」と仰せられた。此の如く基督の救は、私共を未來永遠の滅亡より救ひ出す所の救である。

ジョン、ニュートンといふ宗敎家が年寄つて後、兎角物忘れをする樣になつた時の物語に。「それでも、こゝに二つだけ、何うしても忘れられぬ事實があつて、それは私が大罪人であつたことゝ、また耶蘇基督が私を救ひ給ふた事と、それ丈である」といはれたさうである。此の如く人は皆神樣の前に罪人だといふ事と、耶蘇基督が其罪人を救はん爲に此世に來り給ふたといふ事と、此二つは何時迄も變ることなき、基督敎に最も大切なる奧義である。

第三章　誕生

參考（路加傳二章一節至三十八節。馬太傳二章）

「こゝに居りて產期滿ちければ冢子を生み、それを布に包みて槽に臥せたり。」（路二〇六、七）

羅馬の皇帝カイザル、アウグストといふ方より戸籍調査の嚴命が出で、寄留地に在る者は皆一先づ原籍地に歸つて登錄の手續をせねばならぬことゝなつたので。當時ガリラヤのナザレ村に住んで居つたヨセフは、其臨月に近い聘定の妻マリアを携へ、南へ凡そ三十二三里を距つるユダヤのベテレヘム村を指して旅立することゝなつた。既に到着して見ると、時節柄何れの旅舍も悉くお客が一ぱいで、泊るべき室がない故、止むなく或宿屋の庭の隅にある廐を取片付けて、そこに一夜を明すうち。妊婦は忽ち產氣附き、軈て玉の如き男子をうみ落したが、他に方法もないので取敢ず嬰兒を布で包み、之を槽の中に臥さしめた。此の如きものが即ち神樣の御獨子、世の救主なる耶蘇基督が、人となつて此世に現はれ給ふた時の御有樣である。さてもお痛はしい事ではないか。

第一、世界人類の歷史に何より大切な事件である耶蘇基督の御降誕は、斯くして寂しく、靜かに、一向世間の人の注意をも惹かずに行はれた。唯其夜ベテレヘムの村外れに羊の群を番して居たる數人の牧者があり、不思議なる天の使の御告に由り、救主の

御誕生になつた事を知り、打連れて其宿屋を訪ね、むさくるしい槽の中に布にて包まれたる嬰兒を見出し、神樣を讃めて歸つたといふことである。此の如く世の人が誰一人まだ神樣の御子の御出現を知らない時、一番先に尋ねて來て之を拜んだ者は、無學にして正直なる牧者であつたといふのは面白いことである。一體宗敎といふものは唯頭ばかり考ふべき道理ではなくて、却つて心で味ふべき事實である。それ故假令無學でも、愚鈍でも、正直なる心を以て神樣を信仰する者は、理窟には明るくても不正直なる學者物識よりは、却つて道に進むことが早いものである。乃ち救主耶蘇が後日の御祈禱の中にも「天地の主なる父よ、此事を賢き者智き者に隱して赤子に顯はし給ふを謝す。父よ然り夫れ此の如きは聖旨に適へるなり」とある如く。神樣は何時の代にも質朴にして熱心なる平民貧民を導き、これに案外深き信仰の奧義を示し、其御榮の爲に働かせ給ふ如き例が多い。或大學校の敎授が一人の至つて無學なる救世軍の兵士に對ひ、「お前は基督が何んといふ國で生れた方だか知つて居るか」と問はれると。「知りませぬ」と答へた。「それでは基督を生んだ母の名は。」「知りませぬ。」「基督はどう

いふ一生を送られたか。」「知りませぬ。」「基督は幾歳で此世をお去なされたか。」「知りませぬ。」「基督はどういふ御最後を遂げられたか。」「よく存じませぬ。」「それではお前は一體基督のことに就て何を知つて居るのか」と問ふと。答へて「一向何も存じませぬけれ共、唯基督様基督様といふて、お縋り申したお蔭で、以前は仕方のない無賴漢であつた私が、今では御覽の通り堅氣な勞働者になることが出來ました」といふたさうである。それ故どんな無智無學の人でも失望することはない。神様は學者や物識をのみ贔負する方ではなくて、却つて特別に大多數の貧民平民に目をかけて之を憐み給ふ御方である。

第二、ヨセフとマリアとは嬰兒が生れて四十日目に、當時の風習に從ひ、嬰兒を抱いてエルサレムといふ其國の首都に上り、神殿に參詣して献物をなし、嬰兒の爲に献身式を執り行ふた。處が其場に居合せたるシメオンといふ老翁と、又アンナといふ老媼とは、その嬰兒が行末世の救主となるべきお方であることを曉り、喜んで之を祝ひ、また神様の深き御惠を感謝した。此二人の者は其時代の眞面目なる宗教家の代表者とも見るべき人達である。其外にも當時ユダヤの國には幾百千人の宗教に身を委ねた人は居たのであるが、多くは所謂「坊主の不信心」で、宗教を唯糊口の種となし、儀式や禮典の末にのみ拘泥して、眞に神様の思召を行ひ、世の人の爲に盡すといふ樣な精神を有つた人が至つて稀れであつた。併しながらシメオンとアンナ女とは眞實なる宗教家であつた。それ故神様の特別なる御導により、逸早く嬰兒なる耶蘇を拜むことが出來たものと見える。身を宗教に委ぬる人々は、信仰のことに狎れて、型に入つた樣な宗教家となることなく、いつも新鮮快活なる靈の生命を胸の中に蓄へ、斷ず神様の御聲に耳を傾け、其大御心を辨へて居る樣にあり度ものである。

第三、エルサレムから一應ベテレヘムに歸つた處へ、今度は三人の東方の博士が尋ねて來た。此人達は我朝の昔安部晴明などがやつて居つた樣に、天文をくつて人間の事を占ふ學者であつたが。耶蘇が御誕生の砌、西方の天に不思議な星が現はれたのを見、是れ必竟「ユダヤ人の王」たるべき豪い御方がお生れになつた徵候に相違ないと、數百里外の遠國から星を目當に尋ねて來たのであつた。此博士等は其當時エルサレムの

邊に住んだ多數の學者の樣に、唯理窟ばかり心得て居つた物識とは違ゐ、却つて篤く神樣を信じ、懇ろに道を求むる敬虔なる學者であつた。ユダヤ人の王として生れ給へるお方を拜み度ばかりに、長途の旅路を厭はず、多分の物入を惜まず、さて愈々嬰兒なる耶蘇が其母マリアの膝の上に在すお姿を見ては、寶の筐を開いて黃金、乳香、沒藥などを取出し、之を其前に献け、禮拜して歸り去つたといふことである。學者となるならば、何卒此ういふ、神樣を敬ふ眞實なる學者になつて欲しいものではないか。

第四、處が其當時羅馬の皇帝より任命せられ、ユダヤ全國を支配して居つたヘロデといふ王樣は、無慈悲と殘酷とで知られた人であつた故。前に東方の博士がエルサレムに立寄り、ユダヤ人の王として生れ給へる嬰兒の御誕生の地を聞合せ、それがベテレヘムだと分つて其地に出かけた事を知るものから。然ういふ嬰兒を生かして置ては氣がゝりであると、人を遣はしてベテレヘム村に居る二歳以下の男の兒を皆殺させた。斯くすれば東方の博士が言ふた其嬰兒も、屹度其中に死んで居るだらうと想像してのことである。どういふ無法な事をしたものであるか。併しながら神樣は豫めヘロデ王の斯かる惡計を知り給ふ故、ヨセフに命じて其妻のマリアと嬰兒とを携へ、前以て遠く埃及の國に避難させてお在になつたので、危なく毒手を免れることが出來た。斯くてヨセフはヘロデ王の世を去らるゝ頃迄埃及に留り、後其地を立出てユダヤに歸り、再びガリラヤのナザレ村に行き、そこに住居を定むることゝなつた。これは舊約聖書にある、埃及のパロ王がイスラエル人民を苦しめんとて、其產れて來るほどの男の兒を皆殺させて居つた處、案外にも我娘が河のほとりで拾ひ上げた一人のイスラエル人の兒が、後にモーセといふ豪傑となり、埃及の國民と戰ふてイスラエル人民を救ひ出したといふのと似た樣な話である。人は到底神樣の御攝理に逆らふことは出來ない。「汝刺ある鞭を蹴るは難し。」天に向ふて唾する者は其顏に穢を受ける道理であれば、私共は天畏ろしいといふ事を知つて、平生聊さかたりとも神樣の聖旨に適はぬ事は之を行はぬ樣、其心がけが何より大切である。

第四章　幼年時代

参考（路加傳二章三十九節至五十二節）

「耶蘇智慧も齡も彌増り神と人とに益〻愛せられたり」（路二〇五十二）

不經福音書といふものがあつて、聖書にない耶蘇基督の御物語を多く載せてある。其中には幼き耶蘇が泥で造つた鳥に命を吹き込み、本統の鳥として飛ばせ給ふたとか。又は其友達を山羊の子に變らせ給ふたとかいふ樣な、奇怪な話がのこつて居る。併しながら新約全書に錄してある正史實傳の耶蘇は、極めて自然なる順序を逐ふて、全くの「人の子」として御成人になつたものゝ樣に見える。もとより其時代の事に就て、聖書に餘り精しい記錄はないけれ共、それでも私共が、そこゝの紀事の端々から想像し得べき數箇條の事實がある故、それを今左に雜と申述べ度と思ふ。

先づ第一に注意すべきは幼き耶蘇が、信仰篤く德高き母の養育を受けられた事である。マリアの連合であつたヨセフは、これも中々に立派な人柄の男子であつたに相違ない。

併しながら其妻マリアに至つては、流石に世の救主を產む名譽を戴いた丈に、世にも稀れなる淑德の婦人であつた。マリアは其初天の使から耶蘇を產み奉つるべき神樣の御旨を伺ふた時、答へて「我は是れ主の使女なり、汝の言へる如く我にあれかし」と申した。此「我は是れ主の使女なり」といふ覺悟は、マリアの一生涯を貫いた高尙なる精神であつた樣に見える。マリアは身も魂も一切神樣に献げ、唯其思召を行はん爲に世に生き存へたものである。隨つて其幼き耶蘇を育てる上にも、斷間なき祈禱と行屆きたる注意とを以て、之に當つて居つたのは言ふ迄もない。之は幼き耶蘇の場合だけでなく、昔から大に神樣に用ゐられたる人物の中には、幼い時代に善き母の養育を受けたる者が多い。ジョン、ウエスレーと其弟チャールス、ウエスレーとの母なるスザンナは、家庭敎育に力を盡した婦人である。或時其夫が妻の兒供を敎へる上に根氣の好い事を不思議がると。答へて、「それでも二十遍敎へれば憶える筈の學課を、十九遍で止めたら惜しいではありませぬか」と言ふたさうである。此ジョンとチャールスと二人のウエスレーが、後にメソヂスト敎會の先祖となり、當時腐敗し切つた英國の精

神界を一新し、引ては世界の各國に迄大なる感化を及ぼしたものである。大將ウイリアム、ブースの母は、亦慈悲深く忍耐强き行屆いたる婦人であつた。即ち大將の言に「神樣が此世にて人間に賜はる最大の賜物は恐らく神々しき母であらうと思ふ。神々しき母は其子の未來を造るものにて。之に善良なる思想傾向を與へ、將來非常なる大變化のあらざる限り、其子が此世にて幸福なる生涯を送り、來世にては亦永遠の生命を得べき土臺を据るものである。而して私は實に然ういふ善き母を授かつて居たのである」といふてある。諺に「搖籃を動かすの手は世界を動かす」といふこともあれば、人の母たる者は其子に對する責任の大なることを知り、之を十分滿足に盡さんことを心がけねばならぬ。

第二、幼き耶蘇は其身體上、至極健全なる發育を遂げられたものと見える。其後日寢食を忘れて、傳道及び慈善の爲に劇烈なる運動をせられた時の如きも、別に甚しく身體に障らなかつた事を見れば、平生どんなに健康が優れてお在なされたかを察する事が出來る。私共は又身體の健康を重んじねばならぬ。我が肉體は即ち神樣の靈を

宿すべき神殿であることを知つて、出來るだけ大切に之を扱はねばならぬ。

第三、幼き耶蘇は又隨分と學問の道を勵まれた樣である。もとより耶蘇はナザレの片田舍にて、殊に大工を生業とする貧しきヨセフの家に人となり給ふたので、所謂學校教育の便宜は甚はだ少なかつた。がそれにも拘らず、耶蘇が事情の許す限り其智慧力量を磨く爲に力を盡し給ふたのは疑がない。或は言ふのに、耶蘇は希伯來語と、希臘語と、アラマイック語と、都合三つの語を御存知であつたらしいと。果して然うであつたとすれば、唯其事だけでも、耶蘇が平生どんなに學問の道をお勵みになつたか想像されることである。

第四、幼き耶蘇が、又どんなに聖書の研究に心をこめ給ふたかといふ事は、其十二歲の折、兩親に連られて、エルサレムの市に上られた時、神の殿に行つて、そこに居る教師達から色々信仰の話を聞き、又聖書の事を問ひなどして、歸ることを忘れられたといふ御物語に由ても、明かに知られる。ヨセフとマリアとは多分耶蘇が道連れの中に居らるゝものと思ひ、都を立出て家路に上りたる後不圖氣が付て、親戚知人に聞合せ

たけれ共見出さず、驚いて今一度エルサレムに引返し、そこ〳〵と探しあぐんだ後、終に殿にて幼き耶蘇が多くの教師と問答して居られるのを發見した。そこでマリアは「子よ何ぞ我等に斯くなしたるや、汝の父と我と憂へて汝を尋ねたり」といふと。耶蘇は答へて「何故我を尋ぬるや、我は我が父の事を務むべきを知らざる乎」と言はれたとある。これに由て見れば、幼き耶蘇は唯聖書を熱心に研究して居られたばかりでなく、其頃から早くも既に、天の父なる神様の聖旨を行ふ爲に生き存ふべきことを、十分覺悟して居られた事が分る。さても勿體ない御心がけではないか。

第五、今一つ幼き耶蘇に就て是非注意して置き度のは、其兩親に孝行であられたことである。それに就て聖書には「耶蘇兩親と共にナザレに歸りて、彼等に順ひ居れり」と書てある。即ち耶蘇は孝行なる子として飽く迄其兩親に順ふてお在なされたのである。基督教と親孝行と何ういふ關係があるか知り度と思ふ人は、耶蘇が其兩親に孝行でお在なされた事實を深く考へねばならぬ。後に耶蘇が神様から遣されたる救主として、天國の福音を世に傳へ給ふ時にも、其御教の大主意は天の神様を親とし、人類を兄弟とし、末終に全世界を擧げて之を神様といふ父上の御支配なさる、愛の一大家庭にし様といふ外はなかつたのである。而して此の如きは決して親兄弟を粗末にし、又は家族に對する務を輕んずる人の口から宣べ傳へらるべき福音でない。却つて其反對に飽く迄も温かい家庭の情愛を深く味ふた人物に由てのみ、唱へ出でらるべき教であることは、少しく物の道理の分る人には直ぐに合點さるべき事柄である。

或時七歳になる印度人の兒供が、耶蘇の幼い時の御物語を聞て後、祈つて言ふには、「神様よ、どうか私を耶蘇様が七歳でお在なされた時の様な善い兒にして下さいませ」と、いふことであつた。私共は亦何卒此ういふ心がけの兒供等を、多く育て上げたいものである。

第五章　田舍大工

參考（馬可傳六章一節至六節）

「彼は木匠にあらずや。」（可六〇三）

「子に職業を敎へざるは、之に盜賊を敎ふる也」と。昔のユダヤ人は此ういふ考へにて其男の子が十二歳になるのを待ち、生活に困らぬ人でも皆これに何等かの職業を敎へる風があつた、況してナザレ村のヨセフは、自分が貧しい一箇の大工である上に、子供の數は增すやら、自分は追々年が寄るやら、其日其日の煙を立てることさへ容易でないゆゑ、其一番年長の男子なる耶蘇に同じ大工の職業を敎へ、早く家計の助をなさしむるに至つたのは、一向不思議もないことである。

とはいへ、耶蘇は尋常のお人でない。これは神樣の御獨子が世の罪人を救はん爲め、暫く人間の姿をとつて現はれ給ふたものである。それさへ勿體ないことの至であるに、今は自分から亦一箇の田舍大工として、木をきり板をけづりつゝ、額に汗して働き給ふことゝなつたのは、どういふ恐れ多い事であるか。

私共は斯く大工の仕事着をきて、ヨセフの工場に働き給ふナザレ村の耶蘇を胸の中に思ひ浮べ、身に引當て學ぶべき敎訓が多々ある樣に覺える。

第一、田舍大工としての耶蘇は勞働の神聖なることを敎へ給ふたものである。世には勞働することを耻ぢ且つ厭ひ、反つて何の爲すこともなく日を過すのを上品な生活の樣に心得る愚者がある。併しながら勞働することは人間の務である。勞働は人が神樣から授かりたる本分を盡す方法にて、亦生て甲斐のある世渡をする手段である。人の健康は勞働せずには之を保つことが困難にて、人の智慧力量は亦勞働なしには之を養ふことが六づかしい。又此世で獨立自營の生活を營まふとするには、どうしても骨惜みなく勞働することが必要である。昔から居候をうたふた川柳に滑稽なのが多くあり。

「居候三ばい目には竊つと出し。」「居候お茶が熱いと飯でうめ。」又「居候出さば出る氣で四はい食ひ。」などゝあるのは、何れも皆自分で勞働することを厭ひ、他人の勞力に由て飯を食ふとする者の、意氣地のない有樣を穿つたものである。或學者の說に「此世に三種の人物があつて、第一は先方で承知しないのに强て他人の勞力に由て飯をくふものにて、これは即ち泥棒である。第二は先方で承知した上他人の勞力に由て飯をくふものにて、これは即ち乞食である。第三は自分の勞力に由て自分の糊口をするものにて、唯これ丈が人間の數に入るべき眞の人間である。」といふことであつた。人は又

勞働せずには、高尚なる精神を養ひ、立派なる品性を造り上ることが出來ぬものである。「小人閑居して不善をなす」とか、又は「何もなす事なくして惡事をなす」とかいふてあるのは、勞働を厭ふ者がいつの間にか罪惡に墮ちて行く有樣をいふたものである。

さり乍ら神樣を敬ふて一生懸命に稼ぐことは、身心共に壯健にして不羈獨立なる生活を營む所以の方法である。亦堅實にして信賴すべき品性を養ふ所の手段である。古人も「勞働は即ち祈禱なり」といふて居る通り、根氣好く、辛抱强く、正直の額に汗して己が本分を盡すことは、其儘に最も高尚なる神信心の道である。而して田舍大工として働き給ふたナザレの耶蘇は、此最も大切なる敎訓を、誰にも分る樣に其身を以て敎へ給ふたものである。

第二、次に田舍大工としての耶蘇は、淸貧の尊むべきことを示し給ふたものである。貧乏は兎角不自由勝である。金錢は此世で最も大きな力の一つに相違ない。併しながら私共は別に金錢よりも貴いものゝある事を知り、又貧乏な中にも高尚にして有益なる世渡の出來る道理を辨へねばならぬ。同じ貧乏といふ中にも自分の懶惰や又は濫

費から勝手に招く貧乏がある。此等は一向感服出來ないことは改めて申すまでもない。併しながらこゝに又神樣を敬ひ、忠實に我が本分を盡しながらの貧乏といふものがある。而して昔から最も多く世の爲め人の爲めに盡した人達は、大概皆此ういふ意味の貧乏、即ち所謂淸貧の中に、其世渡を續けたものである。孔子も、釋迦も、共に度々空腹い目をせられたことがあり、有名なる宗敎改革者ルーテルの如きも、死後に何一つ遺產がなかつたが、それでも能く其貴き人格と事業とを留めて、長く天下後世に功德をなしたものである。それ故貧乏でありながらも淸き生活を營み、又は有益なる生涯を送らるゝことは、今更疑ふべき餘地がない。私共はどんなに貧乏しても其間に淸き生活を營まねばならぬ。耶蘇は世の人が唯物質上の富にあこがれ、金さへあれば事足る樣に考へて居る眞中に現はれ、却つて淸貧の中に神樣を崇め、其聖旨を行ふことが、どんなに貴いものかといふ道理を、身を以て敎へ給ふたものである。聖書に「汝等我等の主耶蘇基督の惠を知る。彼は富める者なりしが汝等の爲に貧き者となれり。そは汝等が彼の貧きに由りて富める者とならん爲也」とあるのは、眞に意味の深

い御言である。

第三、田舍大工としての耶蘇は又、私共が其身を置く境遇よりも、ずつと以上の世渡をなすべきことを敎へ給ふたものである。耶蘇が田舍大工として働き給ふた土地は、「ナザレより何の善き者出でんや」と言はれた程、風儀の良くない所であつた。耶蘇は然ういふ風俗の亂れた、人氣の惡い村の、しかも下等社會に混じて生活しながら、それでも能く其神々しき品性を保ち、亦能く神樣の聖旨を其身に行ふて居られたのである。其通り私共も亦罪に穢れたる世に身を置きながら、周圍の良くない風俗に感化せられず、どこ迄も神々しい世渡を續ける樣でなくてはならぬ。否々唯それ丈ではない。私共は罪の世に身を置きながら、其罪の世を改革する爲に生き存ふべきものである。それ故耶蘇は後に其弟子達を戒めて、汝等は此世の腐敗を止むべき塩である、又罪惡の暗黑を照らすべき光であるぞよと敎へ。其爲に天の父なる神樣に祈禱しては、又「我汝に彼等を世より取り給へと祈らず、唯彼等を守りて惡に陷らす勿れと祈る」と仰せられた。奥野昌綱といふ人の歌に「塩となり光ともなる此世より、とりたまへとは我も祈らず」とあるのは、此意味をうたふたものである。私共は基督を信ずる信仰に由て亦此世の惡き風俗に打ち勝ち、周圍の境遇事情に不似合な程、純潔高尚なる生活を營むものとならねばならぬ。

第六章　野に呼べる人

參考（馬太傳三章）

「野に呼べる人の聲あり、云く主の道を備へ其徑を直くせよ」（路三〇四）

救主耶蘇が世に出て公けの働に取かゝり給ふ數ヶ月前のことである。ザカリアの子ヨハネといふ者が、神樣の特別なる御命令を受け、ユダヤの野原にて大傳道を開始した。此ヨハネは身に駱駝の毛衣を着、腰に革の帶をしめ、蝗と野蜜とを常食としたといへば、どんなに質朴簡易なる生活を營んで居つたかゝ想像される。ヨハネの一生の事業は、間もなく世に出でらるべき救主耶蘇の前觸れをなし、これを世の人に紹介することであつた。其熱烈なる精神と、大膽なる警告とは、一時全國民の心を動かし、何

千何萬といふ程多數の人々は競ふて其許に集つた、ヨハネは世の人が犯せる罪を悔改めて、新しき生活に入るべきことを告げ、其教に從ふて新しき世渡の門出をしたいといふ者は、之を裸にしてヨルダン河の流れに入らせ、これに悔改のバプテスマといふことを行ふてやつたのである。

ヨハネの說敎の大主意は悔改といふことであつた。「天國は近けり、悔改めよ。」「嗚呼蝮蛇の裔よ、誰が汝等に來らんとする怒を避くべきことを告げしや。然らば悔改に符へる果を結ぶべし」と。ヨハネは世の人が罪を悔改めて耶蘇基督の御救を待望むべきことを警告したのである。此罪を悔改めるといふことは今も昔と變ることなき大切なる眞理である。神樣は悔改といふことを人間の美德と見做し給ふ。人は皆神樣の前に罪を犯して居る。此世に誰一人神樣の前に罪のない人間といふはない。それ故私共の爲すべきことは、せめて其惡かつたと心付た行を速に悔改め、其御赦を求めることである。數年前日糠事件の疑獄が起り、多數の代議士が一時に入牢した時、或人が監獄を訪ねて、一人の代議士に見舞を述べると。其返事に、「何に、君、これは雷が落ちた樣なものだ。誰の頭の上に落ちるとも定らぬのが、運惡く僕等の上に落ちたのだ」といふことであつた。「左樣でありますか」といふて其次の代議士をたづね。同じく見舞の辭を述べると。「何に、世間には僕等よりひどい事をして居る奴が幾らも居る。決して僕等ばかりではないよ」といふ挨拶であつた。進んで今一人の代議士をたづねると、其人は愁然として頭を垂れ、「どうも此度の事に就ては何んとも申譯がありませぬ。何れ此お詫は社會に出て後事實で申上げるつもりである。」といふたきり、其上何んにも答へなかつた。此人は後放免になつて監獄を出ると、直ぐに救世軍本營をたづねて信仰上の忠告を求め、間もなく其忠實なる軍人となつたのである。古語に「寧ろ玉となつて碎くるも、瓦となつて全きを耻づる」といふことがある。私共はどうせ神樣の前に罪のある身ゆゑ、下手に申譯を作つたり、推諉をしたりしないで、寧ろ正直有體に一切の罪愆を悔改め、其御赦を求めるに如くはない。聖書に、「若し罪なしと言ば是れ自ら欺けるにて眞理我等に在るなし。若し己の罪をいひあらはさば神は信實なる公義ものなるが故に、必ず我等の罪を赦し、凡ての不義より我等を潔むべし」と

も。亦「其罪を隱す者は榮ゆることなし、されどいひあらはして之を離るゝ者は憐みを受けん」とも敎へてある。罪人が神樣の前に爲すべき第一の事は悔改である。

次にヨハネは程なく世に出で給ふべき救主耶蘇の事を紹介して、「我は汝等を悔改めさせんとて水を以て汝等にバプテスマを授く。我より後に來る者は我に勝りて能力あり、我は其履を提るにも足らず。彼は聖靈と火を以て汝等にバプテスマを授けん」と申した。即ちヨハネは耶蘇基督の前に出ては其靴の紐を解く價値もなきものにて、其行ふバプテスマは唯人を水の流れに浸める表面の儀式に過ぎないけれ共、耶蘇基督は神樣の靈に由て人の靈魂にバプテスマを施す御方である。ヨハネのは唯水を以て人の身體の上に行ふバプテスマであれど、耶蘇基督のは靈の火を以て人の靈魂の上に行ひ給ふバプテスマである故、何れも進んで其基督を信仰せよとの意である。

然らば人の靈魂の上に行はるゝ火のバプテスマとは何んなものかといふに。第一、火は燬き盡すものである。其如く耶蘇は人の心にある凡ての穢れを皆燬き盡し、其罪惡との腐れ緣を奇麗に絶ち切り給ふ御方である。第二、火は熔解けるものである。其如く耶蘇は私共の胸の中より一切の混淆物を取除き、純粹無垢の人間となりて、一心に神樣の思召を行ふ者とならせ給ふ。第三、火は煖むるものである。其如く耶蘇基督は熱くもなく冷たくもない、微溫い人の心を煖め、熱心を以て世の救の爲に戰ふ者とならせ給ふ。使徒パウロが「基督我等の爲に己の身を捨て給へり。是れ我等を凡ての罪より贖ひ出し、且己の爲に一の民を潔め、これをして熱心に善事を行はしめん爲なり」といふたのは、此事である。

多くの人々がヨハネの許に集つて其敎に耳を傾けて居る最中、耶蘇基督も亦ナザレを出立してユダヤの野原に來り、ヨハネにバプテスマを受けさせよと仰せられた。ヨハネは喫驚して「我は汝よりバプテスマを受くべき者なるに、汝反つて我に來るか」といふて辭退すると。耶蘇は答へて「暫く許せ、斯く凡ての義き事は我等盡すべきなり」といひ、强てバプテスマをお受けになつた。折しも天忽ち開け、聖靈は鴿の如き形にて耶蘇の頭の上に現はれ、且天より聲あつて「此は我心に適ふ我が愛子なり」と聞へたのである。

元來ヨハネのバプテスマは、唯罪を悔改めた表號のバプテスマである故、罪なき神樣の御子耶蘇が之をお受けになるといふのは、變な話の樣であるが、これには深い仔細のあることにて。即ち第一、耶蘇は斯くしてヨハネの悔改の敎が、どんなに大切なものかといふことに其裏書をなし。第二、御自分の今後の事業が、ヨハネに由て開始せられた運動の繼續であることを示し。第三、又これを機會に愈よ其公けの運動に取りかゝるべき發表をなされたわけである。此時耶蘇の御年齡は三十歲であつた。

後になつて、ヨハネの弟子の中から來つて耶蘇に從ふ者も少なからず、世間の人々も多く耶蘇の許に集つて、ヨハネの方に來る者の數が漸く減つた時、其事を苦にして彼此れ小言をいふものがあると。ヨハネは戒めて「自分は救主耶蘇と此世の人との間に立ち、新郎と新婦との仲介役の如きことを勤むるものである。仲介役に取つて何よりの滿足は、唯新郎と新婦との仲睦き有樣を見ることである。其如く自分に取つては世の人が、救主耶蘇に隨喜する有樣を見るより嬉しいことはない。彼は日々に盛んになり、我は日々に衰へる、これが自分の本懷であるぞ」といふたのである。どういふ高貴なる我を忘れた精神であるか。歌に「基督を人に見せばやわれはその、うしろにだにもあらじとぞ思ふ」と。嗚呼これこそ眞によくヨハネが獻身義烈の精神を歌ふたものではないか。

第七章　野の試錬

參考（馬太傳四章一節至十一節）

「蓋彼自ら誘はれて艱難を受けたれば、誘はるゝ者を助け得る也。」（來二〇十八）

ヨハネからバプテスマを受けて後、耶蘇は聖靈に導かれ、惡魔に試みられん爲に野に往き給ふた。古語に「敵國外患なき時は國すなはち亡ぶ」とか、又は「憂患に生れて安樂に死する」などいふてある如く。餘り苦勞のない生活は、人をして神樣を忘れしめるものである。又餘り喜樂な身の上は人の精神元氣を頽敗せしめるものである。それ故神樣は態と惡魔が私共を試みることを許し、私共が折々火の如き苦みを凌ぐことに由て、金の如くふきわけられた人間となることを喜び給ふ。所謂「主其愛する者

を懲しめ、又凡て其納る所の子を鞭てり」とは此事である。勿論耶蘇基督は罪なき神様の御獨子である故、何も私共の様に試錬などお受けなさる筈はない様であるが、それでも既に人間の姿をとつて此世にお出になつた以上、亦萬事萬端全く私共と同じ御經驗をお積みなさる必要があつた。即ち耶蘇は全く私共と同じ様な試錬を受けながら、美事に之に打ち勝ち給ふたればこそ、後の試錬に惱む私共を救ひ給ふ便宜が多いわけである。乃ち希伯來書に「蓋彼自ら誘はれて艱難を受けたれば、誘はるゝ者を助け得るなり。」又「彼は凡ての事に我等の如く誘はれたれど罪を犯さゞりき。この故に我等憐みを受け、機に合ふ助となる惠を受ん爲に憚らずして恩寵の座に來るべし」といふてあるのは、如何にも意味の深い御敎である。

然らば耶蘇基督はどんな風に惡魔の試錬に打ち勝ち給ふたか。熟々考へて見るに、耶蘇が野にて受け給ふた第一の試錬は、之を今時の語で言へば生活問題の試みであつた。即ち惡魔は耶蘇が四十日四十夜食ずして饑て居給ふ樣子に目をとめ、そこらに有合せたる石塊を示し。「汝若し神の子ならば命じて此石をパンとせよ」と言ふと。耶蘇は直ちに舊約聖書の一句を引き、「人はパンのみにて生る者に非ず、唯神の口より出づる凡ての言に由ると錄されたり」といふて、之を彈ねつけ給ふた。此の如く惡魔は今もパンの問題を以て多くの人々を陷れて居る。「そんな堅苦しいことを言ふて居ると食へなくなるぞ。それよりも寧ろ汝の舌をパンとなし、筆をパンとなし、學問をパンとなし、力量をパンとなし、信仰も、主義も、良心も、一切の物をパンに化へて、兎も角も安樂に其日を過す工夫をしたが可いではないか」と。此ういふ風に惡魔は今もパンの問題を以て私共を惑はしに來る。併し乍ら私共は此世にパンよりも大事なものゝあることを知つて、神樣の聖旨を畏まねばならぬ。私共は生活問題以上に信仰問題を置かねばならぬ。「先づ神の國と其義とを求めよ。さらば此等の物は皆汝等に加へらる可し」と。神樣の御約束は確實にして寸分も疑ふべき餘地がない。

第二の試錬は信仰上の試みであつた。惡魔は耶蘇が生活問題以上に信仰を重んぜらるる事を見て、乃ち之を殿の高い頂に連れて行き。それ程信仰々々といはれるなら、一つこゝから飛んだが可からう。「汝若し神の子ならば己が身を下へ投げよ、蓋汝が爲に

神其使達に命ぜん、彼等手にて支へ、汝が足の石に觸れざる樣すべしと錄されたり」と言ひ、聖書の句など引て之を試みたのである。すると耶蘇は重ねて舊約書の語を引き、「主たる汝の神を試む可らずと亦錄せり」といふて、之を却け給ふた。此の如く惡魔は今も比較的熱心に神樣に事へて居る其僕等を誘ひ、之をして信仰を重んずるの餘りに秩序を無視し、神樣に縋るからといふて己が本分を怠らしめる樣なことを仕向ける。即ち高い殿の頂上から下へ降りるには、一歩一歩足を運ぶべき筈であるに、それを神樣の御守護があるからといふて、無闇に高い處から飛び降りる樣な事を敢唆するのである。併しながら神樣は秩序の神樣である。私共は人事を盡して天命を俟たねばならぬ。又信仰の精神を行ふに事務の手段を以てする心がけが大切である。然るを自分の盡すべき本分を怠りながら、唯漫然神樣の御助をのみ祈るのは、是れ即ち神樣を試みるといふものである。氣をつけねばならぬことである。

第三の試錬は又事業上の試みであつた。惡魔は最後に耶蘇を高い山に連れて行き、世界の國々と其榮華の狀とを見せて、「汝若し俯伏して我を拜せば、此等を皆汝に與ふべし」といふたが。耶蘇は今度も聖書の語を引て「惡魔よ退け、主たる汝の神を拜し唯これにのみ事ふべしと錄されたり」といふて、美事に之を却け給ふたのである。此の如く惡魔は今も私共を事業上より試み、同じ神樣の御業を行ふにしても、成るべく俗受けの好いやう、又は困難の少ないやうにと。所謂「虛言も方便」などいふ、如何はしき態度に出で、目的の爲には手段を擇まず、寸を枉げて尺を直くするといふ如き曖昧な手段を取らせ樣とする。併し乍ら私共は如何なる場合にも唯眞直に神樣の御旨を行はねばならぬ。啻に其目的とのみ言はず、其手段方法の末に迄、悉く唯神樣の聖旨を實行する覺悟が肝要である。而して若し其爲に必要ならば、私共は一生涯埋れ木となつて果ることをも甘んじ、目前の成敗利鈍を顧みず、隱れたるに鑒給ふ神樣の前に眞實を盡すことを決心せねばならぬ。くれ〳〵も、成功を急ぐの餘り惡魔にお辭義をして其援助を借りることのない樣、其注意が大切である。

耶蘇は斯くして、三度が三度共、美事に惡魔の誘惑に打ち勝ち給ふた。然らば私共は何うして亦耶蘇と同じ樣に、平生惡魔の誘惑に打ち勝つ人間となるべきかといふに。

それに就て肝要なるは、第一、神様の霊の御導を求めることである。耶蘇は聖霊に導かれつゝ惡魔の試錬に遭ひ給ふた。ジエレミー、テーロルといふ人が、「耶蘇は善霊に導かれて惡霊に試みられたり」と言ふたのは此事である。第二には聖書の語を胸に蓄へて居り、之を以て敵に嚮ふことが大事である。聖書は信仰上の劒である。「神の道、即ち聖霊の劒」といふのは其事である。私共は耶蘇が三度共聖書の語を引て惡魔に答へ給ふた如く、亦聖書の語を力と恃み、之を以て惡魔の誘惑を撃ち退けねばならぬ。第三に大切なるは確乎不動の信仰である。惡魔は三度共「汝若し云々」といふて耶蘇に近いた。「若し」といふ語は惡魔の慣用話である。惡魔はいつも不確實、曖昧なる、「若し」とか、又は「併し乍ら」とかいふ様な語を以て私共に近づくものである。それ故私共は其都度確乎不拔の信仰を以て之と戰はねばならぬ。第四に大切なるは果斷である。「斷じて行へば鬼神も避ける」習。私共は耶蘇と共に「惡魔よ我が後に退け」といふて、一と思に惡魔の誘惑を撃退せねばならぬ。逡巡躊躇は敵に乘ずべき機會を與へる様なものである。「若し右の眼汝を罪に陷さば抉き出して之を棄てよ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり。若し右の手汝を罪に陷さば之を斷りて棄てよ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり」とは、是れ私共が果斷を以て罪と惡とに打ち勝つべきことを敎ふる御言ではないか。

第八章　カナの結婚式

參考（約翰傳二章一節至十一節）

「耶蘇と其弟子も婚筵に請かる」（約二〇二）

野の試錬が終りて後、耶蘇が今一度ヨハネと御出會になつた時、ヨハネは其弟子に對ひ、「世の罪を負ふ神の羔を觀よ。我に後れ來らん者は我より優れる者なりと言ひしは此人なり」といふて、之を紹介した。神の羔といふたわけは、此國では昔から羔を殺して犧牲とし、それを神様に差上げて罪の赦を祈る風習があつたので。耶蘇が丁度其羔と同じ様に、身を犧牲として世界人類の罪を贖ふ御方だといふことを敎へたのである。そんなことからヨハネの弟子の中に、耶蘇に從ふて其弟子となるものも數人出

來た。

三四日の後、耶蘇は新に得たる四五人の弟子と共に、招かれてガリラヤのカナといふ所の何人かの結婚式に列り給ふた。カナはナザレから東北へ二里程の處である。此結婚式には耶蘇の母マリアも立會れたのであるが、式の半ばに饗應に用ゆる葡萄酒が罄きた。葡萄酒とはいへど、これは葡萄の汁を美味く製した迄のもので、醉ふて前後を忘れる樣な飲料ではなかつたさうである。耶蘇の母マリアは此有樣を見て心配し、耶蘇に對ひ「彼等に葡萄酒なし」といふて其相談を持かけ。一方ではそこに居る僕共にむかひ、「彼が汝等に命ずる所の事をせよ」と申附けられた。ユダヤ人の風として食事の前や、又は外から歸つた時など、一々手を洗ふ習慣があり、自然どこの家にも大概幾つかの水甕を備へ付てあつたが。耶蘇は此時その家に四五斗入りの石甕が六つ程もあるのに目をとめ。僕共に命じて一つ殘らず水を其石甕に掴ませ、然る後復それをくみ取つて御馳走の席に運ばせられたが。こは不思議、たつた今くみ込んだばかりの水が、いつの間にか立派な葡萄酒に化つて居つた。しかもそれが如何にも上等の葡萄酒になつて居たので、其會主は之を訝かり、竊と新郎の袖を引て。「誰でも此んな場合には始めの間に佳い酒を出し、後には惡い酒を出すのに、君はどうして此んな風に最後迄佳い酒をしまつて置たのか」と問ふた位であつた。これは耶蘇が行はれたる最初の奇跡にて、之を見た弟子達は、何れも皆大きに其信仰を篤くしたといふことである。

今此物語に就て私共が學ぶべき敎訓は、先づ第一に家庭制度の神聖なることである。中には家を出で世を棄て山に入る樣なことを、特別に高尙なる世渡の如く敎へる宗敎もあれど、耶蘇は之に反して、夫婦、親子、兄弟等の關係を極めて大事なものと見做し給ふた。或人の言に「釋迦は妻子をふり棄て宗敎の生活をはじめ、耶蘇は結婚式を門出として公けの事業に取かゝり給ふた」と、いふてある。此の如く耶蘇の宗敎は家庭を重んずるものである。私共は神樣の聖旨が銘々の家庭に行はれる樣、心がけねばならぬ。大將ウイリアム、ブースの言に、「凡ての家庭は神樣の宿り給ふ所でなくてはならぬ。エデンの園にあつた一番最初の家庭が幸福であつたわけは、其場所や、氣候や、美しい花や、甘い果實や、其他種々目と耳とを喜ばするものがあつたからでなく。唯神樣が

そこに在し、そこに往來をして人と交はり、人と言語をかはし給ふたからである。また私共が目ざして行く天國も、神様がそこに在し給ふ故に幸福なるものである。それ故私共は此世からして其家庭を神様の宿り給ふ所とせねばならぬ。即ち救世軍の會館と同じく、其家庭を全く、確實に、神様の御用の爲に献げた場所となし。そこにて神様を愛し、之を禮拜すべく。神様は亦そこにて私共に現はれ、其靈をそゝぎ、其子等と交通し給ふ様でなくてはならぬ」と敎へてある。私共は此ういふ神々しき、神様の御旨の行はるゝ家庭をつくらんことを心がけねばならぬ。

第二、それと同時に、家庭の始まりは夫婦にある。それ故私共は男女間の貞節を重んじ、どこ迄も夫婦の關係を神聖なるものとして扱はねばならぬ。自然、カナの結婚式の時と同じ様に、諸君の結婚式には是非共救主耶蘇がお立會下さる様でなくてはならぬ。私共は結婚問題の上に神様の御導を求め、只管其思召に從はねばならぬ。

第三、マリアは僕共にむかひ「彼が汝等に命ずる所の事をせよ」と言付られた。即ち耶蘇が御命令になる通りを、何んでも素直に行へといふことである。而してこれは亦

今日の私共銘々に、至極適當したる忠告ではあるまいか。私共は平生何んでも耶蘇が命じ給ふ通りを實行すべきものである。耶蘇は聖書の中に私共が片時も忘れてならぬ貴き御敎訓をのこし給ふた。私共はそれ等を心にとめて其御命令の儘を行はねばならぬ。又耶蘇は聖靈を私共の胸中に遣り、其折々に辨へねばならぬ聖旨を顯はし給ふ。それ故私共は眞直に唯救主の御旨に從ふべきものである。

第四、耶蘇は水をぶどう酒に化へる力を有ちながら、それでも水をくむこと丈は之を其僕共に命じ給ふた。此の如く私共が自分に出來る丈の事をなす時、神様は神様でなくては出來ぬ事を行ひ給ふ。それ故「神様よ、私を罪より救ひ給へ」と祈る者は、それと同時に自分から一切の罪に遠ざからねばならぬ。又「神様よ、人を基督に導かせ給へ」と祈る者は、自分から其人を集會に誘ひ、或は之に信仰上の勸めをせねばならぬ。或時一人の少女が臥床に入る前に祈禱をして、「神様よ、どうか兄さんの係蹄に小禽が懸りませぬやう、屹度懸らぬとは思ひますけれ共、どうか助け給へ」と、いふゆゑ。其母は不思議に思ひ、「小禽が係蹄に懸りませぬやうといふのは分つたが、屹度懸らぬと

は思ひますけれ共といふのは、何ういふわけか」と尋ねると。少女は答へて、「だつてお母さん、私は先刻往て兄さんの係蹄を壞して來たのですものを」といふたさうである。其如く私共は亦何事にも自分に出來るだけの務を盡し、其以上の處を神樣に願ふ樣でなくてはならぬ。私共は言語で神樣に祈るのみならず、其手の工を以て神樣に願ひ求めることが肝要である。

第五、其日の會主は、宴會の終に佳い酒が出たのを怪み、「誰でもこんな場合には始めの間に佳い酒を出し、後では惡い酒を出すのに、君はどうして最後迄佳い酒をしまつて置たのか」と、新郎に尋ねたさうである。其如く世間の人は兎角何事にも誤魔化が多い。最初の見本と後日の商品とに相違があり。當座の勤め振と不斷の働き方とが齟齬して居る。併しながら基督の主義は後になる程善い物を提供する主義である。其宗教は又「信仰より信仰に至り、」「恩寵に恩寵を加へられ、」而して又「力より力に進む」所の宗教である。隨つて神樣を信仰しない人の世渡は通常「始め吉、末凶」といふのであれど。耶蘇に從ふ者の運命は「始め吉、末上々吉」といふのである。私共は後になる程味のある信仰の生涯に、尙も深くわけ入らねばならぬ。

第九章　ニコデモ

參考（約翰傳三章一節至二十一節）

「人若し新に生れずば神の國を見ること能はじ。」（約三〇三）

カナの結婚式が濟んで後、耶蘇は其母、兄弟、及び弟子達と一緒に、ガリラヤの湖水の西北の岸にあるカペナウンといふ町へお下りになつた。これは其邊の商業の中心にて、稅關もあれば兵營もある、可なり繁華な地であつた。此カペナウンは後に耶蘇の傳道上の根據地となつたのである。彼此れするうちユダヤ人に取つては大切な逾越節といふお祭が近づき、全國から多くの人々がエルサレムへ上るので、耶蘇もそれを機會に都へ上り、公けの傳道事業に取りかゝり給ふことゝなつた。

エルサレムに御滯在中、或夜ユダヤ人の宰なるニコデモといふ人が耶蘇を訪ねて來た。而していふには「先生、貴下はたゞのお人でない、屹度特別に神樣から遣はされたお

方であると思ふ。といふわけは、若し然うでなくば、貴下が爲さる樣な種々不思議なる人助けは、到底尋常の人間には出來ぬことでありまする」と、申し上げると。耶蘇は其方の事には返事をしないで、直ちに靈魂上の大事を語り出で、「誠に實に我汝に告げん、人若し新に生れずば神の國を見ること能はじ」と仰せられた。これは人間は誰も皆一度生れ變らないと、神樣の前に一人前の人間たる資格はないものぞとの御敎である。ニコデモは其意味を解し兼ね、「併し私共の樣に好い年をしたものが、今一度母の胎に入つて出て來らるゝものではなし、新に生れるとの御敎訓は、どうも其意を解し兼ねまする」といふ故。耶蘇は再び語をつぎ、「誠に實に汝に告げん、人は水と靈とに由て生れざれば神の國に入ること能はざる也。肉に由て生るゝ者は肉なり、靈に由て生るゝ者は靈なり。我汝に新に生るべきことを言ひしを奇とする勿れ。風は己が儘に吹く、汝其音を聞けども何處より來り、何處へ往くを知らず、凡て靈に由て生るゝ者も此の如し」と仰せられた。これは人間が生れ變るといふのは肉體の上の事ではなくて靈魂の上の話である。人は其肉體が母から生み落された丈で滿足せず、是非其神樣の靈に由て、其靈魂を入かへられねばならぬ。これが即ち新に生れるといふことである。人間の靈魂が神樣の靈に由て生れ變るのを不思議な事の樣に思ふか。成程不思議といへば不思議に相違ない。併し此世には人間の智慧や分別で說き明しの出來ないことが幾らもあつて、現に今窓の外を吹く彼の風にした處で、お前には何處から吹て來て何處へ去るか分るまい。それにも關らず風の吹て居る事實は其物にぶつかる音を聞けば直に分る如く。人の靈魂が神樣の靈に由て生れ變るといふのも、其筋道は鳥渡理解し難い樣であれど、併し實際神樣の靈に由て人の心の變化せられた証據を見れば、直に其事實を承認せらるべき筈ではないかとの御敎訓である。

今此物語に由てニコデモの事を考へて見るに、其當時彼は凡そ三つ程の了簡違をして居つた樣に見える。

第一、ニコデモは自分の事を棚にあげて他人の事のみ心配して居つた樣である。即ち彼は耶蘇が憐れな病人や困窮人など濟度し給ふ有難き御業に目をとめ、「貴下がなさる種々不思議な人助けは」など、いふて感服しながら、さて自分自身の問題になつて

は、一向浮かりして其意を諒解し兼ねた様である。ニコデモは耶蘇の御事業が下層の人民に大切なる事は十分に認めながら、それが一個の紳士たる自分にどんな關係のあるものかといふことを考へなかつた。其如く今も宗教は愚夫愚婦の爲には結構であるとか、又救世軍は下層の人民には極めて適當のものであるなど稱へながら。扨然ういふ自分が所謂愚夫愚婦、又は下層の人民と同じ樣に、神樣の前に罪が深く、隨つて耶蘇に救はれる必要のあることに思ひ及ばぬ者が多くある。昔預言者ナタンといふ人は、ダビデ王が大罪を犯したのを責め、「罪人とは誰か、王よ、汝こそ其罪人でありまするぞ」といふて、王の冠を戴いたダビデを震ひ慄かしめたといふことがある。聖書に「義人なし一人もあるなし」とあり。全世界の人間は皆神樣の前に罪人にて、悉く耶蘇の救を要するものである故、私共は其新に生るゝといふ御教を他事と思はず、之を我が身に引當て考へることが何より大切である。

第二、ニコデモは又肉體の上の事のみ考へて、靈魂の事を等閑にして居つた。即ち耶蘇が肉體の上に行ひ給ふ慈善博愛の御働には感心しながら、一旦靈魂上のお話になると、一向其道理を合點し兼ねた樣である。其通り今も基督教の社會改良運動や又は慈善救濟事業には感服しながら、其靈魂を救ふ傳道事業の有難味に到つては、一圓合點の行き兼る者が多い。併しながら私共は人の靈魂を罪から救ふてのみ眞に其人を一切の禍から救ふことが出來るのである。「眞の慈善とは人をして慈善を受くる必要なきものとならしむることである。」而して此の如きは唯耶蘇の救に由て其人の靈魂を入かへてのみ、最も有効に成し遂げらるべき事ではないか。

第三、ニコデモは又己が品行方正なる道德家であることを以て足れりとし、進んで自分に耶蘇の救を求むべき必要のあることを知らなかつた樣に見える。併しながら人が若し自分を世の惡黨無賴漢など、仕方のない人間にのみ比較することを止め、却つて我が今日迄の行を其本心の鏡に照して調べ、聖書の御教に引當て考へ、正直に己を神樣の前に吟味するに於ては、それこそ誰一人我が犯せる罪の山ほどある事に心付、胸を打つて耶蘇の御救を求める必要を感せぬものはない筈である。「なきなどゝ人には言ふてありぬべし、心に問ば何とこたへん。」「わが心鏡にうつるものならば、さこそ姿の

みにくからまし。」格別に困難なるは私共が平生其惡いと思ふことを止め、善いと思ふ事を行ふ力の足らず勝なことである。「いくたびか思ひ定めて變るらん、たのむまじきはわが心なり。」是に至つて私共は何うしても神様の靈に由て其靈魂を入れ變へられ、新しき心を有つた人間にして戴く必要を、切に感ぜざるを得ない樣になる。耶蘇の宗教は人の靈魂を入れ變へる宗教である故、それでこそ始めて眞に人を救ひ、又世を救ふことが出來るのである。

今神樣の靈に由て人の靈魂を入かへられるといふは、不思議な話の樣であれど。私共は風の吹く音を聞て風の吹て居る事實を認める如く、靈魂を入かへられた人の身の上を見れば、其靈魂を入かへらるゝ事實を明かに認めることが出來るわけである。或宗教家がサムマーフイルドといふ人にむかひ、「貴君の御生國は」と尋ねると。答へて「リバープールと、ダブリンとでありまする」といふ。「でも御生國が二ヶ所あるといふのは、可笑いではありませぬか」と問返すと。「貴君は人に宗教を教へる身でありながら、尙その事が分りませぬか」といふたさうである。申す迄もなく前のリバープールは其肉體の生れた所で、後のダブリンは靈魂の新に生れた所といふ意味であつたに相違ない。此の如く人は皆神樣の靈に由て其靈魂を入かへられねばならぬ。これが即ち耶蘇の救といふものである。而して唯此救に由てのみ、私共は根本的に人を救ひ又世を濟ふことが出來るのである。

第十章　サマリアの女

參考（約翰傳四章一節至四十二節）

「我に汝等の知らざる食物あり。」（約四〇三二）

エルサレム及びユダヤに滯在すること七八ヶ月の後、耶蘇はサマリアを經てガリラヤに歸り給ふことゝなつた。サマリアを御通行の際弟子達が町へ晝飯のパンを買ひに行つた間に、耶蘇は井側に休んでお在になると、そこへ一人の婦人が水をくみに來た。これは其國の風として、銘々釣瓶を持つて水くみに出かけるのであつた。耶蘇は其婦人にむかひ「我に水を飲ませよ」といふて言をかけ、それを話の端緒として、神樣の有

難い御惠を湧き出る水に喩へ、諄々として說てお聞せになつた。即ち耶蘇が仰せられるには、お前はこれ迄五人の夫を取かへた女にて、其都度今度こそは仕合せに世渡が出來るであらうと思ふた甲斐もなく、いつも案外な故障が起り、あゝ嬉しいと思ふたのは、ほんの束の間のことで、直に傍から不滿足と心配苦勞とに陷つた經驗があらう。譬へば此井からくむ水を飲んで、喉を濕したかと思へば程なく復渴きを覺える。斯て水を飲んだかと思へば渴き、飲んだかと思へば復渴く。此の如きものが此世の中の幸福滿足といふものゝ習である。それ故お前は此後此世の樂みと肉體上の滿足とを求めることを止め、眞の神樣を信じて、神樣が心の中に下さる眞の仕合と喜樂とを經驗する者とならねばならぬ。「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞とを以て之を拜すべき也。」眞の神樣は靈體に在ます故、之を拜む者も亦其心と誠とを以て拜まねば役に立たない。今自分は然ういふ眞の神信心の道を敎へ、世の中の罪と禍に苦む者を救はん爲に神樣から遣はされたる救主であるぞよと。旅の疲勞を忘れて懇ろに說き諭し給ふた故、女は有難涙に咽びつゝ、釣瓶をそこに置た儘急ぎ村邑に歸つて近所の人達にむかひ、大聲に圖らず井側でお目にかゝつた救主耶蘇の事を吹聽すると。多くの人々は村から出で來て耶蘇の御前に集り、やがて御案內申上げて其村に歸り、二日程御滯在を願ふて尙も引續き其有難い御敎を承はり、信仰の心を起す者も多く起つたのである。

第一、耶蘇が旅の疲勞と空腹とを忘れて、圖らず井側で出會ふた一人の女に、斯く迄熱心に御傳道になつたことを見れば、其どれ程靈魂を愛する熱情に滿ち溢れてお在なされたかといふことが分る。私共が人を信仰に導き、罪人に救の道を傳へるのも亦此の如く。何も救世軍の會館や、基督敎の會堂に集つた時だけ、思出した樣に之を力めるのでなく。却つて年中到る處、それこそ井側にも、道の辻にも、店先にも、工場にも、乃至は汽車電車の中にも、始終心がけて居つて之を試むべきものである。私共は時を得るも時を得ざるも、勵みて道を宣傳へねばならぬ。「人の靈魂は全世界よりも貴きものである。」神樣の御獨子耶蘇は、其貴き靈魂を罪より救はん爲に態々此世に降り給ふたのであれば。私共も亦人の靈魂を愛し、其救の爲に有らん限りの力を盡して働かねばならぬ。

第二、耶蘇は唯一人のサマリアの女を導く爲に、容易ならぬ勤勞をなし給ふた。耶蘇は時として數千人、或は數萬人を相手に說敎し給ふたこともあれど、亦好んで唯た一人の人を相手に、膝詰にて諄々として敎を說き給ふたことを見受ける。其如く私共も亦人一人の救の爲には、どんな勤勞をも厭はぬ覺悟にてその爲に働かねばならぬ。始めて日本に基督の道を傳へたザビエーといふ人は、「人一人の救の爲とならば、一萬度鞭で毆たれても苦くない」といふて居つた。サビエーは此うといふ精神にて織田、豐臣時代に日本に渡來し、單獨で不思議なほど大きな働をしたものである。何が親切だといふて人を神樣に導く程の親切はなく、亦何が大切だといふて人の靈魂を罪から救ふ程大切な事業はない。私共はもつと〳〵一人々々の知人朋輩を、基督に導く爲に奮闘せねばならぬ。

第三、耶蘇は井側であるから水の喩を用ゐ、相手が無學な婦人であるから平たい言語を使ふて、奥深い神樣の御敎を分り易く說てお聞せになつて居る。其通り私共も知つた振りをして明白なる神樣の御敎を態々小六かしく說明す必要はない。却つて成る丈分り易く、誰にでも得心の出來る樣に之を敎へることを心がけねばならぬ。大將ウイリアム、ブースが其子息と話をして居られた時のことである。茲に若し主婦と女中と二人居るとして、それに宗敎を說くには何うするかといふことになり。子息が、「私は主婦と女中とに半分宛話を致しまする」といはれると、老大將は答へて、「余は專ら女中を相手に話をする、なぜかといふに女中に分る話ならば、自然主婦にも分る筈だからである」と言はれたことがある。私共は亦力めて平たく分り易く、どんな一文不通の人にも合點の行く樣に、神の福音を宣べ傳へねばならぬ。

第四、サマリアの女は自分が基督の御惠を受けると、直ぐに飛んで行つて其證言を立て、村の人達を其御許に連れて來た。此の如く人が眞に神樣の有難いことを身に經驗する時には、ぢつとして居られなくなるものである。譬へば大病に罹つて居つた人が、何か不思議な良藥を得て急に病が癒たとすれば、默つては居られず、必ず同病の人に其藥を推薦すると同じく。私共が若し罪の難病を癒されて靈魂上の健康者となつたとが事實であれば、私共も亦默つては居られず、進んで世の罪と禍に惱む人々に耶

蘇の救を宜べ傳ふるに至る筈のものである。即ち使徒パウロが「我福音を宣べ傳ふると雖も誇るべき所なし。已を得ざるなり。若し我福音を宣べ傳へずば實に禍なり」といふたのは、此事である。サマリアの女は姿も振も忘れ、大膽に路傍に立て耶蘇の惠を證言した。其如く私共は亦野外にでも、路傍にでも、機會を捉へて己が受けたる救の實驗を證言せねばならぬ。「私は尙信仰の日が淺いから」と言譯をするであらうか。サマリアの女は耶蘇に御見えをして、まだ漸く一時間經つか經ぬに、早くも單獨で野戰を營み、多くの人々を救主に導いたではないか。「之を用ゆれば虎となり、用ゐざれば鼠となる。」思ひ切つて働いて居る中には、段々有力な働き人にもなれるもの故、私共は心がけて兎も角も及ぶ丈、他人の救の爲に力を盡さねばならぬ。其間に一日一日と救靈の經驗が增し、神樣の御助が加はり、案外大きな御用を勤めることが出來る樣になること疑がない。

第五、パンを買ふて歸つた弟子達は、耶蘇が空腹を覺えて居らるゝこと、思ひ、急ぎ食事をすゝめると。耶蘇は答へて「我に汝等の知らざる食物あり。我を遣はし、者の旨に從ひ、其工を成し畢る、是れ我糧なり」と仰せられた。これは神樣の思召に從ひ、靈魂を救ふ爲に働くことが、三度の食事にも愈る樂みであるとの意である。古語に、「善をなすこと最も樂し。」又「他人を喜ばす喜にまさる喜なし」などいふてある。而して靈魂を罪より救ふことは、他人を喜ばす最上の方法にて、自分自らに取りては復となき大なる樂である。私共は三度の食事よりも愈つて善を爲すことを樂み、殊に罪人を救に導くことを無上の喜として、世に生き存へる者とならねばならぬ。

第十一章　歸省

參考（路加傳四章十六節至三十節）

「預言者其家鄕にては尊まるゝ者に非ず。」（路四〇二四）

「故鄕忘じ難し」といふことがある。古里は何時になつてもなつかしいものである。耶蘇はユダヤ、サマリアの傳道中、御同伴になつた弟子達を一先づ其家に返し、御自分には亦久し振に鄕里なるナザレ村にお歸りになつた。或安息日の朝、耶蘇は幼い時

から通ひつけの會堂に出席し、其手に渡されたる舊約聖書の一部を取上げ其中から、主の靈我に在す。故に貧き者に福音を宣傳へんことを我に膏を注ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と、盲人に見させん事を示し、又壓へらるゝ者を放ち、主の喜ばしき年を宣播めん爲に、我を遣はせり。

といふ一段を讀み。そこに居列ぶ人々に向ひ、「此錄されたる事は今日汝等の前に成れり」と仰せられた。といふ意味は耶蘇は御自身、神樣の靈の宿れる御方にて、貧乏人に福音を傳へ、心配苦勞のある者を慰め、罪の捕虜を放ち、惡の奴隸を自由にし、靈魂上の盲人の目を開き、終には世界の隅々隈々迄も神樣の聖旨の行はるゝ代を來らせん爲に、現はれ給ふたものであるとのことである。さうすると最初の程は感心して聞て居つた會衆が、後には大層腹を立て、「何んだ、彼はヨセフの子ではないか。飛んでもないことを言ふ奴だ。殺してしまへ」といふ樣な騷ぎになり。終には壑から突き落す積りで耶蘇を村の外れ迄連れ出したが、耶蘇は少しも逆らはず、反つて「預言者其家鄕にては尊まるゝものに非ず」といひ、靜かに群衆の中を通つて出で去り給ふた。

此殺風景なる物語の中から、私共の學ぶべき敎訓を尋ねて見るに。第一、耶蘇はナザレ村にお住居の間、幼い時から安息日毎に必ず定つて其會堂に出席してお在なされた。其通り今日の私共も亦どんなにか都合して、毎日曜日には必ず救世軍の小隊又は基督敎の敎會に出席する樣にあり度ものである。一週間に一日、平常の仕事を休んで專ら自分の心靈を養ひ、又他人を信仰に導く爲に盡すのは、至つて大切なる事である。明治の初年我が日本に始めて日曜日を休む制度を持込んだ時、其頃の人達は西洋人が日曜日を休むから、日本でも然ういふ風にし樣といふ位のことで、別段深い思慮もなく。中には和蘭語で日曜日の事をゾンタクといふのを漢字で呑澤と譯し、此日は一日仕事を休み、澤山に酒を呑んで骨休めをするのだなどゝ言出した者もあり。東京邊では今日迄も日曜日の事を呑澤、土曜日のことを半呑などいふ風が存つて居る。そこへ行けば支那人が日曜日の事を禮拜日と譯して居るのは、餘程日本のより意味が明白である。兎もあれ、私共は何んとかして、もつと日曜日を休み、唯休む丈ではなく、其日互に打寄つて神樣を禮拜し、自分共の靈魂を養ふばかりか、他人を救に導く爲に働く

風を盛にし度ものである。草を刈るには折々鎌を磨ぐことが大事な如く、生甲斐のある世渡をし度と望む者は、どうしても殊に一週一日を安息日として守る必要がある。

第二、耶蘇は先方の好き嫌ひ如何に關らず、大膽に信仰の道を鄕里の人々に傳へ給ふた。其如く私共も亦己が神様から受けたる惠を、同じ鄕里、同じ學校、同じ勤先、又は同じ軒の下に住む者等、凡て最寄の人々に證言せねばならぬ。私共の宗敎は之を其毎日顏を合す人達に推薦し得る程眞實なるものでなくてはならぬ。私共の救は又始終自分の行を見て居る人々に憚らず勸誘し得らるゝ位、正確現實なるものでなくてはならぬ。

第三、耶蘇は「主の靈我に在す、故に貧き者に福音を宣傳へんことを我に膏を注ぎて任じ云々」といふ句を讀み、「此錄されたる事は今日汝等の前に成れり」と仰せられた。耶蘇は神様の靈の權化である。聖靈に充ち溢れたお方であつたればこそ、あんな風に靈魂の救の爲にお盡し下さることが出來たのである。それと同じ樣に、今日神様の御命令を受け、救靈者として働く私共は亦神様の靈に滿され、其御導に從ひ、其御力

に由て、罪人の救の爲に戰ふ樣でなくてはならぬ。神様の靈は二つの方面から、私共今日の救靈者と共に働き給ふ。即ち一つは其相手とする罪人の心の中に働き給ふことにて、今一つは救靈者自身の中に働き給ふことである。神様の靈は救靈者自身を潔め、神様の御用を勤むるに足る器とならしめ、これに靈魂を愛する熱情を燃し、これに其言ふべきことを敎へ、其爲すべき所を示し、上よりの力を授けて、人間業ならぬ不思議なる事業をなさせ給ふ。それと同時に神様の靈は又救靈者が相手とする罪人の心に働き、これをして罪を認めしめ、救を求めしめ、其心を潔め、之を罪より救ふて、進んで他人の救の爲に起ち上る者とならせ給ふ。或時一人の救世軍人が其毎朝顏を合す瀘車の車掌に、救の話をしろといふ神様の御啓示を受けたが。其車掌が如何にも筋骨逞しき屈强の男である故、つひ恐氣がさして、躊躇しながら三週間を經過した。が何時迄然うして居らるべきでもない故、或朝思ひ切つて其男に信仰の事を話しかけると。彼は案外柔和に之を聞取るばかりか。實は三週間ほど前から、頻りに此世の浮た生活に慊焉ぬ思かし出し、誰か信仰の事を話して呉れる人があれば可いにと、それのみ心待

ちに待つて居た處でありまする」と、いふたさうである。即ち神様は一方に其救世軍人の心に働き、「往て彼の車掌に語れ」と命ずると同時に、他方に於ては先きに廻つて、其車掌の心に、「誰か信仰の事を話す者があつたら喜んで聞け」と、言付てお在になつたものである。此の如く眞の救靈者は、斷ず神様の靈と偕に在り、其御力に由り、其御導の儘を行ふて居るべきものである。

第四、耶蘇はナザレの人民から迫害を蒙り、「預言者其家郷にては尊まるゝものに非ず」といふて、そこを立去り給ふた。諺に「燈臺下暗し」といふ如く、ナザレの人民は、現在自分共の間から現はれた救主を認めることが出來なかつたのである。此の如く人は案外目前の事物を判斷し損ふとが多い。私共の幼い時の事など知つて居る人達は、私共が中頃基督に救はれて他人の救の爲に起つ樣になつた心中を諒解することが出來ず、唯柄にもない眞似をする痴漢、身の程を辨へぬ虛妄者とのみ認める例が少くない。それ故眞面目に神樣に事へ樣と思ふ者は、どうしても先づ其郷里の人々から誤解や嘲弄を受る位の覺悟がなくてはならぬ。新島襄氏が米國から歸つて久し振に其郷里上州安中に歸省せられた時「ふる里に飾る錦は簞の中、身に纏ふべき時にあらねば」と詠まれたのは、眞に見上げた精神である。誠に神樣に忠義を盡し度と望む者は、先づ古里に錦を飾るなどいふ小さい名譽心を棄て、却つて其郷里の父老や又は知人から嘲弄罵詈を受け、果は迫害を蒙ることをさへ、覺悟して起上る樣でなくてはならぬ。

第十二章　人を漁る者

參考（馬太傳四章十七節至二十二節）（太四〇十九）

「我汝等を人を漁る者となさん。」

耶蘇が郷里ナザレを去り給ふた後のことである。或日ガリラヤの湖の岸邊を歩み、そこに網をうつて居るペテロといふ者と、其兄弟のアンデレとを見、「我に從へ、我汝等を人を漁る者となさん」と仰せられると、二人は直に網を棄て耶蘇に從ふた。そこから進んで今度はゼベダイといふ者の子にてヤコブとヨハネとの兩人が、舟にて網を繕ひ居るのを見、これをも御招きになると、兩人は其父と雇人とを遺し、直ちに耶蘇に從

ふた。此四人の者は兼々耶蘇のお弟子となり、既に先頃は其お伴をして、ユダヤ、サマリアの地方を遍歴した位であつたが。今は耶蘇の特別なる御命令により、從來の職業を擲つて、全く宗教に身を委ね、今時の教會で謂ふ傳道見習生、救世軍で謂ふ士官候補生の様な者になつたのである。

今此最初の傳道見習生、又は士官候補生は、一體どういふ人物であつたかといふことを考へて見るに。

第一、彼等は質朴なる漁夫であつた。彼等は平生骨身を惜まず勞働して居る人達にて、現に此日も例に由て一生懸命に勞働して居る最中、忽ち耶蘇の御招を蒙りたるものである。此の如く神様は何時の代にも骨惜みをせず、働く人間を用ゐて其御用を勤めさせ給ふ。神様は懶惰者がお嫌ひである。懶惰者は神様の僕たるよりも、寧ろ惡魔の部下たるに適當して居る。それ故諺に「懶惰者の頭腦は惡魔の工場である」といふてある。併しながら勤め働くことは人の譽れである。私共は唯勤勉力行に由てのみ、神様の前に生甲斐のある生涯を送ることが出來る。ラスキンといふ人の言に「何故勞働者を輕蔑するか、勞働者でないものは懶惰者ではないか」といふことがある。私共は亦骨身を惜まず勞働することに由て、神様への御奉公を全うせねばならぬ。

第二、彼等は眞實欺かざるの人であつた。元來宗教は人の心の奥迄鑒給ふ神様をお相手にするものである故、其信者とか、又は教師とかいはるゝ者が、聊さかたりとも虚僞や作爲を用ゆる餘地がないのは明白である。それにも拘らず不思議なのは、何時の代にも唯人に見られんが爲に其義き事を行ひ、表面に信仰家慈善家を裝ひながら、其内實は似てもつかぬ僞善者が、往々にして現はれ出ることである。それ故耶蘇は其時代の斯かる僞善者の輩を戒め、「汝等は白く塗りたる墓の如く、外は美はしく見ゆれども、内は骸骨と汚穢とにて充ちて居るではないか」と仰せられた。併し乍らガリラヤの湖畔から擇まれて耶蘇のお弟子となつた四人の者は飽迄も眞實熱誠なる人物であつた。彼等は世の輕薄不信仰なる風習に與せぬと同時に、さりとて亦其頃の鑄型に入つた様な宗教に滿足し得ぬ人達であつた。それ故に彼等は正直なる心を以て耶蘇の言はるゝ所を聞き、一旦成程と合點したる以上、命を的に之を擁護することを厭はなか

つた者である。後にペテロとヨハネとが裁判官の前に引かれ、以來耶蘇の事を敎へてはならぬと申渡された時、答へて。「我等見し所聞し所のものは言はざるを得ざる也」と、言ふた處など見れば、彼等がどれ程眞實熱誠の人であつたか大抵想像が附くのである。而して神樣は何時の時代にも、唯此ういふ眞實欺かざる人物を用ゐて其御業を爲し給ふ御方である。

第三、彼等は又一切を棄て耶蘇に從ふた者である。即ちペテロは妻もあり、妻の母をも引取つて世話する身でありながら、境遇の困難を排除けて耶蘇の召に從ひ、ヤコブとヨハネとは數人の雇人さへ役ふ氣樂な家庭を辭し、甘んじて世の救の爲に流浪する身とはなつたのである。後にペテロが耶蘇に對ひ、「我等一切を棄て汝に從へり」と申上げた時。耶蘇は答へて「誠に汝等に告ん、我と福音の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は兒女、或は田畠を捨る者は、此世にて百倍を受けざる者なし。即ち家、兄弟、姉妹、母、兒女、田畠を迫害と共に受け、又後の世には限りなき生命を受ん」と、仰せられたことがある。彼等は一切を棄て耶蘇に從ふた故、能く神樣に用ゐられて、今日迄も其功德を全世界に遺す程の人物となつたものである。

第四、彼等は又其信仰を神樣に置く人達であつた。路加傳の第五章を見ると、此事の在つた前夜、彼等は徹夜睡らず魚を漁つたけれ共、一尾もとれないで失望し切つて居る所へ、耶蘇がお出になり、「沖に出て一網うつて見ろ」と仰せらるゝ故、其通りにすると。こは如何、網も張裂けんばかり大變な獲物があつた。然る後耶蘇は彼等に「汝今より人を獲べし」と仰せられたと書てある。即ち耶蘇は彼等を召して人を漁る者とならしむるに當り、豫め此大切なる事業が、人の經驗や、又は勤勞に由てのみ成功するのでなく、全く唯神樣の御力にこれ賴るべきものである道理を、實地に就て敎へ給ふたのである。而してこれは彼等が將來永久に忘れることの出來ぬ、大切なる御敎訓であつた樣に見える。

第五、耶蘇は彼等にむかひ、「我汝等を人を漁る者となさん」と仰せられた。即ちこれ迄は彼等が魚を漁る者であつた如く、此後は人を漁る者になしてやるといふ御言葉である。人を漁るといふのは、言ふ迄もなく人を滅亡の中より救ひ上るといふ意味であ

る。思ふに魚を漁ること丶、人を救に導く事との間に類似の點が決して少くない。

(一)魚を漁るのに大切なるは、魚の居る所へ出かけることである。其如く私共は又人の居る所に出かけて、人を救に導かねばならぬ。救世軍の野戰や、「ときのこゑ」賣や、戸毎訪問等は、此主義から割出した運動法である。

(二)魚を漁るには香しい餌を用ゆる必要がある。其如く私共は又有難い、仕合せな、人を罪から救ふ力のある宗教を宣傳へて、靈魂を耶蘇に導かねばならぬ。彼の冷たい神學上の講釋や、又は型に嵌つた樣な儀式的の宗教では、人の心を捕へることは出來ないものである。

(三)魚を漁る者に一つの大事な心得は自分の姿を見せぬことである。漁夫の姿が水に映れば魚は忽ち逃げてしまふ。其通り人を漁る者に大切なる注意は亦決して己を現はしてはならぬことである。「我基督と偕に十字架に釘けられたり。最早我生けるに非ず、基督我に在て生る也」と。此ういふ覺悟のある人にして、始めて眞に人を漁る者となることが出來る。

(四)魚を漁る者は晴雨を問はず、濤風を恐れず、苦勞難儀を冒して働く必要がある。其通り人を漁る者は亦「時を得るも時を得ざるも道を宣傳へ。」「基督の爲に懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭ふを樂み」として、始めて相當の成功を獲らるべき筈のものである。

第十三章　山上の說教

參考(馬太傳五章、六章、七章)

「天に在す我等の父よ」(太六〇九)

馬太傳五章、六章、七章の三章に渉つて、耶蘇が或山の上でなされた大說教が載つて居る。言傳に由れば、これはカペナウンから三里ばかりの處にて、ガリラヤの湖の西に當る、ハッチン山といふ海拔一千尺程の山で在つたことだといへど、今確實なことは分らない。

耶蘇は此御說教の中に、神樣を信ずる人間は如何なる資格を備へて居るべきか、又其

幸福なる有様は如何といふことから説き起し。然ういふ人々が此世に對する義務責任を敎へて後。耶蘇の新しい御敎と今日迄在來の宗敎との關係を示し。それより宗敎上の義務、社會上の義務等、私共が是非共心得て居らねばならぬ大切なる眞理を、細々と説き諭し給ふたのである。私は今然ういふ大切な御敎を一々考へる遑がない故、唯一つ此御説敎の中に、耶蘇が祈禱の模範として敎へ給ふた所謂「主の祈」の一番初めの一句、「天に在す我等の父よ」といふ語に就て、少しくお話申上げ度と思ふのである。

昔梅田雲濱といふ勤王家は、春秋といふ書物にある、「元年春王正月」といふ一句にもとづいて尊王論を唱へ、幕府を倒して皇室を擁護し奉つるべきことを主張したといふことである。それと似つかはしい樣な話であるが、私共が若し此「天に在す我等の父よ」といふ一句の意味さへ、十分理解することが出來たならば、基督の御敎の大主義、大精神は、大概之を曉ることが出來るといふても可い故、今殊に此一句を擇んで、考へて見たいと思ふわけである。

第一、耶蘇は神樣のことを「天に在す我等の父よ」と呼ばせ給ふた。「天に在す」といふのは、靈なる神樣といふと同じことである。又「我等の父よ」といふのは、愛なる神樣といふと同じ意味である。靈にして愛なる神樣といふことを、言ひ換へたのが即ち「天に在す我等の父よ」といふ一句である。而して此靈にして愛なる神樣を、我が靈魂上の父上として敬愛し奉つるに勝す宗敎上の觀念といふは、他にないのである。舊約聖書を讀んで見ると、モーセの頃には神樣を御主人とし、人間を其僕として敎へて居る。其時代には神樣を敬ふことはあつても之を愛することは知らなかつた。隨つて神樣と人間との間に間隔があり、遠慮があつて、何んとなく打ちくつろがぬ節があつた。それが預言者の時代になつては、往々にして神樣を夫に譬へ、人間を其妻として敎へて居る。併しながらこれでは又、神樣を愛するといふことはあつても、之を敬ふ念が足ず、餘りに狎れて之を侮る樣な恐れがないでもない。そこへ一番おしまひに耶蘇基督が現はれて、神樣は人間の父上である、人間は其子であると示し給ふた。父上といふからには之を敬ふのは勿論であれど、さりとて唯其御前に恐れ慄いてのみ居る

程に之を憚るわけではない。又父上といふからには之を愛するのは勿論の事であれど、さりとて亦之を狎れ侮つて敬意を失ふ程慎みを失ふ心配はない。之を敬ふのみならず愛し、愛するのみならず敬ひ、敬と愛とが二つながら備はつて、隨分と莊重に、しかも愉快に、神様の前に毎日の世渡を續けて行く間に、眞の神信心の妙味は見出されるのである。私共が神様を「天に在す我等の父よ」と呼び奉つることが出來るのは、神様が耶蘇基督に由て賜はりたる大なる特權である。

第二、神様が父上であるからには、私共人間は皆其子供である。子は子であるけれ共、神様の思召に從はず、自分勝手の事を行ふ間、私共は父なる神様の前に放蕩息子同様の世渡をして居るものである。神様は私共が斯く罪を犯し、放蕩息子同然の世渡をして居る有様を憐み、之を其罪と禍の中より救はん爲に、救主耶蘇を此世に遣はし給ふた。歌に「鐘太皷聲のかれたが親さうな」といふことがある。鐘と太皷で迷兒を探す一隊の中に、取分け聲をからして狂氣の如く叫んで居るのが、即ち其迷兒の親であるといふのは、如何にも人情を穿つた話ではないか。それと同じ様に神様は又罪の街に彷徨ふて、歸ることを忘れて居る世の人を引戻さん爲に、御獨子基督を此世に遣はし給ふたのである。然も其基督が十字架に懸つて迄も罪人の救の爲に御苦勞下されたことを見れば、其間に天の父様の貴き御愛心が窺はれる。「夫れ神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。蓋凡て彼を信ずる者に滅ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり」とあるのは、其事ではないか。

第三、神様が父上であり、人間が其子供であるといふからには、隨つて世界の人類は皆兄弟同志であることが分る。私共は自分勝手の事のみ考へず、亦他人の爲を思ふ様でなくてはならぬ。自分一人罪から救はれて天國に入る目當が出來たのには滿足せず、進んで世の人を滅亡より救ふ爲に最善の力を盡さねばならぬ。斯くて親子、夫婦、兄弟姉妹が互に相愛する位は愚か。資本家と職工との間にもお互が兄弟であることを記憶し、金持と貧乏人との間にも共に同じ神様の子供であることを忘れず、老たるも若きも、賢きも愚なるも、白皙人種も黄色人種も、日本人も朝鮮人も、悉く皆神様を父上とする一大家族に屬することを知つて、互に己が欲する所を人に施す様になつたな

らば、それこそ天國は其儘に地上に打建てられたものと謂ふことが出來る。而して耶蘇は然ういふ愛の世界を打建んが爲に此世に現はれ給ふた救主である。

ずつと以前に東京の澁谷の邊に住む基督信者の有志が、一週一回宛順番に其家々にて祈禱會を催したことがあり。或夜當時の司法次官三好退藏氏の宅で之を營むことゝなつたが、其頃矢張澁谷に住んで居つた監獄改良家某氏は、數日前其家に引取つた一人の出獄者を連れて之に出席せられたのである。主人なる三好氏は司會者として開會の祈禱をさゝげ、「神樣よ、今夕茲に集られたる兄弟達を惠み云々」といふ樣なことを唱へられると、之を聞て居つた彼の出獄者は喫驚した。何、兄弟達とか、兄弟達とは一體どういふ意味か。私は國の法律を犯して此間迄も鐵窓の下に呻吟して居つた身ではないか。其節の自分は看守の前にさへ頭の上らぬ囚人であつたものを、其看守の上に立つ看守長殿の、其又上に立たるゝ典獄殿の、其又ずつと上に立たるゝ司法次官閣下ともある御方が、今「此兄弟達」と仰せられたではないか。して見ると私の樣な極惡非道の人非人でさへ、神樣の前には司法次官閣下と兄弟のわけになるのであらうか。あこれは勿體ないことだ、有難いことだ、私はどんなにしても此神樣を信仰して、今から眞面目な人間にならねばならぬと。唯其祈禱の中の「此兄弟達」といふ一つの語が、全く憐れなる一出獄者を救ふて、新しき生涯に門出をさすること、なつたのである。神樣は天に在す父上である。私共は其子供である。それ故に世界の人類は皆同胞兄弟である。私共は耶蘇基督に救はれて神樣を愛し、又同胞を愛し、末終に此世界を擧げて愛の一大家庭とする迄は止まざる覺悟を以て、今から銘々其立場々々より奮鬪努力する所がなくてはならぬ。

第十四章　十二使徒

參考（馬太傳十章）

「我汝等を遣はすは羊を狼の中に入るゝが如し。」（太十〇十六）

耶蘇が十二人のお弟子を擇び、之を使徒となし、これに汚れたる鬼を逐出し、凡ての病氣を醫す權力を授け、天國の福音を宣傳へる爲に遣はし給ふた次第は、馬太傳第十

章に詳かである。

第一、なぜ耶蘇が十二人の使徒をお擇みになつたかといふことに就ては、其前の章の終りに、耶蘇が遍ねく村里を廻り、其會堂にて敎へ、民の中なる凡ての病人を癒しておやりなされた事を記し。其後に、「牧者なき羊の如く人々惱み、又流離になりし故に之を見て憫み給ふ。其時弟子達に曰ひ給ひけるは、收穫物は多く勞働者は少し、故に其持主に勞働者を收穫場に送らんことを願ふべし」と、あるのを見れば、大概其事情を察することが出來る。耶蘇の御眼には神樣を知らずして罪の中に惱む世の人の狀態が、牧者なき羊の如くに映じた。それ故御自身寢食を忘れて彼等の救の爲にお盡しなされたばかりでなく、別に十二人の使徒をさへ擇み、同じ御目的の爲に働かせ給ふことゝはなつたのである。昔一休和尙は酒を飲んで騷いで居る人を指して、「彼處に骸骨が踊つて居る」といふたさうである。大將ウイリアム、ブースは又或時其部下の救世軍士官を戒め、「彼の街道を歩く人々の靴音を聞け、これは直ちに地獄に急ぎ進む足音ではないか」と言はれたことがある。此の如く私共の心の眼が一度開けたならば、私

共は金鎖をぶらさげた紳士の靈魂が實は罪の鏈に繫がれ、笑顏を傾くる美人の胸の奥に、實は言ふに言はれぬ悲哀を包み、其他凡て浮た此世の名利を追求むる人々が、實は望なく神なき淺ましい生活を營んで居る狀態が、其儘に映じて、ぢつとして居られず、つひ〳〵我を忘れて其救の爲に起たざるを得ざるに至るものである。使徒パウロが「若し我が兄弟、我が骨肉の爲にならんには、或は基督より絕れ、沈淪に至らんも亦我が願なり」といふたのは、此ういふ靈魂上の實驗から迸り出たる言葉であると思ふ。兎もあれ、耶蘇が此度十二人の使徒を擇んで己と偕に置き、又敎を宣傳ふる爲に遣はし給ふ樣になつたわけは、全く世の人の罪に滅ぶる狀を見るに見兼ね、彼等を救はしめん爲の御計ひであつたことは、明白にして聊かも疑ふべき餘地がない。

第二、「使徒」といふ語の意味は、或特別なる使命の爲に遣はさるゝ使者のことである。而して十二人の使徒達が如何に重大なる使命を神樣から托されて、其爲に世に遣はされたかといふ事實は、誰もよく知る所である。尤も聖書の中には此十二人の外に「異邦人の使徒」と呼ばるゝパウロを始めとし、他に數人同じ使徒といふ名を以て呼ばれ

た人達がある。後世に於ては新に或一つの國に宗教を傳へた人を使徒と呼ぶ風があり。即ちオーガスチンは英蘭の使徒、コロンバは蘇格蘭の使徒、ボニフエースは獨逸の使徒と呼ばれて居る。又は新に或特別の方面に福音を播めた人を使徒と呼ぶ場合があり、即ち大將ウイリアム、ブースの事を貧民の使徒と呼ぶなど其一例である。私共は然ういふ偉い人達の樣に、新に一國、又は一方面に救の原野を開拓する程の力がないでもあらう。併しながら私共は亦銘々其身を置く所の工場、會社、商店、學校、又は村落を、其儘我が特別に遣はされたる戰場と見做し、そこに耶蘇基督と其十字架とを紹介する爲に奮鬪することに由り、其與へられたる小さき範圍に於て一個の使徒となることが出來ぬ筈はない。否々これは屹度私共にも成し得べきことである。亦是非共成し遂げねばならぬ所の職分である。

第三、十二人の使徒達の中には、其當時誰一人として世に名を知られた者はなく、何れも皆地位とか、權力とか、學問とか、又は智識とか、いふ樣なものを有ぬ人達ばかりであつた。併し乍ら、「神は智者を愧かしめんとて世の愚かなる者を選び、强き者を愧かしめんとて世の弱き者を選び、有る者を滅さんとて世の賤き者、輕しめらるゝ者、即ち無きが如き者を選び給ふ」御方である。神樣は態と世の人から何でもない樣に思はれて居る十二人を用ゐて、世界人類を救ふ爲の大變な役割を勤めさせ給ふたものと見える。此の如く神樣は今も往々案外な人物を擧げ用ゐて、とても人間業としては說明の出來ない樣な働をなさせ給ふものである。大將ウイリアム、ブースの昇天に先だつ數ヶ月の頃、或人が彼にむかひ、「大將よ、閣下が過る七十年間神樣に事へて、著るしき恩寵を蒙られた秘訣を唯一言に約めて言へば、何んでありませうか」と尋ねると。答へて、「それは大能の神をしてウイリアム、ブースに在る一切を有せ奉らんと、決心したことが是れである」と、言はれたさうである。此の如く神樣は今も一切を其御手に置く者を潔めて用ゐ給ふ。「エホバは遍ねく全世界を見そなはし、己にむかひ心を全うする者の爲に力を現はし給ふ」とあるのは其事である。

第四、十二人の使徒の中、一人の謀反人を除くの外、其他は皆悉く創業の苦みに堪へ、患難と迫害とを凌ぎ、最後迄忠實を盡して、身を以て道に殉へたものである。

即ちペテロは捕へられて十字架に懸けられ様とする時、主耶蘇と同じ死方をするのは勿體ないからといふて、好んで逆磔にかけられ。アンデレは十字架の上に曝さるゝこと二日二夜、群衆に福音を語り續けて死に。ゼベダイの子ヤコブは刄の露と消えたが、其臨終が如何にも勇ましかつた爲め、刑吏の一人は其場で同じ信仰を告白して首を斬られたといひ。ヨハネは煮えかへる油の中に投ぜられ乍ら不思議に難を免れ、後パトモス島に流された。使徒達の中天年を終へたる者は唯此ヨハネが一人である。ピリポは十字架にかけられて死に。バルトロマイは棒で打たれた後十字架にかけられ、半殺にせられた上で首を刎られた。トマスは鎗にて刺殺され。マタイは戟にて貫かれ。アルパイの子なるヤコブは鞭たれたる後石にて打ち殺され、棍棒にて腦を碎き、之を布晒者に染物の材料として賣られた。而してヤコブの兄弟なるユダとシモンとは共に十字架にかけられて死んだといふ傳説が存つて居る。此の如く基督の宗教は救主の血を以て立てられ、使徒達の生命を以て肥料せられ、其後幾千幾萬の同じ献身的の精神を有つた神の僕の殉難に由て、今日迄榮えて來たものである。そこで一つの問題が起つて來るといふのは、私共今日の神様の僕等は亦此ういふ昔の人達に耻ない丈の信仰を有つて居るか、眞實を盡して居るか、又は献身的の御奉公を勵んで居るかといふ事である。吉田松陰の歌に「ふるきふみ見ればくさ〳〵思ふなり、かゝらん時に我生ればや」と。私共は我が身を古の使徒達に引くらべて、これに耻ぢない丈の忠勤を今の代に勵む様でなくてはならぬ。

第十五章　弱者の友

參考（路加傳七章十八節至三十五節）

「此小さき者の一人の亡ぶるは天に在す汝等が父の聖旨に非ず。」（太十八〇十四）

バプテスマのヨハネは、耶蘇が神様の御獨子、世の救主であるからには、今に何か驚天動地の大運動を始め、一擧して世界を神様に從はする様な御計畫でもあることかと、待てど暮せど一向然ういふ氣色も見えない故、聊か失望の氣味にて、二人の弟子を耶蘇の許に遣はし。「あなたは果して私が最初思ふた通り、神様から遣はされたる救主

でお在なさるか、又は然う思ふたのが私の誤解でありますか」と、尋ねさせた。さうすると耶蘇は答へて、「汝等が見る所、聞く所をヨハネに往きて告げよ、夫れ盲人は見、跛者は歩み、癩病は潔まり、聾者は聞き、死し者は復活され、貧き者は福音を聞せらる。凡そ我が爲に躓かざる者は幸なり」と、仰せられたとある。此意味は、神様の獨子が人類を救ひ給ふ大事業といふは他でない。唯斯くして世の最も氣の毒なる人間を、一人一人、靈魂と肉體との兩方面より濟度する中に、自ら世界の救は行はれるのである。こゝの道理を間違なく諒解し得る者は幸であるぞよとの御言葉である。耶蘇が世界人類の救主であると共に、殊に世の貧民、病人、不具者、惡黨、其他凡て不幸なる弱者の友として、此世に生き存へ給ふたことは、唯此御言葉に由ても明かに觀て取ることが出來るのである。

然らば救主耶蘇は、どんな風に世の賴邊なき弱者の爲にお盡しなされたであらうか。

第一、耶蘇は如何なる無智、貧窮、邪惡の人と雖も、其胸の中には皆神様に肖せて造られたる貴き靈魂のあることを認め給ふた。耶蘇の觀給ふ所に由れば、全世界の人間は殘らず神様の子供である。それ故どんな苦勞難儀をしても、これを救ひ度と思召したのである、「汝等此小さき者の一人をも慎みて侮ること勿れ。」「この小さき者の一人の亡ぶるは天に在す汝等が父の聖旨に非ず」と。耶蘇は人間箇々の胸の中に、全世界よりも貴き靈魂のあることを知つて、これを尊重なし給ふたのである。

第二、耶蘇は弱者を思ひやり給ふた。餘り世の人から擯斥せらるゝ人間をのみ相手になし給ふ故、其お弟子達に對ひ。「汝等の師は何故稅吏や罪ある人と偕に食する乎」と咎め立をする者があると。耶蘇は答へて、「健康なる者は醫者の助を需めず、唯病ある者之を需む。我が來るは義き人を招く爲に非ず、罪ある人を招きて悔改めさせんが爲なり」と、仰せられた。歌に「慈悲の眼に憎しと思ふものぞなき、罪ある身こそ尙憐れなれ。」耶蘇は罪の深い人間ほど餘計に憐んで、之を救ひ給ふたものである。又世の人から侮られる樣な人間ほど、餘計に目をかけて之を撫はり給ふたものである。

第三、耶蘇は彼等を肉體の上から救助し給ふた。宗教は本來靈魂上の事ではあれど、其靈魂は肉體といふ容器に入つて居るのであるから、若し必要ならば私共は靈魂の事

と一緒に、其人達の肉體上の世話迄せねばならぬ。例へば空腹て困つて居る人に差當り入用な物は一椀の飯である。之に小冊子を呉れた處でそれ丈では用をしない。或は監獄から出て來たばかりで身の落着所のない者に取つて、大切なるは之を世話して職業に有就かしめることである。唯説教だけ聞かせたのでは滿足に濟度することが出來難い。耶蘇の奇跡は即ち今で言ふ慈善救濟事業の類である。耶蘇は之に由て人を肉體の上から救助しつゝ、併せて其靈魂を救はれたものに外ならない。

第四、言ふ迄もなく耶蘇は靈魂を救ひ給ふた。救靈は即ち最大の慈善事業である。靈魂を救ふが故に、これ迄惡い習慣に捕へられ罪の奴隷となつて居つた者が、改まりて堅氣な稼人になることが出來るのである。又靈魂を救ふが故に、これ迄くよ〳〵と心配苦勞に壓へつけられて居つた人が、氣を取直して今一度新しい生涯のし直しをすることが出來るのである。肉體だけ助けて靈魂を救ふことをしない慈善は、燒石に水の慈善である。其永續的の効果が甚だ乏しいのは、更に不思議もないことである。救主耶蘇の御主義は、言ふ迄もなく靈魂を救ふことに由て其人を救ふ御主義であつた。それ故一人の中風患者を四人の男が擔いで來た時、其肉體の痛苦を癒す前に先づ其靈魂の病氣を治療し、「汝の罪赦されたり」と言ふて、周圍の人々に怪まれ給ふたことがある。

又或時三十八年の長患にて困り切つて居る大病人を癒した後、「視よ汝既に癒たり。復罪を犯すこと勿れ。恐くは前に勝れる災禍汝に羅らん」といふて、其靈魂上の注意を促がし給ふた樣なこともある。世の貧民弱者を根本的に濟度し度と望む人々は、何よりも先づ耶蘇の救を彼等に敎へて、其靈魂を罪より救ふ樣でなくてはならぬ。

第五、耶蘇は弱者を用ゐ給ふた。前きには世間の厄介者であつた人間が、基督に救はれて後は人に迷惑をかけないのみならず、進んで人の益をなす樣な例は幾らでもある。サマリアの女は五人の夫を取かへた賤しい婦人であつたが、用ゐられて其村の人達を信仰に導く手引となり。七つの惡鬼に憑れて居つたといふマグダラのマリアは亦、誰よりも先に主の復活を拜み、之を弟子達に告げ知らする役目を仰せ付つたといふことである。此の如く耶蘇はどんな惡人をも、無學無能の人をも、拾ひ上げて之を聖別し、何んぞの御役に立せ給ふ御方である。

第六、耶蘇は彼等の爲に己が身を與へ給ふた。耶蘇の死は世界萬民の爲である。併し乍ら殊に世の賴邊なき弱者の爲であつたと謂ふても差支ない。耶蘇が稅吏の長ザアカイの家に立寄り給ふのを見て、「彼は往て罪ある人の客となれり」と呟く者があると。答へて「人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり」と仰せられた。耶蘇は「喪ひし者」「至微者」又「小子」の濟度の爲に其身を擲ち給ふたのである。今も此世の弱者が一番に需むる所の者は金でなく、品物でなく、異見でも、亦講釋でもなくて、唯人である。人の献身的の愛情である。「眞正の慈善は人に金品を與ふることではなくて、其身を與へることである。」而して耶蘇は世の貧民弱者の爲に其身を與ふる者の魁となり給ふたことを知らねばならぬ。

第七、最後に耶蘇は其以來今日迄、引續き同じ精神を承け繼で世の弱者の爲に働く人物を起して居給ふ。即ちジョン、ハワードが監獄改良の爲に起ちたるも、神父ダミエンが癩病人の爲に死たるも、ナイチンゲール孃が傷病兵の爲に盡瘁したるも、將又救世軍の大將ウイリアム、ブースが貧民の救の爲に身を擲ちたるも、悉く皆耶蘇の靈に動かされ、其模範に倣ひ、又其御教訓を實地に行ふたものに外ならない。耶蘇は眞に貧民弱者の無二の友にて、亦其唯一の救主である。

第十六章　種蒔の喩

參考（馬太傳十三章一節至二十三節）

「我譬喩を設けて口を啓き世の始より隱れたる事を言ひ出さん。」（太十三〇三五）

「天然は第二の聖書なり」といふことがある。其意味は聖書に神樣の聖旨を敎へてある如く、天然にも亦神樣の御旨が現はれて居るといふのである。氣をつけて觀れば山にも、川にも、草にも、木にも、禽獸にも、石金にも、此世に有ると有ゆる物は皆神樣の御敎を說いて居る。私共が唯浮かりして居る故、それを聞取ることが出來ない迄である。耶蘇基督は度々天然界に現はれたる神樣の御旨を語り、又は天然界の事を引て大切なる靈魂上の道理を說き明し給ふた。中にもガリラヤの湖の畔にて、舟の中から岸邊の群衆に敎へ給ふた種蒔の喩の如きは、其最も著るしきものである。

今雑と其種蒔の喩の筋を言へば、一人の百姓が麥を播きに出た處が、播いた種の中路旁に落ちて天の鳥に啄まれたのがある。又土の薄い石地に落ちて一應は生へ出したが、根がない爲め日に照つけられて枯れたのがある。又棘の中に落ちて成長はしたけれ共棘に掩はれ、實らなかつたのがある。併し別によく耕したる畠地に落ちたのもあつて、これは軈て三十倍、六十倍、百倍の實を結んだといふのである。

これは何ういふことを敎へた譬喩談かといふに、即はち神樣の御敎を種、又人の心を土地に譬へて、大切なる靈魂上の道理を敎へられたものである。二宮尊德の言ふたことに、「我道は人々の心の荒蕪を開くことを本意とする。心の荒蕪一人開くる時は土地の荒蕪は何萬町あるも憂ふるに足らぬ」とある。此の如く田畠を開墾するよりも先に大切なるは、人の心の田地を開墾することである。心の田地さへ開墾が出來れば、其所有する田畠は自ら開墾が出來やうといふものである。同じ道理にて田畠に雜草が茂つて居るのは、其持主の胸の中に雜草の茂つて居ることを示すものにて。又は商人の店先が混雜して取締のないのは、其主人の心が混雜して取締のない證據であると謂はれても仕方がない。兎角大切なるはお互の心の田地の手入である。

神樣の御敎は種である。其御敎の種を人の心の田地に植付る傳道の事業は、世にも高貴にして亦最も重要なる働である。即ち古人の語にも、「一年の計は穀を植るにあり、十年の計は樹を植るにあり、百年の計は人を植るにあり」といふ。其人を植るのが即ち此傳道事業の本色である。これは唯百年の計といふばかりでなく、眞に永遠の世界に繋がる所の最も大切なる事業である。

第一、百姓の播いた種の中、路旁に落ちたのは天の鳥に啄まれたといふことである。路旁の地面は通行人に蹈れて固くなり、種の入込むべき便宜がなかつた如く。此世の浮薄なる風俗に揉まれ、罪惡の習慣に慣れて擦れッからしとなり、鐵面皮となり、又は頑固强情に固まつて居る人などは、どんなに眞面目な宗敎のお話を聞てもそれが腹に入らない。右の耳から聞て左へ脫してしまふ迄のものである。路旁の踏み固められた土は之を和らげねばならぬ。其如く頑固强情なる人の心は謙遜柔和になつて後に、始めて神樣の御敎の種が無事に納まらふといふものである。此路旁に落ちた種とは、

出來の惡い聽聞者の事である。私共は此ういふ聽聞者となつてはならぬ。

第二、次に土の薄い石地に落ちた種は、一應生へ出したけれ共根がない爲め、日に照りつけられて枯れたといふのである。其如く世には鳥渡した出來心にて宗敎を信仰すれ共、心の奥に根據のない信仰である故、少し困難の事に遭ひ、又は惡口雜言の一語も聞けば、直に縮み上つて止めてしまふ者がある。昔話に或人が死んで極樂に行くと、一つの倉庫に木茸の樣なものが一ぱいあるから。「何んですか」と尋ねたら。「之は人間の耳である。善い事を耳にのみ聞て行はなかつた人の、耳のみ極樂に來て身體は地獄に墮ちたのだ」と言はれた。其次の倉庫には又數の子の樣なものが一ぱいあつて。「此は何んですか」と問ふたら。「これは人間の舌である。善い事を口にのみ言て身に行はなかつた人の、舌のみ極樂に來て身體は地獄に墮ちたのだ」と言れたといふとがある。私共の宗敎は唯耳に聞き口に語るだけのものでなく、深く心の奥に根を有つたものでなくてはならぬ。石地に落ちた種といふは出來の惡い求道者、又は改心者の事である。私共は此んな風の求道者、或は改心者となつてはならぬ。

第三、次に棘の中に落ちた種は、棘も共に育つて之を掩ふた爲め實らなかつたといふのである。此の如く折角基督の救を受け、神樣を信仰する者となりながら、然も二心にして此世の名聞や、利益や、娛樂などを見切ること能はず、所謂神樣と財貨とに兼ね事へ樣とする人々は、到底基督信者に相應しき實行の果を結ぶことが出來ぬ者である。昔禽と獸と軍をした時、蝙蝠といふ奴が巧みに双方の間に飛まはり、禽の羽振の好い時は自分も羽を廣げて禽の仲間入をし。獸の勢の好い時は羽を縮めて鼠の親類見た樣な風を裝ふて居ると。後に禽と獸との間に平和の談判の出來た時、それにしても蝙蝠の仕打が憎らしい、彼の儘にして置ては他の見せしめにならぬといふので、双方協議の上之を嚴罰に附し、其以來蝙蝠は日中世間へ顏出がならぬことになつたのだといふてある。私共は此昔話の蝙蝠見た樣な曖昧な人物となつてはならぬ。棘の中に落た種といふのは、出來の惡い基督信者の事である。私共は此んな風の二心なる基督信者となつてはならぬ。

第四、今一つ沃土に落ちたる種は立派に發育して、三十倍、六十倍、百倍の收穫があつ

たといふことである。此の如く「正しく且つ善き心にて道を聽き、之を守り、忍びて實を結ぶ者」は、所謂一粒萬倍の繁榮を來し、多くの罪人をさへも自分が得たると同じ救の御惠に導くことが出來る。沃土に落ちたる種といふのは模範的の基督信者の事である。私共はどうか此ういふ忠良なる神樣の軍人となり度ものである。

耶蘇は此譬喩談の中に「耳ありて聽ゆる者は聽くべし」と仰せられた。或時二十年も教會に出席して居る男が臨終に其教師に對ひ、「最少し壯健な間に說教を聞て置けば可つたに」と言ふ故。「貴君は二十年來缺さず教會に出たではないか」と問ふと。「教會には出ましたが本氣で說教聞たことがないので、殘念で堪りませぬ」と言ふた。こゝに又或商人の妻があり、集會から歸つて「今日の說教には大變に感心しました」といふ。「どんな說教でしたか」と問ふと。「それは忘れました」と答へた。「忘れては無駄ではないか」といふと。「然うではありませぬ。私は說教聞て歸つて來ると、直にこれ迄店で用ゐた誤魔化の秤を折て棄ました」といふたさうである。私共は神樣の御教を他人事と思はず、いつも我が身に引當て、聽取る傍から之を實行に現はさねばならぬ。

第十七章　奇蹟

參考（馬可傳五章一節至二十節）

「耶蘇出て多くの人を見て之を憫み其病める者を醫せり。」（太十四〇十四）

救主耶蘇の御生涯に關係して多くの奇蹟の紀事がある。難病人を醫し、死人を復活らせ、鬼を逐出し、僅かのパンにて多人數を養ひ、又は海の濤を靜め給ふたなど、耶蘇が三年餘りの公けの御生涯にて行ひ給ふたる奇蹟は、其數が決して少くない。私共は此不思議なる事實に就て何ういふ風に考へたら可であらうか。

第一、此世の中には今も人間の智惠判斷に餘る不思議な事が多くある。米國の或大學總長は其弟子にむかひ、「そんな事は今の人間に分るものではないと斷言し得るのが、學者の學者たる所以である」と言はれた。無學な人間は自分には分らぬでも、學者に尋ねたら分るであらうと思ふことを、學者は大膽に「そんな事が分るものでない」と言へる丈の相違である。此の如く此世には、人間の智惠判斷に餘ることのみ多いのであるか

ら、神様の御獨子が態々此世にお降りなされた時の御業に、私共の判斷に及ばぬ事があつたからといふて、左程怪むには及ばぬことである。マホメットといふ人は、牛が草を喰ふと其が乳になつて出るのは、奇蹟ではないかといふて居る。チャンニングの言に又、森の大木を眺めたる後、其下に落て居る小さい實を拾ひ上げ、其實の中に彼程の大木となるべき命が宿つて居るとかと思へば、之は眞に奇蹟であると言ふてある。私共は此不思議だらけの世に住んで、特別に耶蘇の奇蹟をのみ怪むべき筈ではないと思ふ。第二、加之古來眞實至誠の人の在る所には、往々にして尋常ならぬ不思議が行はれるものである。二宮尊德が野州櫻町の人民の邪惡なることを憂へ、成田の不動に行つて三七日の斷食祈禱をして居ると。丁度其滿願の當日、櫻町人民の代表者は、尊德の行衛を尋ねて來て、お詫を申出たといふ話がある。眞の神様を知らない人達でさへ此うであれば、況して神様の靈に滿された人の周圍に、種々人間業として說明の出來ないことが起るのも、更に不思議はないことである。それ故ジョン、ウエスレーが說敎すれば、人々は其犯せる罪に責められてバタ〳〵と倒れ、まるで魔法にかゝつた樣であつたといひ。又ジョージ、ミューラーが祈禱をすれば、神樣は響の聲に應ずる如く之に應て居給ふた。大將ウイリアム、ブースが其初或町にて受持れた敎會には、入り來る程の人々が皆見違へる樣な善人になつて出て來たので、人々は其會堂の事を「人間改造所」と綽名したといふことである。況して神樣の御獨子ともあるお方が、御在世の當時、其往るゝ所に尋常ならぬ不思議が行はれたといふ位は、決して怪しい話ではなくて寧ろ然うあるべき筈のことである。

第三、其上に考へて見れば、不思議なのは耶蘇の爲された奇蹟よりも、寧ろ耶蘇御自身である。ナザレの田舍大工であつた者がガリラヤの漁夫等數人と共に事を起し、三年かそこらユダヤの小天地にて、貧乏人や、片輪者、又は病人などを相手に傳道した揚句、其時代の人々の反對を受け、十字架の上に殺されたといふ、其御方の精神が今日、信仰、正義、博愛を主義とする一切の高尙なる運動、事業の土臺となつた如きは、何うしても私共の想像に及ばぬ所の奇蹟である。預言者イザヤは耶蘇の事を述べて、「其名は奇妙」といふて居るが、如何にも其如く、耶蘇基督の御生涯こそは、眞に世界あつ

て以來、最も大なる奇蹟である。其爲されたる一つ一つの奇蹟の如きは、決して比較にならぬ程、大なる不思議であると謂はねばならぬ。

第四、殊に私共耶蘇を信仰して救を身に受けたる者から見れば、此靈魂の救といふ實驗こそは、眞に驚くべき目前の奇蹟である。スポルジョンといふ人は、馬太傳の著者マタイが、稅吏であつた自分の基督に救はれた紀事を、其行ひ給ふたる奇蹟と奇蹟との間に載せて居るのに、深い意味があると說たことがある。或時私の知人が、ハックスレーといふ學者の論文を讀むと、其中に聖書の奇蹟の事を批評し、殊に耶蘇が一聯隊の惡鬼に憑れた男を助け給ふた紀事を引て、之を惡樣に論じてあるのを見て、大きに懷疑の思想に陷つた。そこへ數日來其人の世話にて救はれ、一時は旅役者と迄落ぶれたのを改めて、眞面目な生涯に入りかゝつて居る親戚の者が訪ねて來た。而して言ふには、「今朝も聖書を讀んで居ると、一人で多數の惡鬼に憑れた人を、基督が救ふておやりなされたといふ處がありましたが、私は全く彼の人の樣に多數の惡鬼にとりつかれて居つたのを、此度お蔭で救ふて戴いたのでありまする」といふ話をした。これを

聞て私の知人は信仰上の懷疑が一時に釋けた。假令不信仰なる學者は何んとでも言ば言へ、耶蘇は今も現に斯く惡鬼に憑かれた者の惡鬼を逐出し、罪に死んだ者を活かし、心の盲人を見せしめ、靈魂上の跛者を起たしめ、其他多くの不思議を行ふてお在なさるではないか。耶蘇の奇蹟は千九百年前の昔話でなくて、現在今日の代にも行はれて居る事實であると、彼は今更の樣に堅固なる信仰に入ることが出來たのであつた。

第五、然らば私共は耶蘇の奇蹟に就て、どういふ實際上の敎訓を學んだら可いかといふに。

(一)其第一は神樣が活て居給ふと云ことである。此世の中は盲滅法なる自然の力の支配する所でなくて、全能なる神樣の統治し給ふ世界である。「エホバは活く。」「神には能はざる所なし。」私共は此活ける大能の神樣を賴りに、大膽に進んで善事を行ふことが出來る。昔ルーテルが宗敎改革事業の困難に疲れて失望して居る時、其貞節なる妻が黑い喪服を着て傍に立ち、「神樣はお死なさいましたか。若し左もなくば活ける神樣を信仰する貴夫が、そんなに失望なさる筈がないではありませぬか」といふて之を勵ま

したのは、名高い物語である。此の如く私共の神様は活ける大能の神様である。

(二)耶蘇の奇蹟は又耶蘇の御慈愛を示すものである。「耶蘇出て多くの人を見て之を憐み、其病める者を癒せり」とあり。耶蘇の奇蹟は其御憐みの結果である。其如く救主耶蘇は今も大なる御愛心と御同情とを以て、天の父なる神様の前に取なし給ふ。私共は耶蘇の奇跡を讀む時其奥に潜む御愛心を認め、之を我が身に引當て有難く感佩すべきものである。

(三)耶蘇は屢々「汝の信仰の如くなるべし」と仰せられた。私共は耶蘇の奇跡の事を考へるに就ても、同時に信仰の力の如何に大なるものかといふことを學ばねばならぬ。奇蹟は信仰の寵兒である。私共は神様を信ずるが故に其不思議なる恩寵と御力とを實驗することが出來るのである。「汝若し信ずることを得ば、信ずる者には能はざることなし」といふのは、其事ではないか。私共は奇蹟を行ひ給ふ神様に依頼んで、人間業ならぬ不思議を今の代に行ふ者とならねばならぬ。

第十八章　生命のパン

参考（約翰傳六章）

「我は生命のパンなり、我に就る者は饑ず。」（約六〇三五）

ガリラヤ傳道中の耶蘇は、僅かのパンと魚とにて五千人の大衆を養ひ給ふに及び、其評判が頂上に達した。併し乍ら勢極まれば變ずるものである。耶蘇に對する人民の失望も亦實に此時に始まつたことを見れば、特別に其事實に就てお話をする必要がある様に思はれる。

耶蘇がガリラヤの湖の東岸にて御傳道になつた時、時を忘れて有難い御説教を聞取れて居つた群衆が、そろ〳〵空腹を覺え出した様子を御覽になり。耶蘇はお弟子の一人なるピリポに、「何處からパンを買ふて來て此多人數を養ふべきか」とお尋ねになつた。別に爲すべき所を知りながら態と斯くは問ひ試み給ふたのである。答へて「金五六拾圓のパンを買ふたとしても、此程の多人數には尚不足かと存じまする」と言ふて居

る所へ。同じくお弟子の一人なるアンデレが來て、「茲に一人の童子が大麥のパン五箇と小き魚二つとを持て居り、お役に立つなら皆差出し度といふて居りまするが」と、言ふのを聞て。耶蘇は「兎も角も群衆を坐らせよ」と仰せられる故、その通りにすると、丁度五千人程青草の上に坐つた。耶蘇は彼の童子が差出したる五箇のパンと二つの小き魚とを取り、神様に感謝して後これを頒たせ給ふに。不思議なる哉、其五箇のパンと二つの魚とは、分ければ分ける程幾らでも殖えて、皆食ひ飽きる程に澤山になつた。そこで耶蘇はお弟子達に命じ、少しも失はぬ樣殘りの屑を拾はせ給ふと、それ丈でも十二の籃に一ぱいになつた。

集りたる人々は此不思議なる御業を見、「これこそ兼々待望んで居つた預言者の出現せられたものに相違ない」と、耶蘇を擁立て王樣にしやうとする氣色があるのを觀て取り、耶蘇は直に人を避て山に入り、祈禱に時を過し給ふた。斯くて山からお出になつた頃は、丁度お弟子達が湖水の上で難船し、當惑し切つて居る處であつた故、水の上を歩いて往つて之を助けておやりになつた。

其翌日カペナウンに歸り、後をつけて來た多人數に對ひ、「汝等は昨日パンを食つたからといふて後に附てまはるのでは役に立たない。胃腑を充すパンよりも、必要なるは生命のパンである。即ち靈魂を養ふ糧である。而して斯くいふ我こそは其生命のパンである、天より降りし生けるパンであるぞよ」と、お說きになると。人々は呆れて、「此人が何んで其肉を我々に食べさすことが出來るものか」といふ樣な調子で。折角昨日頂上に迄登りつめた耶蘇に對する人望は、此時から一時に下り坂にむかひ。群衆が失望して去つたのみかは、一旦信者になつて耶蘇に從ふた者さへ何時しか其家に歸り、御一緒にお伴をして歩く者の數が急に減つた。そこで耶蘇は其お弟子達に「汝等も亦去らんと思ふや」とお尋ねになると。ペテロは答へて、「主よ私共はあなたを離れて誰に往きませうか。永生の言を有ち給ふ者は唯あなたではありませぬか」と、いふたのである。

第一、今私共は此パンの奇跡に就て、其奥に潛む敎訓を尋ねて見るに。

(一)其當時空腹くて食を求むる者は多いにも拘らず、之を養ふべき食物は、不足處で

はない、殆んど皆無であつた如く。今も私共の目の前に見る靈魂の世界の有様は丁度其通りである。「主エホバ言ひ給ふ、視よ日至らんとす。我饑饉を此國におくらん。是はパンの乏しきに非ず、水に渇くにあらず、エホバの言を聽くことの饑饉なり」と。

私共は此靈魂上の大饑饉に對し、どういふ所置をしたら可であらうか。

(一)耶蘇は一童子が、惜氣なく、献げたる五箇のパンと二つの小き魚とを利用し、これに由て不思議に五千人を養ひ給ふた。其如く私共の智惠、力量、才能、財産等は、假令甚だ僅かであるとも、それを全然耶蘇の御手に差上げさへすれば、耶蘇は聖別して意外の御用に立せ給ふ。私共はこゝに銘々の献身に就ての面白き寓意を發見することが出來るのである。

(二)耶蘇は神様に感謝して後、パンと魚とを人々に頒ち給ふた。私共は亦三度の食事を戴く度に神様の御惠を記憶し、其都度感謝して箸を取る様でなくてはならぬ。「汝等食ふにも飲むにも何事を行ふにも、凡て神の榮を顯す様に行ふべし。」

(四)パンと魚とは多人數に頒てば頒つ程殖えた。それと同じ様に神様の御惠は之を他

人に與へれば與へる程增すものである。人を敎ふれば一層人を敎ふる智惠が出で、人を救へば一層人を救ふ力が增す。「之を用ゆれば虎となり、用ひざれば鼠となる」とは此事をいふたものではないか。

(五)五箇のパンと二つの魚とで五千人を養ふ力のある耶蘇は、少しも失はざる様殘の屑を拾はせ給ふた。宗敎と經濟とは立派に調和を保つべきものである。私共は自分の爲にはパンの屑を拾ふ儉約をしながら、人助けの爲には全財産をも惜まぬ博愛の精神がなくてはならぬ。

第二、耶蘇はパンの奇跡を見て感動に堪へ兼ぬる群衆を離れ、獨り靜に山に入つて祈禱をなし給ふた。

(一)これは耶蘇を王とし様とする間違つた思慮を挫く爲であつた。世の人の煽動に乘ず、冷然として得意の時に處し給ふ耶蘇の御行は眞に奥床しいではないか。

(二)これは又一つの行動が濟んだ後に、更に新しき運動に嚮ふ準備を調へる所以であつた。其如く私共は物事の始めに神様に祈禱をするのみならず、亦物事の終りに神様

に祈り、更に新しき元氣精神を用意して其次の行動に取かゝる樣でなくてはならぬ。

(三)斯くて後、耶蘇は山を下つて湖水の上に惱める弟子達を救ひ給ふた。此の如く私共も亦山の中の祈禱で得たる力を用ゐ、海の上の遭難者を濟度せねばならぬ。密室で神樣から戴いたる御惠を携へ、往て罪と禍とに惱める同胞を祝福せねばならぬ。

第三、耶蘇はパンの奇跡の翌日、生命のパンの事を人々に敎へ、而して「我は生命のパン也」と仰せられた。今其意味を考へて見るに、

(一)所謂生命のパンは喰パンである、菓子パンではない。宗敎は閑人の趣味や娯樂の爲ではなくて、人間の世渡に絶體必要の品である。耶蘇は三度の食事と同く、私共に無て叶はぬ所の靈魂上の糧である。

(二)次にパンは藥ではない。耶蘇は靈魂上の大醫として何んな惡人をも醫して善人とならせ給ふ。併し乍ら耶蘇は唯惡人を救ふだけでなく、却つて善人をして愈〻善事を行ひ、進んで力ある神樣の軍人とならしむる所の救主である。耶蘇は罪人を醫す藥たるのみならず、却つて其以上に、醫されたる後の私共を養ふ靈魂上の糧である。

(三)パンは亦魚ではない。私共の靈の生命を助くべき副食物の如きものは數あるかも知らねど、主要の食物は唯耶蘇ばかりである。私共は年が年中、明けても暮ても、唯此救主耶蘇をのみ我が生命の主として之に依賴まねばならぬ。

第十九章　變貌山

參考（路加傳九章二十八節至四十三節）

「此は我が愛子なり、これに聽くべし。」（路九〇三五）

カイザリヤ、ピリピの北にヘルモン山といふ高山がある。海拔九千四百尺、夏と雖も其頂上に雪の消た例はない。耶蘇はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三弟子を連れて、或夜祈禱の爲に此山に登り給ふた。多分頂上迄登られたのではない。半腹の然るべき處を見立て、そこにて靜に神樣に交はり給ふたものと見える。祈禱をして居給ふ間に、其お顏の容は平常と變り、日の如く輝いて、其御衣服は白く光つた。而してモーセとエリヤとの兩人が其場に現はれ、耶蘇が程なくエルサレムにて惡人原の手にかゝり、

殺され給ふべきことなど語り合ふのであつた。三人のお弟子等は、旅の疲勞にて最初の間は寢て居つたが、不圖目をさまし、此有樣を見て喫驚した。其時ペテロは耶蘇にむかひ、「こゝに三つの小舍を設け、一つは主の爲め、一つはエリヤの爲に用ゆることゝし、此儘いつ迄もお留りなされては如何でせうか」とお尋ねした。もとより咄嗟の間に思ひ付た儘を申述べたので、別段深く考へての上の言ではなかつた。折しも白雲がたなびいて其お姿を蔽ひ隱した故、お弟子等は懼れをなして居ると、雲の中から聲があり、「此は我が愛子なり、これに聽くべし」といふかと思へば、忽ち雲霧れてそこには唯耶蘇のみ一人在し給ふた。翌日耶蘇が三人のお弟子を連て山から降り給ふ時、麓では後に殘されたお弟子等が、癲癇持の一少年を癒さうとして、いつになく失敗し、當惑し切つて居る處であつた故。「噫信なき曲れる世なる哉、我汝等の中に汝等を忍びて何時迄あらんや」と言ひつゝ、直に之を癒しておやりなされた。

私共が此變貌山の物語に就て考ふべきことは、第一、此時耶蘇は祈禱の爲に登山し給ふたのだといふことである。耶蘇は神樣の御子ではあつたが、人間の姿をとつて此

世に來り給ふた以上、眞の人の子として、始終天の父なる神樣に祈禱をなし給ふたのである。聖書にのこつて居る耶蘇の御一代記を讀んで、最も目につく一事は、其如何に度々祈禱の爲に山に登り、又は海邊に往き給ふたかといふ事である。其如く私共も亦平生祈禱をつとめねばならぬ。「汝祈る時は隱密なる室に入り。戸を閉て隱れたるに鑒給ふ汝の父に祈れ。さらば隱れたるに鑒給ふ汝の父は顯著に報い給ふべし。」私共が世に對して力がないのは、神樣の前に力がないからである。私共が人を動かすことの出來ないわけは、先づ神樣を動かすことをせぬからである。私共はもつと〳〵人を避けて神樣に祈ることを力めねばならぬ。耶蘇は此時其選りぬきのお弟子達三人を連れて行て、共に神樣に祈り給ふた。此の如く同じ信仰を有ち、同じ目的を抱く同志の友達が、一つに寄つて神樣に祈るのは眞に樂しいものである。亦最も益あることである。耶蘇も他の場合に其事を敎へて、「若し汝等の中二人のもの地に於て心を合せ、何事にても求めば、天に在す吾が父は彼等の爲に之を成し給ふべし。蓋わが名の爲に二三人の集れる處には、我も其中に在ればなり」と仰せられて居る。

第二、耶蘇は祈禱の中に其御姿が變り給ふた。舊約聖書にモーセが四十日四十夜山に入つて神様と交り、下山した時には其顔が輝いて、見る人が眩く覺えたといふのも、思ひ合されることである。併し乍らモーセのは唯神様の御威光を其顔に反射した迄である、月が太陽の光を反射する様なものであつた。けれ共耶蘇は其御自分の中にある光を外に放ち給ふたのである、太陽が其光を放つ様なものであつたといふた人がある。成程然ういふわけのものであらう。兎もあれ祈禱は人の身に光輝を放たしめるものである。嘗ては罪に穢れ、惡に染んで居つた私共さへ、祈禱に由て神様に近づき、神様と物言ひ、神様と親しき御交際に入ることに由て、其神々しき御德に化さるゝことが出來る。「凡て我等帕子なくして鏡に映す如く主の榮を見、榮に榮彌增りて其同じ像に化る也。これ主即ち靈に由てなり」とは此事である。

第三、ペテロは睡眠からさめて、耶蘇がモーセ、エリヤと聖き御物語をなし給ふ狀態を見、出來ることならそこに三つの小舍を設け、お三人が其儘に長く留まられんことを願出た。併しながらこれは固より神様の御旨に適ふ願ではなかつた。山の上で靜に天の父様と交はり、又は古人を尙友するのは樂しいことであれど、それと同時に私共は亦山の麓にて現在罪と禍とに苦しむ同胞のあることを忘れてはならぬ。私共は此世ながらに凡ての罪と緣を切り、神様と偕に在る、所謂聖潔の惠を樂んで居るべき者である。併し乍ら私共の聖潔は又所謂戰爭的の聖潔でなくてはならぬ。自分一人聖き神様の惠を私するのでなく、却つて勇往邁進、我を忘れて世の人の救の爲に戰ふ種類の聖潔でなくてはならぬ。私共は唯いつ迄も、山の中の靜な祈禱の時をのみ樂んで居るわけには行ぬものである。

第四、聲は雲より出で、「此は我が愛子なり、これに聽くべし」といふ事であつた。而して其時は律法を代表するモーセも、預言者を代表するエリヤも、早や居なくなつて、唯耶蘇のみ一人そこに在し給ふたといふ事である。此の如く釋迦や、孔子や、マホメットや、其他さま〴〵の聖人君子は世に現はれ、何れもそれ〴〵世の人を敎へ導いて大層の功德をせられたに相違なけれど。然も世界萬國の人民が最後に其御膝下に坐つて敎を受くべきお方は、唯神様の御獨子耶蘇基督御一人である。「神昔は多くの區別を

なし、預言者により先祖達に告げ給ひしが、この末の日には其子に託りて我等に告げ給へり」といふのは其事である。耶蘇は神様が最後に此世の人を救はしめん爲め、遣はし給ふたる眞の救主である。

第五、耶蘇は山から下りて、後に留められたお弟子等の持餘して居る難病人を癒し給ふた。斯くして難病人と其親とが助かつたのは勿論、お弟子等の顏も立ち、反對者の口をも噤ましめて、有ゆる問題は悉く解決せられたのであつた。或人の書たものに此ういふことがある。「私が學者に其欲いもの三つを尋ねた處が、書物と健康と靜な書齋とであると答へた。私が金持に同じ事を尋ねると、一にも金、二にも金、三にも金であると答へた。貧乏人に尋ねると、一にもパン、二にもパン、三にもパンであると答へた。酒飲に尋ねると、一にも酒、二にも酒、三にも酒であると答へた。一般の世人に尋ねると、財産である、名譽である、歡樂であるなど、答へた。最後に一人の貧くして篤信なる基督信者に尋ねると、答へて、それは基督を見出す事と、基督に似る事と、又基督と偕に在る事とであるといふた」と。此の如く眞面目に神様を信ずる私共に取つては、耶蘇基督は私共の一切である。私共は唯耶蘇をさへ我が有とすれば、それにて事足るのである。何故かといふに耶蘇は私共の有ゆる問題を解決し給ふからである。

第二十章　活ける神の子

參考（馬太傳十六章十三節至二十三節）

「汝は基督、活ける神の子なり。」（太十六〇十六）

耶蘇は北の方のカイザリヤ、ピリピといふ所へお出かけの途中、其お弟子達に對ひ、「一體世間では我がことを何んと評判して居るか」と、お尋ねになると。答へて「古への預言者エリヤか、又はエリシヤの再來であらうといふ者もあり、或は先頃惡王ヘロデ、アンテパスの爲に殺害せられたる、バプテスマのヨハネが復活つたのであらうなど、種種御噂を申上げて居りまする」といふた。すると耶蘇は、「それでは汝等は我がことを何んと言ふか」と、お尋ねになると。氣早やのペテロは眞先に答へて、「汝は基督、活ける神の子なり」と申上げた。これは耶蘇が尋常のお方でなく、實は神様から遣はされた

る其御獨子、世の救主であるとの意である。耶蘇は此御返事を聞て滿足に思召され「これ全く人間の智慧分別にて考へ出したことではなく、天の父なる神様が示し給ふたのである。汝の名はペテロ、即ち巖といふ意味であるが、名詮自稱、汝は此耶蘇は基督、活ける神の子なりといふ大磐石の信念の上に、基督の教會を打建つ可きものぞ」と仰せられた。この頃から耶蘇は又其お弟子達に、御自分が程なくエルサレムにて長老、祭司の長、學者等より迫害を蒙り、殺されて三日目に復活るべきことを示し給ふと。ペテロが引きとめて之を諫め樣とする故、耶蘇はふり反つてペテロを戒め。「惡魔よ我が後に退け、汝は我に躓く者である。汝は神樣の事を思はず、人の事を思ふて居るのである」といふて、これをお叱りになつた。

今此事實に就て私共の學ぶべきことは第一、今も昔と同じ樣に、耶蘇の御人格に就て世間に種々なる異說のあることである。即ち或人は耶蘇を唯大聖人であるといひ、或人は大教師であるといひ、或人は又宗教上の大天才であるなどゝいふ。併しながら私共はペテロと同じく、耶蘇を基督、活ける神の子なりと信仰してのみ、安心して

我が身と靈魂とを其御手に任せ奉つることが出來るのである。或學者の說に、難破して沈みかゝつた蒸汽船の船客が、若し其船の危險を悟らず、又は折角用意せられた救命船の効用を信せずして、其儘船室に留つたならば何うであらう。耶蘇の基督たることを信せずして、其御救に賴らぬ者の運命も亦、之と似通つた處があるといふてある。氣を付ねばならぬことではないか。

第二、ペテロは耶蘇のことを「汝は基督、活ける神の子なり」と告白した。基督といふ語の意味は「受膏者」、即ち膏を注がれた者といふことで、ユダヤの國では預言者と祭司と、王と、此三つの大切な役を勤める人だけ、就任式の時頭に膏を注いで之を任命する風があつた。而して救主耶蘇は神樣から聖靈の膏を注がれ、預言者と、祭司と、王と、三つの大切なる役目をお一人に兼ねられたお方である故、之を基督即ち膏を注がれたるお方と呼び奉つるのである。

(二)然らば耶蘇が何うして預言者であるかといふに、昔の預言者は神樣の御旨を其時代の人々に告げ示した如く、耶蘇は隱れたる神樣の奧義を世界の人類に顯はし給ふた

からである。即ち神様が人間の父上であること、人間が其子であること、子は子ながら罪を犯して放蕩息子の姿になつて居るのを神様が獨子を遣つて救ひ給ふこと、罪から救はれた者は神様の靈を胸に宿し、愛の人となつて天國を此世に打建ん爲に働く者となること、又死んだ先では限りなき榮の御國に入れられることなど、世の始から隱れたる、最も大切なる神様の奥義を、耶蘇は明かに世界萬民に告げ示し給ふたのである。

(二)耶蘇が何うして祭司であるといふに、それは、昔の祭司が羔を殺して犧牲となし、これを神様に献げて人民の罪の赦を祈つた如く。耶蘇は其貴き御體を十字架にかけ、血汐を流して世界萬民の罪を贖ひ、これを神様の前に取りなし給ふたからである。

(三)耶蘇が何うして王であるかといふに、王は其國家を統べ治むるが如く。耶蘇は人の心を支配し給ふ靈魂の世界の支配者だからである。私共は自分勝手の世渡をすることを止め、耶蘇の心を心とし、唯其思召の儘をのみこれ行ふ人間とならねばならぬ。

「凡そ基督の靈なき者は基督に屬かざる者なり」とは、この事である。

耶蘇は基督、活ける神様の御獨子である。私共に取つて預言者と、祭司と、王と、三

つの大切なる務を御一人で行ひ給ふ御方である。此ういふ有難い救主を世に賜はりたる、神様の御恵は忝けないことの至りではないか。

第三、耶蘇はペテロの御返事を聞て滿足に思召され、「これ全く人間の智慧分別にて考へ出したことではなく、天の父なる神様が示し給ふたのである」と仰せられた。耶蘇が神様の御獨子である、救主でお在なさるといふ信仰は、聖書の御教訓に由り、學問上の道理に由り、種々説明しのし様もあることながら、最後に大切なるは直接に我が心の奥に、天の父なる神様の御啓示を戴くことである。私共が罪から救はれ、心を潔められて、活ける神様の靈を胸に宿す様になれば、耶蘇が神様の御獨子であり、又救主でお在なさる事實は、最早確實にして寸分も疑ふことが出來ない實驗上の信念となつて參る。「この故に我汝等に示さん、神の靈に感じて語る者は耶蘇を詛ふべき者と謂ふものなし。又人聖靈に感ぜざれば耶蘇を主と謂ふ能はず」とあるのは、此意である。

第四、耶蘇はペテロが其巖といふ意味の名前の如く確實强固なる神様の僕として、耶蘇を神様の御獨子、又救主と信ずる大磐石の信念の上に、基督の教會を打建つ可きこ

とを命じ給ふた。風に吹散らさるゝ籾殻の如き基督の信者、砂の繩に似て纏りのない基督教の團體が、幾ら出來たからといふて役に立つ者ではない。私共は堅固なること巖の如き頼み甲斐ある神様の軍人とならねばならぬ。又神様の御獨子耶蘇の救を土臺とする、堅實強固なる其軍隊を打建んに力を盡さねばならぬ。「そは据ゑ給ひし基礎の外に誰も基礎を据うること能はざれば也。この基礎は即ち耶蘇基督なり。」

第五、耶蘇はペテロの此告白を聞て後、御自分が程なくエルサレムにて長老、祭司の長、學者等より迫害を蒙り、殺されて三日目に復活るべきことを示し始め給ふた。これはお弟子達の諒解に苦む御物語であつた。神様の御獨子が人手にかゝつて殺され給ふとか、そんなことがあつて堪るものではないと。そこでペテロは例に由り、眞先に進み出て諫め様とすると、耶蘇は之を叱つて、「惡魔よ我が後に退け云々」と仰せられた。世界人類の救は十字架なしに遂げらるべきものではないのである。神様の御獨子耶蘇の貴き贖罪の血に由てのみ、罪に死たる世の人は新しき命を授けらるべき道が開けたのである。今日の私共も亦榮の冕は唯十字架を經て後に受くべきものである道理を悟り、耶蘇の榮に與からん爲に先づ其苦みに與かる覺悟を定めて、世の救の爲に戰ふ様でなくてはならぬ。

第二十一章　不義者

參考（約翰傳八章一節至十一節）

「汝等の中罪なき者先づ彼を石にて擊つ可し。」（約八〇七）

ユダヤの三大國祭の一つなる構廬節の時に、耶蘇は隱かにエルサレムに上り、節筵の半頃から終へかけ、神殿にて人民を敎へ給ふた。中には感心して之を聽き、歸依の心を起す者もあつたが、一方では又其眞直なる御敎と、神々しき御人格とを煙たがり、これに反對迫害を試むる者も段々に殖えて來た。

或朝早く耶蘇は神殿に行き、坐つて人民を敎へてお在になると、そこへ頑固一遍のパリサイ宗徒だの、又は曲學阿世の學者だのといふ連中が、不義をした一人の女を引立て訴へに來た。元來モーセの律法に由れば、姦淫罪を犯した者は男女共に之を殺し

てしまふ規定であれど。此頃ユダヤは羅馬の屬國となつて居た故、其大守の許なしには勝手に人を殺すことが出來なかつた。そこで平生耶蘇を敵視する學者とパリサイ宗の信者とは、此不義した女を種に耶蘇を陷れ樣と試みたのである。即ち耶蘇が若し其女を殺せと言はれたならば、これは大守の權威を無視するものとして表沙汰にしやう。若し又殺すに及ばずと言はれたならば、これはモーセの律法を破棄するものとして人民を煽動し、之に危害を加へしむるに屈强の材料であると。彼等は此ういふ奸計をめぐらしつゝ、女を引立て耶蘇に訴へに來たのである。

學者とパリサイ宗の連中は、「師よ此女は姦淫をして居る時、現場で執へられた者であります。モーセの律法には此の如き者を石にて擊殺せと命じてありますが、あなたは何んと言はれますか」と、問ふたけれ共耶蘇は相手になさらず、默つて地に物を書て居給ふた。頻りに之を問ふに及んで、耶蘇は其お顏を擡げ、「汝等の中罪なき者先づ此女を石にて擊つ可し」と宣ひ。復び身を屈めて地に物を書てお在になると。訴へに來た者共は其良心に責められ、年寄から始めて壯年迄一人一人いつの間にか其場を去り行き、後には唯耶蘇と其婦人とのみを殘した。耶蘇は其女に「汝を訴へに來た者共は何處へ往つたか、汝の罪を定める者はないか」とお尋ねになると。女は「主よ誰もございません」といふ。そこで耶蘇は「我も汝の罪を定めぬ故、往きて再び罪を犯すこと勿れ」と、諭したる後之をお返しになつたのである。

此物語に就て注意すべきことは、第一、學者とパリサイ宗の人達が、自分の罪を棚に上げて他人を責むることのみ嚴重であつた樣に。人は何時も兎角己が目にある梁木を忘れて、他人の目にある塵埃の詮議立をしたがるものだといふ事である。或印度人の說教者が言ふには、「諸君は何時でも自分の事を棚に上げて、他人の身の上のみ詮議して居られる。即ち何か惡い事をとがめられると、彼は甲に適切なる訓戒であるとうなづき。何か善い事を勸められると、此は乙の身に當嵌る勸告であると合點する。斯くて何を聞ても他人の事とばかり受取て、絕て我が身に引當て考がへることをしない故、諸君は餘り深切過ぎて到底天國に入る資格がないのである」といふことであつた。深切過ぎて天國に入れないといふのは變な說き方の樣であれど、其言ふ所に亦大きな

道理のあることは疑がない。「僞善者よ先づ己の目より梁木をとれ、さらば他人の目より塵をとり得る樣明かに見ゆべし。」

第二、殊に男女間の問題に就ては、男子が兎角其罪惡の責任を婦人にのみ負せ、自分共は何喰ぬ顏で過さうとする惡風がある。モーセの律法に由れば姦淫罪を犯した者は男女共に之を殺せとあるのに、學者とパリサイ宗の人達は、何故相手の男子を取遁して唯婦人のみを引立て來たであらうか。併しながらこれは唯昔の學者とパリサイ宗の人達ばかりでなく、今日も尙始終私共の周圍に見受ける所の事實である。即ち男子は其穢らはしき獸慾を擅まゝにせん爲め、婦人を欺き、婦人を陷れ、之を辱めて其終生を誤らせて置きながら。世間に對しては一切の罪責を悉く婦人に歸し、自分共は一向無責任に、それでも立派な男子、體面ある紳士の樣な顏して世を渡らうとする如き輩が甚だ多い。果は法律の文面に迄も全く男女を區別し、婦人に嚴にして男子に寬に、婦人には男子に優りたる德操を要求し、男子は却つて公けに不品行不行狀を行ふ餘地を保存する如き、不公平にして卑怯未練な眞似をして居るのである。どういふ淺ましいことであるか。耶蘇は鐵面皮にして耻を知らざる學者とパリサイ宗の人達を目の前に控へ、面をあげ兼ねて身を屈めた儘、地に物を書て居給ふたといふことであるが。同じ耶蘇は又今時の自分勝手な眞似をのみ行ひ、弱き女性を侮辱しながら、巧みに自ら免れて居る卑屈男子に對して、何ういふ風にお感じになるであらうか。

第三、併しながら人には皆神樣から授けられた良心といふものがある。耶蘇が「汝等の中罪なき者先づ此女を石にて擊つ可し」と仰せられた時、之を訴へに來た人々は皆自ら省みた。自分は果して罪を犯した覺のなき者として、此女に石を投げることが出來るであらうかと。然るに良心は人をして臆病ならしめるものである。人は自分で自分の姿を本心の鏡に映して見る時、其醜しい罪惡に心付ぬものはない故、彼等は心苦しく感じ始めた。果は多年罪の生活を續けて居る年寄から始めて、壯年に至る迄、一人又一人、いつの間にか其場を外して去り行き、後には唯耶蘇と其婦人とだけを殘したといふことである。此の如く人は自ら省みることが必要である。省みれば則ち善心が生ずるものである。私共は平生良心に責なき世渡をする樣になつて、始めて神樣の

前に一人前の人間となることが出來るのである。大將ウイリアム、ブースの言に、「私は毎日三度宛自らを省みる。即ち朝には今朝何の善事をなしたりやと問ひ、日中には今日何の善事をなしたりやと問ひ、夜分には又今夜何の善事をなしたりやと問ふのである」と、いふてある。これは私共に取て最も好き模範であると謂はねばならぬ。

第四、それと同時に、私共は耶蘇が罪を犯せる婦人を憐み給ふた事實に注意せねばならぬ。大方此婦人は先頃の搆盧節のお祭の最中、飲んで食つて樂んで居る間に、良らぬ男子に道ならぬことを言寄られ、これを拒絶し切るだけの強い意志と又信念とを缺ぎ、つひ情實にからまれて飛んだ汚行に陷つたものかと察せられる。其罪に陷つた事情は兎もあれ、罪はどこ迄も罪である。併し之を人中に曳きまはして辱めたからといふて、それが婦人を懲らしめる力はなくて、却つて之を自暴自棄に至らしめる恐があるばかりである。それ故に耶蘇は其婦人を憐み給ふた。其良らぬ男子の獸慾の犧牲となり、又其玩弄物となつた果敢なき運命を憐み、之を懲らしめるよりは寧ろ之を改心させ度と思召たのである。「我も汝の罪を定めぬ故往て再び罪を犯すこと勿れ」と、此同情ある御言葉は慥かに罪に穢れた一人の婦人を救ふて、以來清き女性とならしめたに相違あるまひと思ふ。亦忝けないことではないか。

第二十二章　善きサマリア人

參考（路加傳十章二十五節至三十七節）

「己の如く隣を愛すべし。」（路十〇二七）

搆盧節の後、耶蘇は曩にヨハネがバプテスマを施して居つたペレヤ地方に退き、三ヶ月ばかり傳道に從事し給ふた。其間に七十人の弟子を其邊に派遣して福音を傳へさせ給ふた樣な事實もある。それから鳥渡修殿節にエルサレムに上り。復ペレヤに歸り、最後の上京迄そこに留まられたものと見える。

此頃一人の敎法師が耶蘇を試みん爲に訪ねて來て、「師よ我何を爲さば永生を受くべき乎」と問ふた。耶蘇は「律法には何んと書てあるか」と問返し給ふと。答へて「汝心を盡し、精神を盡し、力を盡し、意を盡して主なる汝の神を愛すべし。亦己の如く

隣を愛すべしとありまする」といふ。耶蘇が仰せらるゝには「如何にも然うである。其如く神を愛し、人を愛することは、宗教の大主義大精神である故、これを實踐躬行すれば、それで永生は得られるのである」とのことであつた。そこで教法師は「併しながら此己の如く隣を愛するといふ、隣とは一體誰のことでありまするか」と問ふと。耶蘇は即ち一つの譬喩談を以て之を説き明し給ふことゝなつた。其大體の筋は此うである。

或ユダヤ人がエルサレムからエリコに至る山路を通行して居る時追剝に出あふた。追剝は其衣服を剝取て之を打擲き、半殺にして立去つた。そこへ或祭司が來かゝつたが見て見ぬ振に通り過した。次にレビ人といふて平生宗教上の世話燒をする人が來かゝつたが、これも知ぬ顔で通り過した。其後へユダヤ人からは狗の樣に輕蔑せられて居るサマリア人が來かゝつた。而して其半死半生の被害者を見ると大層氣の毒に思ひ、近よりて油と酒とを其傷に注し、これを包み、己が驢馬に乘せ、旅邸に連れ行きて之を介抱した。斯くて次の日出で行く時には其怪我人の爲に三四日間の宿錢を拂ひ。それでも

足りなかつたならば今度來た時に拂ふからと、言ひ置て其處を立去つたと。耶蘇は此譬喩を語りたる後教法師に對ひ「汝は此三人の中、誰が追剝に遇ふた者に取つて、隣を愛するの實を顯はした人と思ふか」と仰せられると。教法師は答へて「それは其被害者に憐れをかけた者でありませう」といふ。耶蘇が仰せられるには「汝も往きて其如く實行せよ」と。これが有名なる善きサマリア人の喩といふのゝ大略である。

第一、それに就て學ぶべきことは、耶蘇の宗教が神樣と人とを愛する愛の宗教だといふことである。耶蘇は後に他の教法師から「師よ、律法の中何れの誡か大なる」と問はれ。答へて「汝心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる汝の神を愛すべしといふ、これが第一にして大なる誡である。第二に之と同じく大なる誡は、己の如く汝の隣を愛すべしといふのである。昔から律法や預言者の教へたことは悉く皆此二つの大なる誡の中に含まれて居る」と仰せられたことがある。此の如く全心全力を盡して神樣を愛し、又己の如く隣人を愛するといふのが、基督の宗教の大精神である。私共は「神は愛なり」といふ其神樣の靈を胸に宿すことに由て、銘々愛の人となり、

朝から晩迄、寢ても醒めても、唯神様と人とを愛する愛の生活を營むものとならねばならぬ。此の如きものが所謂罪から潔められたる生涯である。即ち己の私に死んで基督と偕に生る所の生涯である。

第二、こゝに「己の如く汝の隣を愛すべし」とある。「己の如く」といふのは、自分を先方の立場に置て之を思ひやることである。即ち親は子の身になり、子は親の身になり、夫は妻の身になり、妻は夫の身になり、商人はお客の身になり、お客は商人の身になり、資本家は勞働者の身になり、勞働者は資本家の身になつて、之を思ひやることをいふのである。「隣を愛する」とは、俗に向ふ三軒兩隣などいふ僅か數軒の狹い隣を愛するといふのでなく、却つてずつと廣く、苟くも縁あつて出くはす程の人々は、皆隣人として之を愛せよといふ意味である。世には天下國家などゝ大きなことを言ひながら、其妻子をさへ愛することの出來ぬ人がある。私共の愛は此の如く唯大袈裟で、架空なものであつてはならぬ。基督が私共に要め給ふ愛は、大いけれ共亦至つて手近いものである。即ち昔から「袖ふり合ふも多少の縁」といふ如く、私共は縁あつて出くはす程の人々を隣として愛することに由り、極めて實際的に、しかも非常に大なる愛を實行することが出來る。私共は縁あつて同じ工場に勤め、縁あつて同じ役所に出勤し、又は同じ電車に乘合せ、同じ集會に出席する程の人々を、殘らず皆我が隣人として愛し、其爲に親切を盡さねばならぬ。取分け何か不幸難儀に遭ふて居る人々の爲には、特別の盡力をせねばならぬ。「落ぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ。」隨つて私共の隣人を愛する愛は、殊に世の頼邊なき人々に出あふた時に現るゝ樣でなくてはならぬ。

第三、善きサマリア人の喩を讀んで見るに、祭司とレビの人とは平生宗教を口にする身でありながら、半死半生の怪我人を其儘見過しにした。所謂「坊主の不信心」とは此事である。私共の宗教は此んな風に實行と伴はぬものであつてはならぬ。之に反して彼のサマリア人は、平生ユダヤ人から輕蔑せらるゝ身分でありながら、却つてまさかの時に本統の愛を實行したのである。即ち

(一)善きサマリア人は怪我人を見て之を憫んだ。祭司とレビの人とは半死半生の怪我

人を見ても何んとも思はなかつたが、善きサマリヤ人は之を憐れと覺えたのである。

私共は人の難儀苦勞に同情する柔和い心がなくてはならぬ。又罪に亡ぶる世の人を氣の毒に思ひ、其靈魂を憂ふる熱情を有ちたいものである。

(二)善きサマリア人は又怪我人に近いた。世には金持や貴顯紳士のお近づきになることを望む者は多くあれ共、貧乏人、片輪者、病人、其他凡ての不幸なる同胞に近づくことを好む者は少ない。私共は世の惱める人民に近づき、其中に入つて之を慰めいたはらねばならぬ。救主耶蘇は天の位を棄て人となり、然も僕の貌をとつて、世の罪人を救はん爲に身を捐て給ふたではないか。

(三)善きサマリア人は種々怪我人の手當をした。果は自分の馬に怪我人を乘せ、自分には徒歩して之を宿屋に連れ込んだのである。私共の愛は又此の如く實行的のものでなくてはならぬ。私共は唯言語を以て人を愛するのでなく、事實と熱誠とを以て之を愛することが大切である。

(四)善きサマリア人は又、金錢を惜まず被害者の救助に盡力した。その如く私共は亦金錢を用ゐて人に善を行ふことを心がけねばならぬ。金の使用法は多くあれども、之を用ゐて人の靈魂を罪より救ひ、又其肉體を諸種の禍より濟ふに優る使用法といふはない。私共はもつと〳〵無益に費す金を儉約して、之を傳道及び慈善の爲に献げることを學ばねばならぬ。

第二十三章　貞潔

參考（馬可傳十章一節至十二節）

「凡そ婦を見て色情を起す者は心の中既に姦淫したる也。」（太五〇二八）

パリサイ宗の信者が耶蘇の許に來り、離婚問題に就てお尋ねをした。而して言ふには「昔モーセは去狀さへ書て渡せば、妻を離緣しても可い樣に敎へて居りますが、それで宜しうございませうか」とのことである。耶蘇は答へて「決して然ういふわけのものでない。モーセは唯汝等の心のつれなきことを見て、仕方なしに然う命ふて置た迄のものである。抑々神樣は天地開闢の始め、一人の男と一人の女とを造り、これを夫

婦にして人間の始祖とならせ給ふた。一人の夫に一人の妻が連れ添ふことは、世の始から定められたる神様の聖旨である。それ故人は其父母を離れ、其妻に合ひ、二人が一體となるべきものである。二人別々のものではなくて、一體となるのである。神様の耦せ給へる者は人が之を離すべきではない」と、仰せられた。

室に入り給ふて後、お弟子等が引續き同じ問題に就てお尋ねをすると。耶蘇は更に言を添へ、「凡そ妻を去つて他の婦人を娶る者は其妻に對して姦淫を行ふ者である。又妻が其夫に別れて他に嫁入するのは、これも同じく姦淫を行ふものである」と、お敎へになつた。

これは耶蘇がどんなに、男女間の貞潔といふことを大事と見做し給ふたか、又一夫一婦の大倫を重んじて居給ふたかといふことを示す御物語である。

第一、耶蘇は天地開闢の始めに、神様が一人の男と一人の女とを造り、之を人間の始祖となし給ふたとお說きになつた。併し乍らこれは唯天地開闢の大古だけでなく、今日も全く同じ御計ひである。神様は世界中どこの國に行つて見ても、男と女との數を略同じ位に生れさせ、一夫一婦の關係が其思召であることを事實の上にお示になつて居る。學者の說に由るに、大概どこの國でも、生れて來る兒供は男の方が多いけれ共、追々育つて一人前になる頃には男女略同數に近づき、やがて年をとつて後には女の數が男よりも多くなるものだといふことである。乃ち一人前の男と女とは格別に其數が相近いといふのは、是れ神様が一夫一婦を以て男女間の正當なる關係と見做して居給ふ思召が、實際上の事實に現はれて居るものと觀ねばならぬ。

これを人情の上から考へて見ても、一夫一婦といふ規定は最もよく人の心に滿足を與へるものである。昔妻と妾とを同じ家に住ませて置た人があり。或夜兩人が睦じさうに向き合ふて双六を弄そぶうち、つひ其儘假睡をしたのを見ると、其髮の毛が蛇となつて互に入り亂れて嚙合ふて居つたといふ話がある。無論信用し難い傳說に過ぎないけれ共、人情は正しく此の如きものである。夫は其全幅の愛情を一人の妻に注いでのみ、始めて其夫たる滿足を覺ゆることが出來、又妻は其有らん限りの誠を一人の夫に献げてのみ、始めて其妻たるの幸福を樂むことが出來る筈のものである。

これを家庭の上から觀ても、清き男女が相會ふて一夫一婦の關係を取結ぶ處にのみ、眞の家庭の情愛、又祝福といふものは宿るのである。昔アブラハムは信仰の父と呼ばるゝ聖徒であつたが、嗣子が欲いばかりに妾を容れた爲め、家庭の平和を破つてしまふたことがある。又其孫のヤコブは中々智慧のある人物ではあつたが、つひ一夫多妻の家庭を作つた爲め、親子兄弟の間に引續き何んとも言へぬ煩累を惹起したのであつた。或時波斯の國王が英國に御滯在中、時の有名なる政治家グラッドストンの金婚式に出あひ、嘆息して言はるゝ樣。「グラッドストン氏は五十年の間一人の妻を守り、朕は一生の間に五十人の妻を持つた。併し乍ら眞正の幸福はグラッドストン氏の方にあつて、朕の方にはないのである」と。それ故私共は唯一夫一婦の主義に由てのみ、能く健全にして幸福なる家庭を作り、亦能く健全にして幸福なる社會を組織することが出來る道理を、明かに認めねばならぬ。

神樣を中に置て、清き男女が取結ぶ一夫一婦の緣は神聖なるものである。私共は我が日本の同胞が、もつと〳〵此大切なる男女の關係、又結婚問題に就て、耶蘇基督に學ぶ

所があつて欲いと、熱望して止む能はざるものである。

第二、此一夫一婦の主義は、夫婦ならざる男女の同棲することに反對する。所謂穴隙を鑽て相窺ひ、墻を踰て相從ふ野合の許す可らざるは勿論、今時盛んに世に行はれて居る內緣の夫婦などいふ如きものは、決して眞面目なる人間の與すべき事ではないのである。

第三、一夫一婦の主義は又離婚に反對するものである。合せ物は離れ物とやらいふ、諺の如く、今時の男女が後先も考へずして一緒になり、復左程の事由もなく別話をする如きことは、是れ結婚の神聖を穢すものである。犬畜生の道ではあるかも知らねど、決して眞人間の行ではないのである。聞けば日本は世界に於て第一番に離婚の多い國であるとか。私共は我が同胞の間に、尙も〳〵男女の大倫に關する神樣の御旨を敎へる必要を感ずるものである。

第四、一夫一婦の主義は又言ふ迄もなく賣淫の制度に反對するものである。或は妾といひ、或は藝妓といひ、或は娼妓といひ、或は酌婦といふ。名は異れども其實は皆同

じ淫賣婦である。殊に我が日本の國には借金の質に婦人をとり、否でも應でも之に淫をひさがしむる制度があり、官の公許の下に斯かる婦人を動物園の猿や熊と同樣、格子窓の中に列べ、人目に晒らして其劣惡なる肉情を挑發し、無垢の青年に不品行不身持の實物教育を施し。又告る所なき女性をして親不孝者、懶惰者、犯罪人等の玩弄物となり、身も世もあられぬ思をしながら、泣く泣く一日一日を過し、それが厭なら情死の名の下に、好加減な相棒を見付て自殺でもしろといふ風に仕向けてある。眞に何んとも言ひ樣のない墮落し切つた世の有樣である。果は日本の內地だけでは滿足が出來ず、世界各國に迄も盛んに不潔不義の犧牲となるべき我が同胞婦人を輸出し、其數は實に數萬人の多きに達して居るといふことである。どういふ恥づべく、悲しむべき事實であるか。それに就けても私共は、自分等が銘々先づ耶蘇を信ずることに由りて淸き品行を維持する人物となり、進んでは同じ時代の我が同胞を、聊さかなりとも今よりは純潔高尙なる人民となさん爲に、力を盡す樣でなくてはならぬ。

德富一敬翁は八十歲を越て後、儒敎から轉じて基督敎に入つた人であるが、其言に「敵

を愛する事と一夫一婦の敎とは、孔子の敎になき所である」といふてある。如何にも此一夫一婦の大倫は、救主耶蘇に由て始めて明かに世に說示された御敎である。私は又或有力なる一婦人が、其初基督敎では女子の操といふこと丶共に、男子の操といふことを敎へると聞き、唯それ丈で感激して、直に基督信者になる決心をせられたといふ話を聞たことがある。私共は殊に今の日本に、耶蘇が敎へ給ふたる貞潔の道と、亦其道を行ふ力とを紹介す可き必要を見るものである。

第二十四章　兒童

參考（馬可傳十章十三節至十六節）

「孩提を我に來らせよ、彼等を禁むる勿れ。」（可十〇十四）

グラッドストン氏は或時「英國にある各種の問題を悉く合せたよりも大切なるは、基督敎會の英國少年に對する關係如何といふ問題である」と、言はれたことがある。彼がどんなに少年に宗敎の大切なることを感じて居られたか、想像せらる丶ことである。耶

蘇は少年を重んじ給ふた。或時兒童を其許に連れて來て、頭に手を按き、祈禱をして下さることを願ひ出るものがあると、お弟子等は之を遮り止めた。すると耶蘇は却つて其お弟子等を叱り「孩提を我に來らせよ、彼等を禁むる勿れ、神の國に居る者は斯の如き者なり。誠に我汝等に告ん、凡そ孩提の如くに神の國を承けざる者は之に入ることを得ざる也」といひ。やがて兒童を抱き上げて手を其上に按き、これを祝福してお返しになつた。傳說に由れば、斯く耶蘇から祝福せられた兒童の一人が後にイグナシアスといふ豪い宗敎家となり、「劍に近づく者は神に近づくもの、又猛獸の中に在る者は神と偕に在る者也」と言ふて、羅馬にて勇ましき殉敎者の最後を遂げたといふことである。

耶蘇は「孩提は我に來らせよ」と仰せられた。人が年をとつて種々なる罪惡を重ね、多くの良らぬ習慣に染んで後、之を救に導くのは容易な事でない上に。假令成功した處で、それ迄幾年かの歲月は全く無益に費へてしまふたわけである。併し乍ら兒童を尙無垢な間に、早く耶蘇に導くことが出來たならば、之を將來多くの罪から救ふのみならず、亦反對に之に多くの善事を行はしめることが出來る。乃ち或人の言に、「年老たる罪人が救はれた時には、唯一箇の靈魂が救はれたのであれど。兒童が救はれた時には、一箇の靈魂と共に亦一人の生涯が救はれたのである」と、いふてあるのは、深い道理のあることゝ思ふ。

それのみならず、幼い時から早く宗敎に入つた者は、中年以後に發心した人々よりは、どうしても其信仰の根據が深く、又其人物が賴りになるものである。乃ち有名なる宗敎家スポルジョンの言に「私の敎會には二千七百人の會員があつて、折々敎會から除名せねばならぬ樣な信者を出したこともあれど。幼い時から信仰に入つた者の中には、未だ一人も然ういふ人間を出したことがない」と、いふてあるのは、大きに參考すべき言である。

第一、それに就ても大切なるは、私共が兒童を神樣からの預り物として大事に育てることである。我が子ながらも神樣から委托せられたものとして之を神樣に献げ、神樣に對する責任を感じつゝ之を養ふことは、親が其子を育てる上に何より肝要なる心得

である。昔ハミルガルといふ人はまだ漸く九歳の我が子ハンニバルを携へて山上に祈り、其終生羅馬を敵として戰ふべきことを約束させたが。ハンニバルは成人の後果して偉い豪傑となり、カルゼージの軍隊を引具して羅馬に攻入り、之を馬の蹄に蹂躙したといふことがある。又我が朝の楠正成は僅か十一歳の一子正行に遺言し、其飽迄も足利尊氏を敵として戰ふべきことを誓はせた處が、正行は父の志を忘れず、後終に「かへらじと兼て思へば梓弓、なき數に入る名をぞとゞむる」といふ歌を、如意輪堂の扉に刻み置き、往て四條畷に潔き討死を遂げる迄戰ふたといふことである。其如く私共は又兒童を神様と人との爲に献げねばならぬ。幼き兒童を神様からの預り物と見做し、これを唯其御國の爲に育て上げることが、何より大切なる覺悟である。第二、隨つて兒育に肝要なるは、彼等に宗教を教へることである。其家庭、又日曜學校等に於て、早く兒童に宗教上の教育を授けねばならぬ。何も込み入つた教理や神學の講釈を聞かせろと言ふのではない。唯神様と人との爲に私なき生涯を營む様、其精神をさへ吹込めば可いのである。中には兒童が大きくなつて自分で信仰心を起す迄、宗教のことを教へぬでも可いといふ人があれど、それは大きな心得違である。彼此して居る間に兒童は良くないことを澤山に覺え、間違つた思想を多く蓄へて、始末にをへぬ様になる恐がある。或人が故ブース夫人に對ひ、其家庭教育に成功せられた秘訣を尋ねると。答へて、「それは唯惡魔の先を越したことである。兒童が惡いことを覺えぬ以前に早く神様の御旨を教へ込むより外に、善良なる家庭教育の秘訣といふはありませぬ」と、言はれたさうである。私共は我が子を家庭で教へるのは勿論、若し出來ることならば日曜學校の一組も受持ち、他人の子迄も耶蘇に導き度ものである。第三、兒童を耶蘇の救に導け。啻に宗教の道理を教へるのみならず、之をして明かに神様に從ふ決心をなさしめ、上よりの御助と御力とを其心と身とに經驗せしむる様に導かねばならぬ。昔から大に神様に用ゐられたる信仰上の豪傑の中には、十四五歳から二十歳位迄の間に、早く救の惠を實驗したる者が多い。或はもつと早く七八歳から十二三歳の間に、志を立て耶蘇に從ひたる者さへ少くない様な次第である。今から百三四十年前に、英國のグロチエスターといふピンの製造を以て名高い市に、

ロバート、レークスといふ新聞記者があり。或日一工場の傍を通り、數百人の少年職工が囂々と大騒をするのを見て、近所の人々に「此兒童等は日曜日には何をして居ますか」と尋ねると。「日曜日には餘計に喧嘩をして騒ぎます。兒童等だけではなく、此兒童等の親達も、無學文盲なものばかりで、日曜日に教會に行く者など一人もありませぬ」と、いふ返事であるから。レークスは大層心を痛め。乃ち一教師を雇ひ、毎日曜日に其兒童等を集め、無報酬で之に普通學と教理問答とを教へたが、それが軈て今の日曜學校の起原となつたのである。其間に日曜學校の事業は年一年と進歩して來た。勿論今日ではレークスの普通教育を授けた趣意とは違ゐ、專ら秩序立て宗教々育を授ける方法として發達して來たのである。紐育の判事フォーセットといふ人の言に。「去五年半の間、私が扱ふた刑事被告人の數は二千七百人にて、其約四割二分は十六歳乃至二十歳の青年であつたが。私は彼等に其日曜學校に出て居つたか、否やを問ひ試むるに、一人も然りと答ふる者はなく。曾て日曜學校に出た者も、今は遠かつて其感化を離れて居る者ばかりである事を發見した。私は日曜學校の効果を深く信ずる故、不良少年に刑の執行猶豫を與へる樣な場合には、以來必ず日曜學校に出席すべきことを條件として、之を放免する樣に心がけて居る」といふてある。亦以て日曜學校の少年青年に及ぼす感化の大なることを知るべき事實であると思ふ。

私共は「孩提を我に來らせよ」と宣ふ耶蘇の御聲に聽き從ひ、もつと〳〵少年、青年を救の惠に入らしめ、又他人の救の爲に起つ者とならしめる爲め、先づ彼等を耶蘇の御許に連れ來ることを努めねばならぬ。

第二十五章　凡ての人の僕

參考（馬可傳十章三十五節至四十五節）

「汝等の中首たらんと欲ふ者は凡ての人の僕とならん。」（可十〇四四）

昔羅馬の豪傑ポンペイは自分以上の人物を忍ぶこと能はず、シーザーは又自分と同等の人物をさへ容赦することが出來ない爲め、互に權勢を爭ひ合ふたといふことである。此の如く人の胸の中には功名心又は大望といふものがあり、これを善く導けば善い方

の役に立てど、間違つた方角に嚮へば飛んでもない禍を惹起す様な例が至つて多い。

或時ゼベダイの子なるヤコブとヨハネといふ二人のお弟子が、其母と一緒に耶蘇の御前に罷出で、「少しお願事がありまするが」といふ故。「何事か」とお尋ねになると。「あなたが他日志を得給ふ時、何卒私共二人の中一人はあなたの右、一人は又左に座ることをお許し下さる様、願ひ度ございまする」といふ。耶蘇は答へて「汝等は何を願ふべきかを辨へないのである。一體汝等は我が程なく身に受けんとする世の救の爲の苦難を、一緒に忍ぶことが出來ると思ふのか」とお尋ねになると。「無論難儀苦勞位は幾らでも辛抱致しまする」といふ。「成程難儀苦勞を辛抱することは出來るかも知らねど、我が右左に座ることは許すべき限りでない」とお答へになつた。此問答を漏れ聞たる他の十人のお弟子は、ヤコブとヨハネとが自分等を出抜かふとしたことを憤つて居ると。耶蘇は彼等を諭して宣ふ様「國々の領主は其人民を支配し、又大なる者共は人民の上に權柄をとる。これは汝等が知る通りである。さり乍ら汝等の中にては斯くある可らず。汝等の中大ならんと欲ふ者は、汝等に役はるゝ者となり。又汝等の中首とならんと欲ふ者は、凡ての人の僕となるであらう。蓋我が此世に來りしも人を役ふ爲に非ず、反つて人に役はれ、又多くの人に代り其命を與へて贖とならん爲であるぞよ」と、仰せられた。

私共は此興味ある物語に就て二三の大切なる教訓を學ばねばならぬ。

第一、大望を有つのは惡いことではないけれ共、大切なるは其動機を吟味する事である。耶蘇はヤコブとヨハネとに對ひ「汝等は何を願ふべきかを辨へないのである」と仰せられたが。如何にも其如く彼等は唯漫然と自分の立身出世を求め、己が功名手柄を願ふたのであるから、其動機が如何にも賤しかつた。彼等は唯己が私を求めたものに過ぎない。私共が若し大望を抱くならば、それは少しも餘計に神様の御爲め、人の爲めに働かして戴き度といふ、聖い大望でなくてはならぬ。昔ホイットフイルドは「神様よ、何卒私を非凡の基督信者とならせ給へ」と祈つて居つた。而して神様は彼を擧げ用ゐて、世にも稀なる救靈の豪傑とならせ給ふたのである。又ウイリアム、ケレーといふ人は靴屋の若衆でありながら、其壁の上に「神に大事を求めよ。」「神の

爲に大事を企てよ。」といふ二つの標語を掲げ、然ういふつもりで忠實を盡して居つたが、神様は其靴屋の若衆を用ゐて能く印度傳道の先達とならせ給ふた。大望を有つならば神様の御榮を目當の大望を有ちたいものである。自分は何うならうと唯世の爲め人の爲めを願ふ人物を、神様は用ゐて不思議に大なる御業をなさせ給ふものである。

第二、耶蘇はヤコブとヨハネとに對ひ、「汝等は我が程なく身に受けんとする世の救の爲の苦難を、一緒に忍ぶことが出來ると思ふか」と、お尋ねになつた。耶蘇の榮に與かり度と望む者は、先づ其御苦みに與かることを覺悟せねばならぬ。昔ガリバルヂーは以太利の愛國者であつたが、其人民にむかひ、國の獨立を圖る必要を訴へて、「我に從へ」と叫んだ。「汝に從ふ者の報酬は何か」と尋ねる者があると。答へて「我に從ふ者の報酬は、飢餓と、缺乏と、負傷と、而して死ぬることである」と言ふたが。それにも關はらず、熱誠なる以太利人はガリバルヂーの愛國心に動かされ、起て之に從ふたといふことがある。今耶蘇は亦それと同じ様に私共にむかひ、「我に從はんと欲ふものは、己に克ちて日々其十字架を負ひて我に從へ」と、叫んでお在なさる。私共は亦ガリバルヂーに從ふた以太利人以上の熱誠と眞實とを以て、此世界人類を救ふ爲の、最も大切なる、而して又榮ある御軍に從ふ覺悟がなくてはならぬ。

第三、耶蘇はヤコブとヨハネとを憤る十人のお弟子等にむかひ、「汝等の中大ならんと欲ふ者は汝等に役はるゝ者となり、又汝等の中首たらんと欲ふ者は凡ての人の僕となるであらう」と仰せられた。「凡ての人の僕」とは、どういふ貴い語であるか。世間では一人でも餘計の人を我が爲に働かせるのを、此上もなき榮譽の事と心得て居るに。耶蘇は其反對に一人でも餘計の人に役はれるのを、最も貴き生活であると敎へ給ふたのである。昔の傳說に或時ペテロが耶蘇に對ひ、「主よ、私はせめて一晩でも神様になつて見度ございまする」といふと。耶蘇は、「それでは今夕一夜汝を神様にしてやるから、なつた積りで向ふに往け」と仰せられた。それからペテロは獨り他のお弟子等を離れて進むうち、忽ち大きな牧羊場に出た。見れば牧者が何れも身支度を調へて居る様子であるから、「どこかへ往くのか」と尋ねると。「左様です、今晩は向ふの町にお祭があつて出かける所であります」といふ。「それでも誰か留守番が居なくては、狼でも

來た時羊をどうするか」と尋ねると。「それはよく分つて居ますけれ共、皆なお祭に往き度ものばかりですから、今夕一夜の處は神樣任せでございまする」と、いふて置て皆な出て往つた。「はて神樣任せといふたな。して見れば今夕一夜神樣にして戴いて居る自分は、こゝで此羊の群の番をせねばならぬわけか知らぬ」と。ペテロは一晩だけ神樣にして戴いたお蔭で、徹夜眠ることも得せず、羊の番をしたといふことがある。これはつまらぬ假作談に過ない。がそれにも關らず其中に大な敎訓が籠つて居る樣にも思はれる。最も神々しい人物とは、他人が飲んで食つて浮れて居る間に、夜の目も合はさず、賴りなき羊の群の面倒を見る人の事をいふのである。私共は人を役はん爲にあらず人に役はれ、然も「凡ての人の僕」として、世の爲め人の爲めに御奉公することを心がけねばならぬ。

第四、耶蘇は自分自身、「人を役ふ爲にあらず人に役はれ、又多くの人に代り其命を與へて贖とならん爲に」世に來たのであると仰せられた。「人其友の爲に己の命を捐るは、これより大なる愛はなし。」耶蘇は神樣の御獨子でありながら人間の姿をとつて世に現はれ給ふたは未だしも、最後には十字架の上に血汐を流して迄も、萬民の救の大業を成遂げ給ふたのである。これは何ういふ大なる愛であるか。又貴き奉事の御生涯であるか。眞に生甲斐のある世渡をなし、幾分か世の爲め人の爲めに盡し度と望む者は、亦神樣の御獨子、世の救主なる耶蘇に從ひ、其靈を胸に宿し、其御人格にあやかり、其救の御軍に參加し奉つる外はないのである。

第二十六章　放蕩息子

參考（路加傳十五章十一節至三十二節）

「一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜あるべし。」（路十五〇十）

放蕩息子の喩は、私共罪の深い人間と聖き神樣との關係を放蕩息子と其親とに譬へたので、耶蘇の御譬喩談の中でも、取分け名高いものである故、今雜と其筋書を左に御紹介申上げたいと思ふ。

或人に子が二人あり。次男が毎日の樣に其父に對ひ、どうか財産を分けて下されと迫

る故、父も終には拒み兼て其意に任すと。次男は幾日も經ぬうちに貰ふた程の身代を取まとめて遠國に出かけ、放蕩三昧に浮身を窶した結果は、みる〳〵其所持の金を皆費ひ果した。折柄其地方に大變な饑饉があり、腕に一人前の働のある人でさへ食ふに不自由を覺ゆる場合。況して費ふことを知つて鏹一文儲けることを知らぬ放蕩息子が、空腹い目をする樣になつたのは當然の事である。無理に或人に泣付、漸とありついた仕事といふは豚の番人であつた。固より腹一はいの物を食べらるゝ程の職務ではなし、饑に迫つて豚の食料である靑臭い豆莢を嚙み、谷川の水を掬んで無理にのみ下さうとしたことも幾度かあつたが、誰も情けをかけて呉れる人とてはなかつた。こゝに至つて流石の放蕩息子も、始めて本氣で我が身の上を省みざるを得なかつたのである。郷里の父の許には食物に飽て居る傭人さへ幾人か居るに、私は其次男と生れながら、今日此ういふ淺ましい身の上になつたのは何うしたわけか。これ皆自分の罪の爲である。親不孝の報である。よし然らば今から父上の許に歸つて往き、面目次第もないことながら、我が重ね〳〵の罪のお詫を申上げ、若し許さるれば、せめて此後は傭人同然になりとも役ふて戴くのが、自分の爲べきことであらうと。斯く決心したものであるから、放蕩息子は直に豚の番人を辭し、乞食の樣な姿をしながら郷里へ旅立つことゝはなつた。日を經て後、息子は漸く其なつかしい父の家の近く迄來ると、まだ程遠い間に、其父は目ざとくも之を認め、急ぎ馳せ來つて其乞食同然の姿をした我が子に抱付たのである。息子は驚き涙の下からお詫の言葉を、未だ半分しか言はぬうちに、父は遮り。「もうよし〳〵お前が其氣にさへなつて呉れば、これ程有難いことはない。やれやれ行衛の知れなかつた我が子が歸り、死んだかと案じた悴が無事で戻つて來た。こんな嬉しいことが復とあらうか」と。連れ歸つて風呂に入れるやら、着物をとり換へさすやら、果は御馳走を調へてお祝の宴會を催す樣な大混雜。そこへ野良で働いて居つた長男が戻つて來て、大變に不平である。「何んだ、親から貰ふた身代を湯水の樣に費ひ果し、乞食同然の姿で歸つた親不孝者を、そんなに大騷ぎをして迎へる筈があるか。馬鹿々々しいにも程がある」と、立腹して内に入らぬ故、父は裏口迄出て來て之を宥め、漸くのことで說き付て之を家に連れ込んだといふ。これが放蕩息子の喩の大體の

筋である。

思ふに私共が此譬喩談の中に、是非共注意せねばならぬ箇條が三つ程ある。

第一、私共は先づ此譬喩談の中から、神様を餘所に罪の世渡をする人々は、即ち放蕩息子であるといふ道理を學ばねばならぬ。放蕩息子は親を離れて遠國に流浪した。其如く罪人は神様を離れて遠く浮世の衢に彷徨ふものである。放蕩息子は親から讓りの身代を蕩盡した。其如く罪人は神様から授かりたる智恵、力量、健康、財産、果は生命をさへも、無意味に濫費して居る者である。放蕩息子は困窮して居る最中、饑饉年に出あふた。其如く罪には禍が伴ふものである、罪人は不運の一生を送るものと定つて居る。放蕩息子は奴隷同然の境涯に落ち、豚の番人と迄成り下つた。其如く罪人は惡魔の奴隷となり、穢れた慾の僕として悲しい月日を過す者である。放蕩息子は豚の豆莢を食べて空腹さを忘れ樣とした。其如く罪人は心中の物足りなさを宥めん爲に、果敢なき肉の歡樂を求めつゝ味氣ない世渡をするものである。放蕩息子は誰も見返る者のない爲め殆んど餓て死ふとした。其如く罪人は永遠の滅亡を免れぬものである、「罪の

報は死である。」併し乍ら放蕩息子は一念發起して、面目ないけれ共強て其父の家に歸り、親不孝の罪のお詫を申出た。其如く罪人が現在の悲しい境涯より救ひ出さるべき唯一つの方法は、悔改めて天の父なる神様の御赦を祈ることである。罪人は眞に放蕩息子を其儘の世渡をして居るものである。

第二、次に學ぶべきは、神様が家出をした放蕩息子の親と同じ樣に、罪人の上を氣づかふて居給ふことである。放蕩息子の親は家出をした我が子の爲に心を痛めた。其如く神様は罪人が罪に彷徨ふ有樣を見るに見兼て、大御心を痛め給ふ。放蕩息子の親は不心得なる我が子の行衛を尋ね、手の届く限りは之を搜索して居つたことかと思はれる。其如く神様は罪人を尋ねて救はん爲に、御獨子耶蘇を世に遣はし給ふたのである。放蕩息子の親は其子が罪を悔て歸り來る時、遠方から其姿を認め、飛んで行つて抱付た。其如く神様は罪人の碎けたる心を喜び、待設けて居つて其重ね〴〵の惡を赦し給ふ。放蕩息子の親は其子の汚ない着物を脱せ、風呂に入れて後に新しい着物を着せた。其如く神様は罪人の心の穢れを洗ひ、之に「耶蘇基督を衣せ給ふ」のである。放蕩息子

の親は昨日迄の親不孝者を、今日は愛しい子として保護を加へる事となつた。其如く神様は又昨日迄の大罪人を、今日は其子供の一人として大切に勞はりはぐゝみ給ふ。神様は眞に放蕩息子の親にも愈る愛情を以て、世の罪人を憐み給ふ御方である。

第三、然らば不平言ふて家に入らなかつた放蕩息子の兄とは誰の事かといふに、これは自分一人神様の御惠を私して、他人の救を氣にかけぬ身勝手な基督信者の事である。放蕩息子の兄は平生自分が不身持をしない位を大層手柄の樣に考へ、己が冷酷無慈悲なる性情に氣が付か無つた。其如く身勝手なる基督信者は自分が酒を飲ず道樂をしない位を立派な世渡と心得、進んで他人に善を行ふ心のない者である。放蕩息子の兄は我が弟の零落をも亦我が父の心配をも同情することが出來なかつた。其如く身勝手なる基督信者は同胞の罪に亡ぶるをも、亦天の父樣が其御獨子を賜ふ程の御愛心をも、諒解し能はぬ者である。放蕩息子の兄は父が弟を歡迎するのに對して不平を言ふた。其如く身勝手なる基督信者は世の救に對して何等の興味を有せず、却つて傳道慈善等の事業運動に對して、要らざるお世話の樣に愚痴不平をこぼす者である。

私共は放蕩息子の兄の如き不人情冷酷なる基督信者となつてはならぬ。却つて放蕩息子の父の心を心とし、往て多數の放蕩息子同然なる罪人を父の家に歸らす爲に盡力せねばならぬ。

第二十七章　上　京

參考（路加傳十九章二十八節至四十節）

「此輩若し默りなば石叫ぶべし。」（路十九〇四十）

耶蘇が最後に御上京になつたのは、逾越節の前の日曜日のことであつた。其前夜はベタニヤ村にお泊りになつたので、朝お弟子達を連れ、橄欖山上のベッバケ村迄お出になつた時、二人の弟子に仰せらるゝ樣、「向ふの村に入れば、そこに誰も乘つたことのない驢馬の子が居る筈であるから牽て來よ。若し咎むる人があつたならば、主の用なりと言へば屹度渡すであらうから」と、いふお言葉であつた。二人のお弟子は其お言葉の通りにして驢馬の子を連れ來り、其衣を上に置て耶蘇をお乘せ申した。耶蘇が進

んでエルサレムに近づき給ふ時、人々は其衣を地に布て耶蘇に其上を過させ、又樓櫚の葉をふりかざして、「ホザナよ、ホザナよ、主の名に由て來る王は幸なり」と大聲に讃美した。ホザナといふのは神樣を讃める語である。そこへパリサイ宗の信者が出て來て、「餘り騒々しいではありませぬか。弟子達を責めて、些と靜かにさせて戴きたい」と言ふと。耶蘇は答へて「靜かにさせろとか、此輩が若し默つたならば石が叫ぶであらう」と仰せられた。

此御物語に就て考へ度のは、第一、耶蘇が二人のお弟子を遣はし「主の用なり」といふて驢馬の子を徵させ給ふと、其持主が快く直に之に應じた事である。私共は平生自分の爲め、又家族の爲めの用を知り、亦聊か國家の御用を辨へて居る。併し乍らそれと同時に、私共は主なる神樣の御用といふことを知つて居るであらうか。神樣は私共に生命と、健康と、智慧力量と、凡て無て叶ふまじき物とを與へた上に、亦御獨子耶蘇を與へて私共を罪から救ひ給ふたのである。それ故私共は、若し此有難い神樣の御用の爲とならば、それこそ驢馬の子は愚か、金錢をも、勞力をも、身をも、靈魂をも殘らず献げて、使ふて戴くことを榮譽と心得べき筈のものである。私は英國の或紳士が一年の收入金壹萬圓の内、壹千圓にて活計を立て、あとの九千圓を傳道及び慈善の爲に献げて居るといふ事。又他の紳士が一年の收入金四萬圓の内、千貳百五拾圓を生活費として用ゐ、殘金は悉く神樣の御爲めに用ゐて居るといふ話を聞たことがある。此等は金錢を主の御用の爲に献ぐることを知つた人達であると謂はねばならぬ。

昔預言者イザヤは「我誰をか遣さん、誰か我が爲に往くべき」といふ神樣の御聲を聞き。直ちに「主よ我茲に在り、我を遣はし給へ」と、答へ奉つたといふことがある。これは又自分の身と靈魂とを、主の御用の爲に献げたる一例である。私共は苟くも主の御用の爲とならば、何んでも惜まず献げて、其爲に使ふて戴くことを、榮譽と感ずる樣でなくてはならぬ。

第二、人々は衣を脱で路に布き、耶蘇に其上を通らせ奉つた。これは昔ザアキセス王がヘレスポンドの橋を越す時、道路に神木の枝を布き、又歴山大王がバビロンの國に入つた時、途上に花を散らしたなどいふのと同じく、これを敬愛する情を現はしたもの

と思はれる。而して彼等は又手にく〳〵櫻樹の葉をふりかざしつゝ、「ホザナよ、ホザナよ、主の名に由て來る王は幸なり」といふて、讃美し乍ら行軍したのである。當時其行列に加はつた者の中には、嘗て耶蘇に其見えない目を開かれた者あり、立てない足を立たせられた者あり、鬼を逐出された者あり、死より蘇らされた者あり、罪惡の奴隷たる境涯より救はれて今は善良幸福なる世渡して居る者も、多くあつたとであらう。彼等は皆耶蘇に對する感恩の情に滿され、其乘り給へる驢馬の子の後や先きに行軍しながら、大聲に呼はりつゝ進んだのである。約翰傳に由れば、當時耶蘇を陷れ樣と隙を窺ふて居つたパリサイ宗の信者等は、互に相語つて「汝等が謀る所の益なきことを知らざるか、見よ世は皆彼に從へり」と、言ふたとあるのを見れば、それが何んなに彼等に對する示威運動となつたかを察することが出來る。今日救世軍の者共が折々相寄つて行列をなし、以前は酒飲、道樂者、刑狀持、乃至利己一遍の我儘者であつた人達が、今は耶蘇基督に救はれて幸福に日を過して居ることを證明して歩く如きは、一種の有力なる運動の仕方であると謂はねばならぬ。之は亦昔驢馬の子に乘り給へる耶蘇の前後を取卷て、歌ひつゝ、叫びつゝ、エルサレムに入つた人々の大行軍に最も似よつた、神の軍隊の示威運動である。それが若し罪に眠れる世の人を醒まし、惡の勢力に屈伏して居る者共を起たしむる助ともならば、之は隨分盛んに實行して然るべき催ではあるまひか。

第三、耶蘇はパリサイ宗の信者が、其お弟子達を責めて、靜にさせて戴き度といふのに答へ、「此輩若し默りなば石叫ぶべし」と仰せられた。此の如く耶蘇の救の力を知り神樣の愛を經驗して居る者が、默つて之を世の人に證言せずに居らるゝ筈がない。それ故天路歷程の著者ジョン、バンヤンは、無學な平民の癖に說敎するといふ廉を以て入牢申附られたが。「若し出獄を許してやつたならば、最早基督のことを說敎しないか」と問はれて。「今日放免になつたならば、明日は必ず說敎する」と答へたのである。ビリィ、ブレイといふ石炭の坑夫は、亦深く神樣の愛を味ふた人であるが、いつでもニコ〳〵と喜んで居り。處嫌はずハレルヤ、アメンなどゝ大聲に叫んで神樣を讃美する故。或人が「餘り騷々しいではないか、も少し靜かにしたが可らう」と忠告すると。

答へて「併しこれは私の責任ではありませぬ。譬へば桶に一ぱいの水を入れた上に、更に水を注げば自然に外へ溢れ出ると同じく。神様は既に胸に滿る御惠を下された上に、尙後から後からと幾らでも御惠を注ぎ給ふ故、つひ外に溢れてハレルヤとなり、アメンとなるので致方がない。これは私のすき好んですることではなくて、全く神様の爲さることである」と、いふたさうである。詩篇に「讃美は直き者に適はしきことなり」とあり。私共は亦神様を讃美せずには居られぬ程、有難い宗敎を飽く迄も身に實驗して居らねばならぬ。

第四、それと同時に私共は、又此「ホザナよ、ホザナよ」といふ叫聲を聞て四五日の後、早くも同じ耶蘇の周圍に、「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と罵る聲が起つたことを忘れてはならぬ。固よりこれを叫んだ者は前の時と全く同じ群衆ではなかつたであらう。併しながら多い中には、亦前に「ホザナよ、ホザナよ」と叫んだ口から、今は早くも「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と呼はつた者も、まんざら無かつたとは謂ひ難からう。人情は眞に反覆常なきものである。それ故ナポレオンは以太利、墺太利二國との戰爭に打勝つて歸國した時、行列、イルミチーション、花火、祝砲、半鐘などと、大騷ぎをして歡迎して居る佛蘭西人を冷かに打眺め、「此思慮なき國民は、一旦風向が變つたならば、今と全く同じ熱心を以て余を斷頭臺上に送るであらう」と言ふたさうである。此の如く世上の毀譽褒貶は、一向當にも、賴りにもならぬものである。それ故私共は唯萬事の御判斷を、天の父なる神様に仰ぎ、いつも我が良心に善と認むる所を眞直に實行することに由てのみ、眞に安心滿足を其胸の中に見出すことが出來るものである。

第二十八章　國家と宗敎

參考（馬太傳二十二章十五節至二十二節）

「カイザルの物はカイザルに歸し、又神の物は神に歸すべし。」（太二二〇二一）

反對者は如何にもして耶蘇を陷れ度と思ひ、種々難問をかけたり、又は間者を送つたりなどして、工夫をめぐらしたが、どうも思はしく行かないので。果は平生犬と猿と

の間柄なるパリサイ人とヘロデ王の徒黨とが一つになり、耶蘇に難題を持かけて來る程になつた。

「師よ、あなたは眞實を以て神樣の御敎を說てお在になりますが、一體今日羅馬の屬國たる我がユダヤの人民は、皇帝カイザル、オーグストに稅金を納むべきものでありまするか、如何でせう」と、此ういふことを尋ねた。そのわけは、耶蘇が若し稅金を羅馬政府に納めよと言はれたならば、彼は愛國心のなき人である、賣國奴であるといふ風に、一般ユダヤ人民の反抗を惹起すべく。若し又稅金を羅馬政府に納むるには及ばずと言はれたならば、これはカイザルに叛く者である、政府に逆ふ者であるといふて之を訴へ樣とする、極めて狡猾なる計略であつた。

併し乍ら耶蘇は直ちに其謀計を看破り給ふた。それ故先づ「僞善者よ、何ぞ我を試むるや」といふて、之を叱りたる後。やがて「汝等が納稅に用ゆる貨幣を我に見せよ」と仰せられた。そこで何心なくデナリといふ、參拾錢ばかりの銀貨一枚を取出して其御手に渡すと。耶蘇は銀貨の上に鑄てある肖像を示し、「これは誰の肖像か」とお尋ねになつた。「カイザルの肖像でありまする」といふと。直に答へて、「然らばカイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸すべし」と仰せられたが。これには流石のパリサイ人や、ヘロデの徒黨も、一言もなくて竊と退き下がつたといふことである。

そこで此「カイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸すべし」とは、如何なる意味の御語かと考へて見るに、これは私共が國家に對しては忠實に其國民たるの義務を盡すべく、神樣に對しては亦眞面目に其神樣の子供たる本分を盡すべきことを敎へられたるものである。

第一、今試みに基督信者が國家に對し、又は皇室に對する義務に就て、聖書の他の所には何んと敎へてあるかと調べて見るに。使徒パウロは「上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし。蓋神より出ざる權なく、凡そ有る所の權は神の立て給ふ所なれば也。此故に權に悖ふ者は神の定めに逆くなり。逆く者は自ら其審判を受くべし。汝等貢を納めよ。彼等は神の用人にして常に此職を掌れり。汝等受くべき所の人には之を與へよ。貢を受くべき者には之に貢し、稅を受くべき者には之に稅し、畏るべき者には

畏れ、尊ぶべき者は之を尊べ」といひ。使徒ペテロは又「神を畏れ王を尊ぶべし」と教へて居る。どちらも上に立つ君主を敬ひ、國家に對する務を忠實に盡すべきことを教へられたるものである。加之これを基督教の精神から考へて見るに、元來宗教は人の心の底迄鑒給ふ神様の前に誠を盡すことを教へるものであるから、然ういふ教に從ふ人間が、自然に國を愛し、亦君に忠義を盡す様になるのは當然の事である。新島襄氏は熱烈なる基督信者であると共に、亦至誠の愛國者であつた。其米國を去つて日本に歸朝する前に、我が邦に基督教主義高等教育機關の必要を論じたる一文を公けにせられたが、其中に舊約聖書、詩篇にある一句を作りかへて、「嗚呼日本よ、汝は亞細亞第一の美國なり。若し我汝を忘れなば、我が右の手に其巧みを忘れしめ給へ。我が舌をして我が腭につかしめ給へ」といひ。讀む者をして其熱誠なる愛國心に感動せざるを得ざらしめたのである。此の如く眞正の基督信者は、亦眞正の忠君愛國の人であることを知らねばならぬ。

第二、耶蘇は「カイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸すべし」と仰せられた。デナリといふ貨幣にはカイザルの姿を鑄込んであつた如く、人の靈魂には亦神様の姿が刻んである。人は皆神様に肖せて造られたる貴き靈魂を有つ者であるから、之を穢さないばかりか、之を洗ひ潔め、神様の聖旨に適ふ様保存せねばならぬ。人若し潔からざれば主に見ゆることを得ず。」又「心の清き者は幸なり、其人は神を見ることを得べければ也」と、あるのは其事である。私共は耶蘇に由て罪より救はれ、聖靈に由て心を潔められて後、始めて眞に「慾の敗壞を脱かれ神の性質を有つ」た人間となることが出來るのである。

第三、必竟するに、國家は其人民から成立つものにて、人民は又其品性の如何に由て優り劣りを定めらるべきものである。それ故國に眞正の宗教が行はれて、其人民が皆善良、眞實、勤勉、慈愛、敬虔の人となるに愈りて、國家の隆盛を助くるものは他にない。故ブース夫人は或時救世軍の事業が如何に國家を益するかといふことを論じて、左の十ヶ條を擧げられたことがある。

（一）救世軍は善良なる市民を造ることに由て、國家を益するものである。

(二)救世軍は他人の益を圖り他人を救ふ爲に働く人民を造ることに由て、國家を益するものである。

(三)救世軍は又工場、商店、會社等に、善良なる道德的の感化を及ぼす人物を造ることに由て、國家を益するものである。

(四)救世軍は婦人の地位を高め、又不幸なる婦人を救濟することに由て、國家を益するものである。

(五)救世軍は道樂者を堅氣にすることに由て、國家を益するものである。

(六)救世軍は人をして智慮分別のあるものとならしむることに由て、國家を益するものである。

(七)救世軍は人の靈魂を救ふて其身の上を好くし、其家庭を改良せしめ、これに由て國家を益するものである。

(八)救世軍は少年子弟の幸福の爲に盡力することに由て、國家を益するものである。

(九)救世軍は勤勉にして信用するに足る勞働者を造ることに由て、國家を益するものである。

(十)救世軍は警察、監獄、又は養育院の世話になるべきものを未然に救ふことに由て、國家を益するものである。

或時亞弗利加の一酋長が、英國のヴイクトリア女皇に見えた時、其國が今日の隆盛に至りたる原因をお尋ね申上げると。女皇は手に一卷の聖書を取り、之を其酋長に示しつゝ、「英國今日の富强は全く此一卷の書にもとづくものである」と、言はれたと傳へられて居る、將來我が日本と日本國民とを眞に偉大ならしめん爲には、亦どうしても基督の宗敎を盛んに斯國に廣むる必要があるのである。

第二十九章　晩　餐

參考（約翰傳十三章一節至三十五節）

「汝等も亦互に足を濯ふべし。」（約十三〇十四）

十二使徒の中に一人、イスカリオテのユダといふ者が居つた。他の多くの人々と同じ

く、耶蘇は軈て此世に王國を打建て、其上に立て政事を行ひ給ふのであらうといふ樣な考へを有ち。然うなつた日には自分は差向き其大藏大臣位にはといふ樣な野心を蓄へて居つたが。追々耶蘇の爲さる所を見て居ると、どうも其御胸中に天下を取つて之を支配し樣といふお考へがないらしい。どこ迄も唯下層の人民を相手にし、傳道及び慈善救濟の如き事のみ行ふてお在なさる。果は間もなく敵の手にかゝつて、死んで多くの人々の贖になるのだなどゝ、妙に不吉なことさへ言ひ出されたので、ユダは到頭全く失望した。甚く失望した結果は、兼々耶蘇を敵とし憎んで居る祭司の長等の所に行き、「若し耶蘇を金に換へて渡す手筈をしたならば、幾ら呉れるか」といふ樣な申入をすることとなつた。祭司の長等の方では此間から何んとかして耶蘇を陷れ、これを亡き者にし度と頻りに謀議を凝して居る處であつた故、此意外の申出を喜んで受納れ、事成就の曉には金參拾圓を支拂ふべき約束を取結んだのである。これは水曜日の出來事であつた樣に見える。木曜日の夕方、耶蘇はエルサレムにて或人の二階座敷において弟子達と晩餐を共にし給ふことゝなつた。其席上耶蘇は座を起ちて上着を脱ぎ、手拭を取て腰にまとひ、盥に水を入れて順ぐりにお弟子達の足を濯ひ、又其腰にまとひたる手拭にて之を拭き始め給ふた。ペテロは恐縮して、「主よ汝我が足を洗ふ可らず」といふて之を拒むと。耶蘇は答へて、「若し我汝の足を濯はずば、汝は我と關係がないぞ」と言はれたので。ペテロは喫驚し、「それでは何卒足とのみいはず、手をも頭をも濯ひ給へ」といふた。殘らず其お弟子達の足を濯ひたる後、耶蘇が宣ふ樣。「汝等は我を師と呼び、又主と呼んで居る。我は汝等の師にして亦主なるに、尙汝等の足を濯ふのであるから。汝等も亦互に足を濯はねばならぬ。我は汝等に模範を示したのである。此は我が爲したる如く汝等にも同樣の事を行はしめん爲である。併し乍ら聖書に「我と偕に食する者我に背きて踵を擧げし」とある如く、斯くして今夕我と食事を共にする汝等の中から、一人裏切をして我を敵に賣す者があるのは、如何にも殘念千萬の事である」と。仰せられるのを聞て、お弟子達は仰天した。十分お言葉の意味を諒解することは出來難いけれ共、何んでも大變な禍が脚下に起りかゝつて居る樣な氣がするので、何れも非常に心配した。其うちにユダは席を離れて、尙も敵と打合せをなさん

爲に出て行つたのである。後にて耶蘇は尙も言をつぎ、「我今新きを誡を汝等に與へる。それは汝等相愛すべしといふことが是れである。我が汝等を愛する如く汝等も相愛せよ。汝等が若し互に相愛するならば、之に由て人々は汝等の我が弟子たることを知るであらう」と、敎へ給ふた。

今此耶蘇が最後にお弟子達と共にせられたる晩餐の御物語に就て、少しく實際上の敎訓を尋ねて見るに。

第一、ユダが耶蘇を賣る樣になつた最大の原因は、其失望であつたことは前に言ふた通りである。西洋の寓言に惡魔が或基督信者を墮落さする計略を評議した時、或は其男に罪の樂みを說て之を誘はふといふ者あり。或は善事の窮屈なることを說て之を嚇さふと建議する者もあつたが、惡魔の大將ベルゼブルは何方の說をも採用しなかつた。やがて今一の惡魔が、「私が往て彼の男を失望させ、それを手がゝりに追々墮落させてやりませう」といふのを聞て、ベルゼブルは橫手を打ち、「其計略にて往て彼の基督信者を陷れて來い」といふて、之を出しやつたといふことがある。此の如く人は失望した時には殆んど何んなことにでもなり兼ぬものである。「神樣も失望した人を用ゐては、何事をも爲し給ふことが出來ぬ」とか。又「失望は即ち無神論である」など敎へてあるのは、大きに意味のある言である。ユダは又此失望の外にも、金錢に迷ふた爲め、世俗に媚びた爲め、或は自分勝手なことを思ひ過した爲め等、種々なる理由により、救主を敵の手に賣す如き大外れた犯罪に至つたものかと思はれる。油斷してはならぬことである。

第二、耶蘇は自ら其お弟子達の足を濯ひ給ふた。「我は汝等の師にして亦主なるに尙汝等の足を濯ふのであるから、汝等も亦互に足を濯はねばならぬぞ」と、耶蘇は其お弟子達に敎へ給ふたのである。或時印度の救世軍にウイリスリヤ大佐といふ土人の名將があつた。巡回して某小隊を訪ねると、其受持士官なる大尉と中尉とが喧嘩をして居り、双方の言ふ所が何方も一通りの理窟があつて、容易に是非を判斷し兼たのである。すると大佐は中尉に命じて盥に一ぱいの水をくんで來させ、手拭を取つて腰に纏ひ、二人の士官を並べてそこに座らせ、そろ〳〵其足を濯ひ出したので。二人は忽ち

聖書にある耶蘇がお弟子達の足を濯ひ給ふた物語を思ひ起した。「全く私共が惡うござりました。お互に理窟ばかり言ふて、愛も謙遜もなかつたのが、此度の爭論のもとでござりまする」と。二人は心から其了簡違を悔い、以來相一致して有益なる働をする樣になつたといふことである。此の如く耶蘇は身を以て私共に最も好き模範を見せてお在なさる。それ故私共も亦往て互に他人の足を濯はねばならぬ。即ち謙遜つて人に事ふる者となり、殊に他人の落度を補ひ、他人の弱點を救護する爲に、力を盡す者とならねばならぬ。

第三、耶蘇は又新しき誡を其お弟子達に遺し給ふた。即ち「汝等互に相愛すべし」といふ、新しき誡を與へ給ふたのである。然らば私共はどんな風に相愛すべきかといふに、それは耶蘇が私共を愛し給ふ如く、私共も互に相愛すべきものだといふのである。これは何ういふ廣大なる御誡であるか。耶蘇は私共の爲に其命を與へ給ふた。而して私共は其耶蘇の如き御愛心を以て、亦人を愛すべきことを命ぜられて居るのである。耶蘇は又私共が若し互に相愛するならば、之に由て世の人は私共が耶蘇のお弟子たることを知るであらうと仰せられた。此の如く眞の基督信者の徽章は其愛の心、又其愛の行でなくてはならぬ。私共は唯愛の人たることに由てのみ、神樣の子供、又基督の僕といはるべきものである。初代の基督信者が羅馬の政府から非常なる迫害を蒙り、十字架にかけられ、又は火あぶりにされなどして居つた頃、それでも互に相愛し、相助けて最後まで變らぬ有樣が如何にもいぢらしいかつたので。之を迫害する者共迄が感じ入り「見よ、彼等は如何に相愛するものぞ」といふたと傳へられて居る。「主は我等の爲に生を捐て給へり。之に由て愛といふことを知りたり。我等亦兄弟の爲に生を捐つ可し。」私共は唯愛の實行者たることに由てのみ、眞に耶蘇のお弟子の一人と稱へらるべきものである。

第三十章　ゲツセマ子

參考（馬太傳二十六章三十六節至四十六節）

「我が心の儘をなさんとするに非ず、聖旨に任せ給へ。」（太二六〇三九）

橄欖山の西の麓にゲッセマヲの園といふがある。耶蘇は木曜日の夜深け迄、十一人のお弟子達とエルサレムの二階座敷にて物語りたる後、打連れて此ゲッセマヲの園へ祈禱をしにお出になつた。入口の處に其八人を留め、ペテロ、ヤコブ、ヨハヲの三人だけを隨へて園の内に入り。彼等に對ひ、「今我が心は甚く憂へて死ぬばかりである故、こゝに待ちて我と偕に目を醒して居れ」と、言ひのこし。少しく進み往き俯伏して祈り給ふた。「我が父よ、若し叶はゞ此杯を我より離ち給へ。されど我が心の儘を成さんとするに非ず、御旨に任せ給へ」と。耶蘇が「此杯」と仰せられたのは「此苦痛」といふ樣な意味であつたらうと思はれる。斯くて後三人のお弟子の傍に來て御覽になると、彼等は疲れて睡つて居つた。そこで耶蘇はペテロに對ひ、「斯く一時の間も我と偕に目を醒し居ることが出來ぬか、惑に入らぬ樣目を醒し且つ祈れ」と宣ひたる後、二度往て前と同じ祈禱をなし。今一度來て御覽になると、三人のお弟子達は復前の如く睡つて居つた。「これは其目が疲れたからである」と言ひつゝ、三度往て同じ言を以て祈り給ふたが。其御汗は血の如く滴つたといふことである。祈り終つて後重ねてお弟子達の處に來り、「起きよ、我が罪人の手に渡さるべき時は近いたのである」と、仰せられて居る處へ。裏切者のユダが先に立ち、劍と棒とを携へたる多人數を案内し乍ら、近づいて耶蘇に接吻し、それを相圖に彼を惡人原の手に渡し奉つることゝなつた。

私共は今、ゲッセマヲの園に血の汗を流しつゝ、神樣に祈り給ふた耶蘇を思ひ浮べて、感ずる所が多くある。

第一、私共は先づ耶蘇が、何んなに孤立して居給ふたかといふことを考へねばならぬ。成程數日前御入京の際には「ホザナよ、ホザナよ」と叫んで、之を歡迎した者もあつたに相違ないが、それとて何處迄耶蘇の御心中を諒解した者が其中にあつたことやら、覺束ない話である。同時に一方にはパリサイ宗の信者も、サドカイ宗の連中も、政治家も、宗教家も、學者も、一般人民も、擧つて耶蘇を厭ひ且つ憎んで、機さへあらば之を亡き者にし奉らうと企て居る形勢である。お負けに十二使徒の一人なるユダは、裏切をして其主を敵の手に賣すべき約束をして居る樣な次第。お弟子達の中で先輩なるペテロ、ヤコブ、ヨハヲは、御一緒に園の中迄お伴をすることを許され乍ら、日頃の

疲勞と夜の深けた爲とではあらうが、主が血の汗を流して祈り給ふ間に睡るが如き爲體である。此時耶蘇は天地の間に唯一人全く孤立して居給ふた者と謂はねばならぬ。此の如く眞に神樣の聖旨を極度迄行はふと思ふ者は、亦往々天地の間に唯一人孤立することがあるのを覺悟せねばならぬ。社會は私共に反對し、友達は私共を棄て、同志の人は誤解し、家族親戚は容れず、其爲めに私共は唯天の神樣を賴りに、單獨にて世に立ねばならぬ如き場合のあることを豫期してかゝらねばならぬ。併し乍ら神樣と御一緒に在るのは、全世界の人間を味方に持つよりも心强いことである。「我等と偕に在る者は彼等と偕に在る者よりも多し。」「我獨り居るに非ず父我と偕に在る也」とは、此事ではないか。

第二、ゲツセマヲの園に於ける耶蘇は死ぬばかりの御苦みに悶へ給ふた。昔モーセは二百萬のイスラエル人民が、我儘勝手を行ふて神樣に背くのを見て之を持餘し。「此人民は私が孕んだのでも亦生んだのでもないに、何故乳呑兒の世話する親の如く彼等の世話をなさせ給ふか。此多數の人民は到底私には負ひ切ることが出來ませぬ。萬止むを得ずば寧ろ私の命を奪り給へ。此困苦を見せしめ給ふな」と、神樣に嘆き訴へたことがある。大將ウイリアム、ブースが八十四年の神々しき生涯の後、臨終の時が近づいて幾度か人事不省に陷つた時、それでも彼は夢心地に、「噫、此氣の毒なる人民の罪と悲みとは、もう此上私には負ひ切れない」と太息をつくのを聞て。傍に介抱して居つた季女のヘルベルグ夫人が「愛する大將よ、あなたは氣の毒な人達の罪と悲みとを今日迄負ふてお在になつたから、最う宜しいでせう。安心してお休みなさい」と答へたが。其聲は果して大將の耳に入つたか、何うか、不確實であつたといふことである。此の如く賴邊なき同胞の罪と禍とを我が事の樣に感ずる聖徒は、時として他人に想像の出來ぬ切なる悲哀を胸に感ずるものである。況して救主耶蘇が天下萬民の罪惡と沈淪とを悉く我が一人の責任と感じつゝ、ゲツセマヲの園に天の父なる神樣に訴へ給ふた時の、其張裂ける樣な御胸の中は、到底私共の考へ及ぶべき事ではないのである。それに就ても私共は、もつと〳〵世の不幸なる罪人の上を思ひ、其靈魂の事を心配する熱情を與へられ度ものである。

第三、耶蘇は「我が心の儘を成さんとするに非ず」といひ給ふた。ウイリアム、ペンといふ人の言に、「啻に不道理なる己に克つのみならず、亦道理に合ふたる己に克たねばならぬ」といふてある。私共は惡い事をやめるのみならず、亦その當然行ふて差支なき事と雖も、若し差控へた方が一層神様の御榮と人の救の爲になる如き場合には、喜んで之を克己する樣でなくてはならぬ。パウロが「基督の福音に阻隔なき樣に、我等凡ての事を忍ぶ」といふたのは、此意である。

第四、耶蘇は又進んで「聖旨に任せ給へ」と祈り給ふた。或人の言に「聖旨を成さんとするに非ず我が心の儘をなさせ給へと祈る所に、樂園は沙漠となり。我が心の儘を成さんとするに非ず聖旨に任せ給へと祈る時に、沙漠は樂園に變る」といふてある。

私共は此世に至仁至愛なる神様の御支配の行はるゝことを知り、どんな苦しい境涯に於ても、安んじて一切を其御手に任せ奉る樣でなくてはならぬ。或時信仰の篤い一人の老女を其長患ひの病床に訪ひ。「お婆さん、貴女も好いお年だが、それでも今一遍達者になつて、もつと長生をし度と思ひますか。それとも好加減で天國に行て安然に過し度と思ひますか」と、問ふ者があると。老女は答へて、「何方とも唯聖旨にお任せ申すばかりで」といふ。「それでも若し神様が、どちらでも望の通り叶へてやると仰せられたなら、貴女はどちらを擇みますか」と問ふと。「さあ、それを定めるとも矢張聖旨の儘にお任せ申す外はありませぬ」といふたさうである。フレッチャー夫人の言に、「私の宗教は唯四字にて之を言盡すことが出來る。それは "Thy will be done" (聖旨に任せ給へ) といふ、唯それ丈である」とのことであつた。聖書に昔ヨブといふ人が七難八苦に取圍まれながら、それでも堅く神様に信頼し、「彼我を殺し給ふとも我は彼に依頼まん」といふたと書てある。私共も亦平生我が心の儘をなさんとするに非ず、聖旨に任せ給へ」といふ、眞の信任と服從とを以て、能くゲッセマ子の耶蘇を學び奉つる者とならねばならぬ。

第三十一章　十字架

—参考（路加傳二十三章十三節至四十九節）

「汝若し神の子ならば十字架より下りよ。」（太二七〇四十）

金曜日の未明に耶蘇は捕られて祭司の長の邸に曳れ、集議院にて死刑に處すべきことを議決せられたが。ユダヤ人は死刑を行ふ權力がないので、改めて羅馬から派遣せられ居れる大守ピラトの公廳に送られ、今度は又其ガリラヤ出身の故を以て一度ヘロデ、アンテパスの方に廻され、更にピラトの公廳にて再度の審問を受られた。がユダヤ人が頻りに「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と叫んで、どう制してもをさまらない故、ピラトは耶蘇の罪なきことは十分認めながら、心弱くも人々の望むが儘に、之に十字架の刑を申渡すことゝなつた。此國の規定にて十字架にかけらるゝ程の罪人は、皆自分の十字架を負ふて、刑場迄往くのであるが。お痛しや、耶蘇は引續き御心痛の後のことて、氣も體も疲れ果て、御自分で其十字架を負ひ給ふことが出來ず、仕方がないので。羅馬の兵卒はそこを通りかゝつたクレヱのシモンといふ者を捉へ、否應なしに代つて之を負ふて、其刑場なるエルサレム市外のカルバリ山といふ處迄往かせた。而して耶蘇はそこにて二人の盜賊の間に、十字架にかけられ、貴き御血汐を流して、世

界萬民の罪の身代りとなり給ふたのである。

今熟々耶蘇が十字架にかゝり給ふた當時の御有樣を考へて見るに。

第一、カルバリ山の上に三本の十字架が立つて居り、眞中のは耶蘇、其兩側のは死罪に當るべき二人の盜賊であつた。盜賊の一人は十字架の上にて悔改め、耶蘇から「今日汝は我と偕に樂園に在るべし」といふ御聲を聞たといへば。此十字架上の三人の內、一人は罪を知らざる神樣の御獨子、一人は罪を赦されたる罪人、今一人は最後迄悔ることを知らなかつた罪人であつたことが分る。此の如く罪を犯して悔ることを知らざる者も、罪を悔改めたる者も共に十字架の苦みを受け、罪なくして他人の救の爲に盡し給ふ耶蘇さへも、亦同じく十字架上に死給ふたものとすれば。人間は何んな世渡をするにしても、どうせ何等かの十字架なしには濟ぬものだといふ道理が分る。其通り人間は何うせ何等かの苦勞難儀の十字架なしに、世を渡ることが出來ないものとすれば、私共は寧ろ進んで一番苦勞し甲斐のある苦勞を擇ぶべき筈ではないか。即ち自分の心得違や罪惡の報として、恥しい目や、つらい目をするのでなく、却つて耶蘇と同

じ様に神様の御榮の爲め、又世の救の爲めに其十字架を負ふのは、一番望ましいことではあるまひか。リビングストンは商人が利の爲めに往く處には、私も神様の御榮の爲めに往くといふたことがある。其如く私共は又世の人が名利の爲め、肉慾の爲に浮き身を窶す以上に人に善を行ひ、此世に神様の御國を打建る爲に苦勞して居る様でなくてはならぬ。

第二、クレヱのシモンは其初、強て十字架を負はされて當惑した。併し乍ら後に其十字架の主が如何なる御方にて、亦其十字架は何んの御爲であつたかといふ意味が分つた時には、感激して自分ばかりか妻子も共に眞の信仰に入り、程經て後使徒パウロがシモンの妻に會ふた時の如き、まるで我が生みの子の如く大事にして呉れたといふことである。此の如く耶蘇の十字架は其初意味の分らぬ間は、厭なもの、又迷惑なものである。併し乍ら一旦其道理が分つて見れば、耶蘇の苦みに與かるのは人間最上の榮譽である、又十字架を負ふて世の救の爲に苦勞する位貴き生活はないものである。

第三、往來の人々も、祭司の長も、學者も、果は並べて十字架にかけられたる盜賊迄も、耶蘇を罵り、「汝は人を救ひて己が身を救ひ能はぬ者である、汝若し神の子ならば今十字架より下りよ」と叫んだ。神様の御子ともある耶蘇の事故、下り様と思へば十字架から下りることも出來たであらう。併し乍ら耶蘇は其儘に留まり給ふた。そのわけは唯十字架に留り、十字架に死ることに由てのみ、世の救は成就せらるべきことを知り給ふたが故である。此の如く今も私共が耶蘇の御名の爲めに十字架を負ふて、犧牲献身の生涯に足をふみ込む時、世の人は私共を嘲り笑ひ。「何んだ馬鹿々々しい。人を救ふなど言ふて自分を救ふ事さへ出來ぬではないか」といひ。時としては所謂基督信者、宗教家といはるゝ人々迄が、私共に勸告し、「幾ら献身でも最少し他にやり方があらう、もつと安樂で、體裁が好くて、人から尊敬を受けらるゝ手段もあらうではないか」と、いふ様な事を言ひ。私共の犧牲献身の精神に水をさして、其十字架より下りさせ様とするのである。併し乍ら私共は耶蘇と共に最後迄其十字架に留らねばならぬ。昔話にペテロが羅馬に傳道に行き、餘り骨が折れるので遁出しかゝると、途中で圖らず救主耶蘇に出あふた。「主よ何處へお出になりまするか」と尋ねると。答へて「我は